

翻訳

アリストテレス『政治学』第三卷（翻訳）

荒 木 勝

翻訳にあたって

この翻訳は、W D ロス校訂のオックスフォード版（ギリシャ語）をテキストとしており、オックスフォード大学出版局との協定にもとづいている。

アリストテレス『政治学』の第三卷から第八卷までの部分および第二卷の翻訳は、筆者の海外研修中（2000年10月から2001年9月まで）になされたものであり、筆者が一時帰国の折に入手した牛田徳子氏の訳『政治学』（京都大学学術出版会刊行、2001年2月）も、第一卷の翻訳の冒頭に記した参考文献に加えて翻訳作業において、参照させていただいた。牛田氏の訳業に厚くお礼申し上げます。また客員研究員としての滞在を許可して下さったケンブリッジ大学古典学部 of D. セドレー教授、M. ショーフィールド教授は筆者にアリストテレス研究の現状について貴重な示唆を与えて下さり、筆者の翻訳作業を励ましてくれた。両教授のご好意に対して厚く感謝申し上げます。

第一章

国家体制（ポリテイア）について、そのそれぞれが何であり、どのようなものであるか、を考察しようとする者にとって、ほとんど最初になすべき考察は、国家（ポリス）について、一体国家とは何であるか、を知ることである。事実、現在でも、人々の意見は一致しないのであって、ある人々はある一定の行為をなした主体は、国家（ポリス）であると主張し、他のある人は、国家ではなく、寡頭政権、あるいは僭主であると主張している。また我々の

見るところ、市民的政治指導者や立法家のすべての努力は国家に向けられたものである。また国家体制は、国家の中に住む人々のある種の組織である。しかし、国家は、多くの部分から合成されている他の統一体のように合成物に属するものであるから、まず第一に市民というものが検討されるべきであることは明らかなことである。というのは、国家は、市民の一定数の集団であるから。従って、どのような人を市民と呼ぶべきか、また市民とは一体誰であるかが考察されるべきであろう。実際、市民という対象は、しばしば意見の一致を見ない事柄である。というのは、すべての人が一致して同一の人を市民であると言うわけではないからである。すなわち、民主制の下で市民である者が、しばしば寡頭制の下では市民ではないということがあるからである。

従って、「わざわざ作られた市民」というように、何か別の仕方での市民という名称を得ている人々は度外視しよう。また、市民というものは、どこかに住んでいるということで市民となるわけではない（実際、居留民も奴隷も住居を共にしている）し、また、判決を受けたり、訴訟を起こす程度に法的な権利に与る者も市民ではない（事実、この権利は、条約にもとづいて市民達と共に居住している者達もこれを持っている [確かにこれらの人々はこの権利を享受している]）。しかしながら、多くの場所においては、居留民達は完全にはこの権利に与らないで、後見人を立てなければならず、従ってこのような共同関係に対して不完全な仕方でのみ関与していないのである）。しかしこれらの人々は、若年ゆえにまだ市民名簿に登録されない子供や、公務を免除された老人のように、ある一定の意味において市民であるというべきであろう。従ってまたこれらの人々は、全く無条件に市民であるというのではなく、子供がその「未成熟」ということで、また老人が「盛りを過ぎた」ということで、また何かその他のことで付加的条件をつけられた市民であるのと似た状態にある（実際、主張されていることは明らかなことなので、どのような付加的条件でも変わりはないであろう）。即ち、我々が今、求めているのは、無条件に市民である者、であり、付加的修正を必要とするようなこのような欠陥をもった者ではない。というのは、市民権を剥奪された者や追放に処せられた者についても、このような問題を提起することができるからであり、またそれを解決しなければならないからである。すなわち無条件的な

意味で市民というのは、裁判と統治職に関与すること以外のいかなることによっても決して規定しえないのである。そしてこのような統治職のあるものは、その期間が限られている。たとえば、その若干のものは、同一人が二度は決してその統治職に就くことを許されないとされているか、あるいは一定の期間の後にはじめて就くことができるようになっている。また、たとえば裁判人や民会員のように、無期限のものもある。しかし、おそらく人は、このような職は、統治職であるとは言わないであろうし、また、これによって統治に関与しているとは言わないであろう。しかしながら、最高の権限を有している者達に対して、統治の権限を彼らに対して否定するというのは笑うべきことであろう。しかしながら、議論が名称に関する事でもあるので、どちらでも相違はないということにしておこう。実際、裁判人と民会員に関して、これら二つを一括してどのように呼ぶべきか、について、両者に共通の名称がないのである。従って他と区別するために、それを無期限の統治職としておこう。従って、我々は、市民とは、このような統治職に関与する者と規定しよう。

従って、市民と呼ばれる者すべてに対して最も適合的な定義は、だいたいこのようなものである。しかしながら、ある事柄のその根底（ヒポケイメノン）をなしているものが種類において異なっており、これらのものの或物が根源的であり、また或る物が二次的であり、また或る物がその次となるような事柄においては、それらのものがそのようなものである限り、共通のものは全くないか、あるいはあったとしても極めてわずかであることを忘れるべきではない。そして、国家体制もまた、その種類において互いに異なっており、あるものは後続的（ヒステロン）であり、他のものは先行的（プロテロン）であることを我々を見るのである。実際、誤った国家体制や逸脱した国家体制は、誤りを犯していない国家体制よりも後（ヒステロン）のものでなければならない（いかなる意味で逸脱した国家体制というのか、については後に明らかとなるであろう）。従って市民なるものも、それぞれの国家体制によって、異ならざるを得ないのである。従って、今、言及してきたような者は、とりわけ民主制において市民でありうる者なのであって、別の国家体制においてもそれは可能であるが、必ずそうであるとは言えないのである。というのは、若干の国においては、人民の結合組織（デーモス）もなく、慣習

として民会が開かれることなく、特別に召集された会議だけがあり、裁判も、分野別に判決を出しているのである。それはたとえば、ラケダイモン（スパルタ）人におけるように、別々の監督官（エフォロス）が別々の契約について裁判を行い、元老達が殺人を、また同様に別の何らかの統治職が別の事件の裁判を行っている事態に似ている。カルタゴの場合も同様である。実際、ある一定の統治職がすべての裁判を行うのである。

しかしながら、市民についての定義は修正の余地があるものである。実際、他の国家体制においては、民会員も裁判人も、無期限の統治職ではなくて、統治職に応じて、期限を異にしている。すなわち、評議したり、裁判したりすることが、これらの期限付きの統治職の全部もしくは一部に認められており、またすべての事柄に関してか、あるいは若干の事柄に関して、彼らにそれらのことをなすことが許されているのである。

こうして、市民とは何であるか、については、以上のことから明らかである。実際、国政評議と裁判とに関わる統治職に参与する権限を有する者を、今や我々は、この国家の市民であり、そして、国家とは、端的に言って、生活の独立自存に十分なだけの、このような市民達の集団である、というのである。

(B1) 「国家は一つの合成物である」という箇所にバーカーは、次の注を加えている。

「この箇所の議論は、第一巻第一章の冒頭の箇所を想起させる。しかしながら相違点がある。第一章では議論は分析的であると同時に発生史的である。国家はその部分の分析という観点から考察されただけではなく、またその発生の観点から、すなわち他のものに発展転化する部分として考察された（家族となる婚姻関係、村になる家族、国家になる村）。ここでは議論は純粋に分析的である。しかしまた、以上のような相違点の帰結として、さらに新たな相違点がある。第一章では部分は複合的な社会であった（婚姻社会、家族社会、等々）。ここでは部分は個々の市民である。」

(B2) ある事柄とその根底（ヒポケイメノン）との関係について論じている箇所に、バーカーは次の注を加えている。

「これらの一般的な考察を市民権に適用する場合、我々は次のように言うことができる。(1)市民権の基礎(basis)は国家体制である。;(2)国家体制には様々な種類があり、その様々な種類に対応して、それは様々な特質を持っている。(3)それゆえ、市民権も様々な相違した特質を持っている。それゆえ共通の要素ないしは定義はほとんど存在しない。市民は、それを市民階級の成員として純粹に考察した場合は、極端な寡頭制における市民と極端な民主制における市民とでは、ほとんど、あるいは全く共通なものを持たない。;もっとも、もし我々が彼らを市民としてではなく、人間(human being)として考察するなら、彼らは、わずかではあるが、その資格(that capacity)において一つの共通の要素を持っているということができであろう。」

(訳注)これは極めて重要な注である。さらに付け加えるならば、王制、とりわけ絶対王制(アリストテレスの指摘するそれ)における市民というものをどのように考えるべきか、という問題が存在する。ニューマンの指摘する、アリストテレスの政治学の矛盾なるものもこの点に関わる。またバーカーは、ここで人間としての資格(capacity)について言及しているが、これがなんであるか、の説明がなされていない。もしそれが理性(reason, logos)というものであれば、J. ロックの政治学との異同が直ちに問題となるであろう。

(B 3) 「特別に召集された会議」にバーカーは次の注を加えている。

「これらの『特別に召集された会議』には、また特別に召集された成員だけが出席した。しかしアリストテレスはここでは会議の『時』に言及し、会議に出席する『人』には言及していないように思われる。民主制は定期的な会議を持っていた。これと異なる国家は不定期の会議しか持っていなかった。ここで扱われている期間の問題は、市民権を、期限の定めなき評議職および裁判職の保持と規定するアリストテレスの市民権の定義における、期間の問題への彼の強調と一致している。」

(B 4) バーカーはこの章の最後に複合体(compounds)と統一体(wholes)について次のような注を加えている。

「複合体(compound [syntheton])と統一体(whole [holon])とは、二つともアリストテレス哲学の専門用語である。複合体は類である。統

一体はその類の種である。複合体は、ニューマンの注記に引用されているグローットの定義によると、二つの種類から成る。その一つは、機械的な堆積物のような集合体であり、もう一つは有機的な音節のような集合物である。統一体は、この第二の有機的な集合物である。それらは、それらに有機的統一性を与えている一つの形相を持っているし、それらに一つの目的を与えている目的因を持っている。ポリスとはこのような統一体である。さらに統一体を内包した複合体という観念に関して、もう一つ注意すべき点がある。この観念は支配する要素と支配に服従する要素を含んでいるということである。言いかえれば、それは支配と服従のヒエラルキーを内包している。」

第二章

さて、実用的な観点から、人々は、市民を、両親ともに市民である者から生れた者とし、その片親、たとえば父、あるいは母のどちらかだけが市民である者の子は市民ではないとしている。しかし、ある人々は、さらに多くを求めて、二代、あるいは三代、さらにそれ以上前の先祖にさかのぼって、このことを要求している。しかしこのように政治的に荒く²⁾定義したとしても、この三代前、あるいは四代前の人々が、どのようにして市民となるのかについて、ある人々は疑問を提起している。

従って、レオンティノイ人ゴルギアスは、おそらく一面では当惑しつつ、他面ではとぼけて、次のように言ったのである。「白が白作りによって作られたものであるように、ラリサ人も、デーミウルゴス達によって作られたものだ。なぜなら、デーミウルゴスのうちには、ラリサ鍋を作るものもいるからである」。しかし、これは単純な問題である。というのは、人々が、前に述べた規定に従って国家体制に関与したことがあるならば、彼らはすでに市民であったということになるから。また事実、男の市民、あるいは女の市民から生れたということを、最初にこの国家に居住した者、あるいはこの国家を建設した者に適用することは全く不可能であるから。

しかしながらおそらく、たとえば、クレイステネスが僭主の追放後にアテナイで行ったように³⁾、革命的変革が生じた時に国家体制に関与した人々の場

合には、よりいっそうの難問が生じるであろう。事実、クレイステネスは多くの外人や奴隷出身の居留民を市民の属する部族（フューレー）に編入したのである。しかし、このような人々に関する争点は、誰が市民であるか、ということだけでなく、不当なやり方でなされたのか、正当なやり方でなされたのか、というところにある。さらに人は、この問題に関して、いっそう難しい問題を提起しうるであろう。すなわち、もし正当に市民になったのではないとすれば、不当であることと、偽りであることとは同じ事を意味しているから、その人は市民ではないということになる、との疑問が生じるであろう。しかし、不当な仕方と統治職にある人々をも我々は目撃しているわけで、彼らのことを、我々は正当な仕方ではないが、確かに統治している人々と言っているのである。それゆえまた、市民というものは、何らかの統治職によって規定されているのであるから（というのは、すでに述べたように、市民とは、このような統治職に関与する者であるから）、明らかに、このような人々も市民であると言うべきであろう。

(B) ゴルギアスの話についてバーカーは次の注を加えている。

「ゴルギアスは、ギリシャ語のデーミウルゴスについて洒落を言っているのである。というのは、デーミウルゴスという言葉は、一般的に職人という意味を持っているが、若干の国家においては、統治職の正規の名称として用いられていたから。しかし彼は市民権の起源を生れに因るのでなく、国家の行為に因るものであるとすることにおいて、まじめに市民権を定義しているのである。しかしながら、アリストテレスは、起源の問題には関心を示さない。ここでも、他のところと同様に彼は機能に関心を持っている。『あらゆるものはその本質的な性格をその機能から引き出す。』従って、彼の見解によれば、市民の本質的な性格を定義しようとすれば、その生れではなく、その機能に着目しなければならない、ということになる。」

第三章

しかし、彼らが正当に市民となったのか、不当に市民となったのか、につ

いては、先に言及した論争点につながっている。実際、寡頭制や僭主制から民主制が生じた場合のように、国家はいつ行為をしたのか、またいつ行為を為さなかったのか、について疑問を呈する人もいるのである（というのは、若干の人々は、公的契約の金を受けとったのは、国家ではなく僭主であると考えて、[国家の]債務を履行しようとせず、また国家体制のあるものは、力による征服によって存在しているのであり、公共の利益のために存在しているのではないと考えて、その他のこのような多くの義務を果そうとしないのである）。従ってもし、民主制がこのような仕方でも力によって統治されているのであれば、このような国家体制の諸々の行為は、寡頭制や僭主制下での行為と同じ程度だけ、この国家の行為であると言わねばならない。しかし、このような議論は、国家はどのような場合に同一の国家であると言わねばならないか、またどのような場合に同一ではなく異なった国家となると言わねばならないか、という難問に密接につながっているように思われる。そしてこの難問の最も表面的な考察は、土地と人間を持ち出すことである。実際、土地と人間は分割可能であり、それぞれ異なった人間が、それぞれに異なった土地に住むことができるからである。

こうしてこの難問は、むしろより容易に解決できるものと見なさなければならぬ（実際、ポリスなるものは多様に定義されうるので、ある意味においてこのような検討は容易なものとなるのである）。同様に、同じ土地に住む人間達についても、いかなる場合にその国家が単一であると見なすべきであるのか、が問題となる。実際、それは城壁によって単一の国家になるのではないから。というのはペロポネソスをも一つの城壁によって囲むということもできるであろうから。そしておそらく、バビロンもそのようなものであるし、また国家の外周というよりは民族（エトノス）の外周を持っているすべてのものもこのようなものである。実際、バビロンが占領された時、その国家の一部の人々は、三日間それに気付かなかったといわれている。

しかしながら、この難問については、別の機会に考察する方が有益であろう（というのは、国家の規模に関して、それがどのような大きさであるのがよいか、また、一つの民族〔エトノス〕からなるのがよいか⁴⁾、あるいはより多くの民族からなるのが有益かは、市民的政治指導者が忘れてはならない事柄であるから）。しかしながら、同じ人々が同じ所に住んでいる場合、その住

民の民族が同じであるならば、たとえ絶えずある人が消え去り、他の人が生れるとしても、あたかも、流水の一部がたえず、流れ来たり、また他の一部が流れ去るにもかかわらず、我々はふつう河や泉が同じものであると言うのを常としているように⁵⁾、その国家は同じものと言うべきであるのか。それとも、確かに人間はこのような理由によって同一であるというべきであろうが、国家は別固のものと言うべきであるのか(という問題が提起されるであろう)。というのは、もし国家というものが、一種の共同的結合体であるならば、すなわち、市民による国家体制への共同的関与であるならば、国家体制がその種類(エイドス)において異なり、また相異してくるのであれば、必然的に国家もまた同一のものではないと考えざるを得ないからである。それはあたかも、ある時には喜劇に、またある時には悲劇に登場する合唱団を、しばしばそこに登場する人間は同じであっても、我々はそれを別のものと言うようなものである。同様にまた我々は、他のすべての共同的結合体(コイノーニア)も複合体(スンセーシス)も、もしその合成の仕組(エイドス)が異なるならば別のものと言うのである。それはあたかも、同じ音よりなるハーモニーも、ある時にドーリス風に、またある時にフリーギア風になるならば、別のものであると言うようなものである。従って、事柄がこのようなものであれば、明らかに、主としてその国家体制に著目して国家は同一の国家であるというべきであろう。ただし、国家の名前については、同じ人々がそこに住もうと、全く別の人々がそこに住もうと、異なった名前と呼ぼうと同じ名前と呼ぼうと、同じことである。しかし、国家が別の国家体制に変革された場合、その負える支払い義務を履行するのが正しいことなのか、それとも履行しないのが正しいことなのかは、別個の問題である。

(B 1) 国家契約の履行について、バーカーは次の注を加えている。

「これは、1917年にツァーの政権を共産主義政権が継承した時に生じた一般的問題であった。」

(B 2) 国家の規模について、バーカーは次の注を加えている。

「従って、アリストテレスは、理想国家を構想するに至るとき [第7巻第4章] 市民的政治指導者にとっての実践的問題として、国家の規模を考察しているのである。こうしてこの章では、国家の規模の問題と国

家の同一性に関する理論的問題との関連という問題を未解決のままに残した。もっとも彼は、非常に大きな国家は現実的な同一性をもち得ないとの考えに傾いているように思われる。」

(B 3) 国家の同一性の問題について、パーカーは次の注を加えている。

「この大きな問題の本質は、国家の本性と同一性に関係している。国家の本性は、我々が国家を、ある特定の時期における実効ある国家体制と、それゆえまた権力を持った政府と同一視できるようなものであるのか、それとも国家の本性は、我々が国家を、ある特定の時期において実効性を持っていると見てよい特定の国家体制から、従ってまた権力を掌握している特定の政府から区別しなければならないようなものであるのか。前者の場合には権力を持った政府のいかなる行為も（新しい市民の創出、公的契約の締結等）(1)国家の行為であり、(2)そのようなものとして有効性を持ち、(3)政府の形態が変わった場合でも拘束力を持つ。後者の場合は、権力を持つ政府の行為は、少なくとも国家体制の革命的变化の後に権力を掌握した政府の場合は、(1)必然的に国家の行為であるというわけではなく(2)つねに有効性を持つわけではなく(3)政府の形態が変わった場合に、必ずしも拘束力を持つというわけではない。」

(B 4) パーカーは、この章全体に対して次のような注を加えている。

「アリストテレスは、こうしてこの章の最初に提起された問題、すなわち国家体制が変革された場合、そして時には僭主制が寡頭制が民主制に転換された場合、公的契約はする場合でもなお履行されねばならないのか、という問題を未解決のままにしている。彼がこの章の中で用いた論証からは二つの異なった結論が引き出される。(1)第一は、もし国家の同一性が国家体制に拠るものであるならば、新しい国家体制の国家は新しい国家であるから、必ずしも古い国家の行為に拘束されない、というものである。(2)第二は、もし共通善のためになされた契約は常に拘束力を持っているとすれば、その場合は、そのような契約は如何なるものでも、国家体制が変化しても拘束力を持ち、従って寡頭制のもとで共通善のためになされた契約は民主制のもとでもなお拘束力を持つ、というものである。公的契約の有効性の問題は国家の同一性の問題とは別の問題であるというアリストテレスの主張を導いているものは、おそらくこの

後者の考え方であろう。国家体制変革後の公的契約が効力を持つか否かの問題は、B. C. 404年と其の後のアテナイにおいて現実的問題として解決された。復活したアテナイ民主制は、その前の統治者、30人僭主によってスパルタとの間で締結された契約ですら尊重した。」

第四章

今述べた事柄に関連した問題として次の事を考察しなければならない。すなわち、立派な人間の卓越した力量（アレテー）とすぐれた市民の卓越した力量とは同一であると見なすべきか、それとも同一でないと見なすべきか、という問題である。しかし、この問題を考察しなければならないとすれば、まず第一に市民の卓越した力量（アレテー）について、その概略を把まなければならない。さて、船員が共同的結合体の一人であるように、市民もまたそのような一人であると我々は言ってきた。船員達はその働きにおいて、種々異なっているが（事実、漕ぎ手もおり、舵取りもおり、見張りもおり、また、他のこのような呼び名を持つ者もいる）、一方ではその各々の卓越した力量（アレテー）についての最も明確な定義は、各自に固有のものであるが、他方では、ある共通の定義が、すべての船員にあてはまるであろうことも明らかである。というのは、航海の安全こそ彼らすべての任務であるから。事実、船員達の各々はこの安全を手に入れようと努力しているのである。従って市民も同様であり、その各々は異なっているが、その共同的結合（体）の安全こそ、彼らの任務であり、そして国家体制とは、共同的結合（体）そのものである。それゆえ、市民における卓越した力量（アレテー）が、国家体制に関連したものであることも当然のことである。従って、国家体制の種類も数多くあるならば、優れた市民における卓越した力量（アレテー）に関しても、それが唯一つしかないということなどありうるはずもなく、また完成されたものでありうるはずはないことも明らかであろう。しかしながら我々は、善き人のことを、一つの完成された卓越的力量に即して善き人と主張している。

従って、市民としては優れた人であっても、人をして優れた人物とならしめる卓越した力量（アレテー）を持っていないという場合があるということも明らかである。なおまた、別様に難問を提起しても、最良の国家体制につ

いて同様の議論に達することができる。実際、もし国家が、すべて優れた人々から成り立っていることは不可能であり、しかも各人は自分の仕事に関しては、立派に為しとげるべきであり、またこのことは人の卓越した力量（アレテー）にもとづくものであるとするならば、すべての市民が同質であることは不可能であるから、市民における卓越した力量と善き人間のそれとは同一のものではないということになるであろう。というのは、優れた市民としての卓越した力量はすべての人に備るべきであるが、（国家は、実際このようであってこそ必ず最良のものとなるのだから）、善き人における卓越した力量がすべての人に備わること、いやしくも優れた国家にあっては、市民はすべて善き人でなければならないということでもないかぎり、ありえないことであるから。

さらに、国家は、各々異なった人間からできているのだから、端的に言って、動物が魂と肉体から、魂が理性と欲求から、家が夫婦から、財産が奴隷主と奴隷からなるように、国家も同様に、これらすべてのものから、またこれらに加えて、種類を異にした様々なものから構成されているのだから、すべての市民の卓越した力量（アレテー）が同一であることは決してないのである。それは、合唱隊の主役と脇役の卓越した力量が同一でないのと同様である。

従って、以上述べたことから、立派な人間の卓越した力量（アレテー）と立派な市民の卓越した力量（アレテー）とは端的には同一でないことは明らかである。

しかし、誰かある特定の人物においては、立派な市民としての優れた力量と立派な人間の優れた力量とは、同一ではないだろうか。実際、市民というものは必ずしも賢明ではないが、立派な統治者は、善き人で賢明であると我々は言っているから。またある人々は、統治者の教育そのものがすでに別様である、と言っている。それは、王の息子達が、馬術や戦争術の教育を受け、あるいはエウリピデスがある種の統治者向きの教育があると考えて、

「我に妙なる快きことでなく、……国家に必要なものを」⁶⁾

と言っていることから明らかな事である。しかし、たとえ善き統治者の卓越した力量（アレテー）と善き人間の卓越した力量（アレテー）が同一であるとしても、被統治者も市民であるのだから、市民における卓越した力量

(アレテー)と人間としての卓越した力量(アレテー)とは、ある特定の市民を別にすれば、端的には同一ではないであろう。というのは、統治者としての優れた力量(アレテー)と市民としての優れた力量(アレテー)とは同一ではないから。そしておそらく、この故に、イアソンは、一私人として生きる術を心得ていなかったという意味において、「僭主でない時には飢えて苦しんだ」と言ったのであろう。

しかしながら、統治することも、また統治されることも可能だということは、称讃されることであり、また、推奨されるべき⁷⁾市民の卓越した力量(アレテー)とは、立派に統治し、また立派に統治されることができるところにあると考えられている。従って、もしも善き人の卓越した力量(アレテー)が、統治に関わるものであり、市民の卓越した力量(アレテー)が、統治・被統治の両方に関わる卓越した力量だとすれば、この両者は同じような称讃を受けるべきものではないであろう。従って、時には統治者と被統治者は別個のものであり、同一のものを習得すべきではないが、市民は、その双方の事柄を理解し、その双方に関与すべきであると考えられるので、そこから何が導き出されるかは理解しうるところであろう。

実際、統治には、奴隷主的統治(デスポティケー)というものがある。我々はこれを生活必需的な事柄に関する支配のことを指して言うのであるが、統治者というものは、これらの物を作る方法を学ぶ必要はなく、むしろそれを利用する方法を知るべきである。それ以外のことは、奴隷の仕事である。実際「それ以外のこと」と私が言うのは、奉仕的な仕事を行いうるということを示している。また他方で奴隷の種類は種々多様であると我々は言っているが、それは、仕事が種々多様であるからである。手仕事労務者(ケルネース)はこれらの仕事の一部を占めている。実際、彼らは、その名が示すように、自分の手(ケイル)によって生活している人々であり、彼らの中には手仕事職人(バナウソス・テクニーテース)も入るのである。それゆえ、かつてある国々においては、極端な民主政治が生じるまでは職人階層(デーミウルゴス)は統治に関与しなかったのである。従って優れた市民的政治指導者も優れた市民も、以上のような仕方で統治されている者の仕事を学ぶ必要はない。もっとも、時に、自分自身のためにこれらの仕事をしなければならない時は別であるが。というのは、その場合には一方の者が奴隷主となり、他者の者

が奴隷になるということはないからである。

しかしながら、生れにおいて等しい人々や自由人である人々を統治する、ある種の統治も存在する。実際、我々はこれを市民的政治的統治（ポリティケー・アルケー）と呼んでいる。この場合は、統治者は、統治されることによって、この統治を学ばねばならないのである。あたかも、騎兵を指揮することは、自ら騎兵として指揮されることによって、また将軍として軍隊を指揮することは、自ら将軍に指揮され、中隊長、小隊長となった後に学ぶことができるようなものである。それゆえ、「統治されたことのないものは、善く統治することができない」ということは真実の言葉である。たしかにこれらの者（統治者と被統治者）の卓越した力量は異なっているが、善き市民は、統治される事においても統治することにおいても、その知識と能力を兼備すべきである。そして自由人の統治をその両面において心得ることこそ市民としての卓越した力量である。

また善き優れた人間の卓越した力量も二面的である。もし、統治者としての節制と正義の種類が、自由人ではあるが、被統治者である者のそれと異なっているとすれば、善き優れた人の卓越した力量も一つであるということにならないのも明らかなことである。たとえば正義がそうである。すなわち、正義は、統治したり、統治されたりすることにおいて種類を異にするものである。それは男と女の節制と勇気が相違しているようなものである（実際、もし男が勇敢な女と同程度に勇敢であるなら、その男は臆病と思われるであろうし、たとえ女が善き優れた男と同じように慎み深いとしても、その女はおしゃべりと思われるであろう。というのは、家政も男と女とは異なっているから。なぜなら、男の仕事は獲得することであり、女の仕事は保存することであるから）。

ただ思慮（フロネーシス）だけが統治者に固有の卓越的力量である。というのは、その他の卓越的力量（アレテー）は、被統治者にも統治者にも共通のものでなくてはならないように思われるが、しかし被統治者の卓越的力量（アレテー）は、思慮ではなく正しい思いであるから。実際、被統治者は笛作りのような者であるのに対し、統治者はそれを使う笛吹きのようなものである⁸⁾。

従って、善き人間の卓越的力量と立派な市民の卓越的力量とは同一のもの

であるのか、それとも異なったものであるのか、またどのような意味で同一なのか、どのような意味で異なっているのか、は以上述べたところから明らかである。

(B 1) 卓越的力量 (virtue) の同一性と多様性について、バーカーは次の注を加えている。

「ここで提起されている事柄の背後にある問題への一般的考察は、ニューマンの脚注においてよく概括されている。『ソクラテスは、卓越的力量というものはそれを持つあらゆる人において同一であることを要求しつつ、その同一性を説いた。それとは反対に、アリストテレスは、人の卓越的力量は、その人のなすべき仕事に応じて変化すると言ひ、また市民の仕事は国家体制に関連したものであるから、彼の卓越的力量も国家体制に応じて変化する、と主張する。良き市民の卓越的力量を良き優れた人のそれと同一視することは、それゆえ、国家体制間の相違を無視することである。』」

(B 2) ポリスという言葉とその派生語について、バーカーは次の注を加えている。

「ポリティカル political という語は、自由な国家 (ポリス) において、ポリティコス politikos 市民的政治指導者によって、ポリテース politēs 自由な市民に対してなされる行為、という意味を持っている。アリストテレスが五つの相互に関連した、また相互にその意味を分有し合っている言葉、polis, politēs, politeia, politeuma, politikos を使用していることが、『政治学』を翻訳する困難の一つとなっている。というのは、翻訳者はこれらの言葉を、個別的な、意味関連を分有しあっていない言葉に翻訳せざるをえないからである。polis はしばしば state 国家となり、politēs は citizen 市民とならざるをえない。politeia は constitution となり、politeuma は the civic body 市民体、あるいは別の言葉でいえば、国家体制によって主権的なものとして確立された団体、と翻訳されねばならない。politikos は、politician 政治家と訳することはできない (この言葉は英語ではそれ固有の含みを持っているから)。それは statesman 政治的指導者と訳さねばならない。ギリシャ語においては、それぞれの言

葉は、他の言葉と関連しあって、それ自身の意味連合を明確に持つことになる。」

第五章

しかしながら、さらに、市民に関しては、一つの難問が残されている。すなわち、市民とは、統治職への関与を認められた者というのが真実なのか、それとも、職人（バナウソス）もまた市民と見なされるべきか、という問題である。確かにもし統治職に関与しない者をも市民と見なすべきとするならば、今まで述べてきた卓越的力量（アレテー）がすべての市民のものになるということはあるえないであろう（なぜなら、このような者が市民となるのであるから）。他方で、このような者が一人も市民でないとするならば、その各々の者は、どのような地位にあるべき者と考えればよいか。というのは、彼らは居留民（メトイコス）でもなく、他国人（クセノス）でもないから。あるいは、このように議論を進めたとしても、何も非合理的ことは生じないといってよいであろうか。なぜなら、奴隷も、以上述べた者（居留民や他国人）ではなく、解放奴隷もまたそうではないからである。実際、国家が存続するためには欠かすことのできない者をすべて市民と見なすべきではないこと、この点は正しい事なのである。なぜなら、子供も、大人と同じような意味で市民であるというのではなく、大人が端的に市民であるのに対して、子供は条例付きの市民であるから。確かに子供は、市民ではあるが、完全な市民というものではない。従って、昔の時代には、ある所では職人達（バナウソス）は奴隷か外国人であった。それゆえに今でも多く職人達はそのような者からなっているのである。また、最良の国家は、職人達（バナウソス）を市民にはしないであろう。しかし、もしこの職人達が市民となるならば、前に述べた市民の卓越した力量は、すべての市民のものになるとは言えず、またただ自由人だけのものとも言えず、生活必需的な仕事から解放された人々に属するものと言うべきであろう。そしてこの生活必需的な仕事にたずさわる者のうち、一人の個人に奉仕してこのような仕事をする者は奴隷であり、公共的な仕事に従事するものは職人（バナウソス）や日雇い（セース）である。さらに、ここから、もう少し考察を進めた人には、彼らの状況がいかな

るものであるか、が明らかとなるのであろう。実際、こうすれば、すでに述べられた事も明らかとなるであろう⁹⁾。というのは、国家体制が多様である以上、市民の種類も多様であることは必然であり、とりわけ統治される市民の種類は多様であらざるを得ない。従って、ある国家体制においては、職人（バナウソス）も日雇い（セース）も市民であらざるを得ず、しかしまた他の国家体制においては、そういうことは不可能となる。例えば、人が貴族制と呼んでいる国家体制で、名誉ある公職（ティマー）がその人の卓越的力量や、その人の長所に基づいて与えられる国家体制の場合には、こういう事は不可能である。なぜならば、卓越的力量に係わる事柄を追求することは、職人（バナウソス）や日雇い（セース）の生活をする者には不可能な事であるから。しかし、寡頭制にあっては、日雇いは市民にはなり得ないが（というのは統治への関与は、高い財産評価にもとづくものであるから）、職人（バナウソス）はなりうるのである。実際に職人（テクニテース）の多くは富裕であるから。確かにテーベにおいては、十年間は市場から遠ざかっている者でなければ、統治職への関与を認めないという法律があった。しかし多くの国家体制においては、法は、若干の外国人を市民に迎え入れている¹⁰⁾。実際、ある民主制の国家体制においては、市民である母から生まれた子は市民であり、また多くの国においては、私生児についても同様の状況にある。とはいうものの、正当な市民の欠乏故に、このような者達を市民と見なしているのであるから（即ち、人口不足のために、このような法律を用いているのであるから）、多くの人口を獲得すれば、まず奴隷の父または母から生れた者を、次いで、母親が市民である者を少しずつ排除していき、最後に両親ともに市民である者のみを市民とするのである。

従って、市民の種類は多種多様であること、また名誉ある公職に関与する者が十全な意味で市民と呼ばれることは、以上述べたことから明らかである。それについては、ホメロスも、「栄職に与らない一人の移民のように」と歌っている如くである¹¹⁾。実際、名誉ある公職に与らない者は、寄留民のような者だから。しかしながら、このような事柄が隠蔽されている所があるが、それは、ともに同居している人々を欺くためである。

こうして、人を優れた良き人物たらしめるものと、市民を立派な市民たらしめるものとが異なっていると見なすべきか、同じものと見なすべきか、ま

た、ある国家においてはそれは同一であるが、他の国家においてはそれは異なっているとすべきか、また前者（一致する場合）の場合でも、それは万人においてでなく、ただ市民的政治指導者、すなわち自分一人であれ、他の人と共同であれ、公的な事柄に関する管理について最高の権限を有する者もしくは権限を有しうる者においてそうでありうることは以上述べたことより明らかである。

(B) 「国家が存続するためには欠かすことができない者をすべて市民とみなすべきではないということ」という箇所に、パーカーは次の注を加えている。

「アリストテレスは、暗黙のうちに、ポリスの成員に対して次のような区別を行っている。すなわちポリスの生活の不可欠な部分であって、ポリスの生活に積極的に参加し、ポリテース、すなわち市民の地位を享受する部分と、ポリスの生活維持にとって不可欠のものではあるが、ポリスの政治生活には参加せず、ただポリスの生活の物質的基礎を支えるだけの役割を担う部分、を区別している。」

第六章

これらの点が規定されたので、この次に考察すべき事は、国家体制の種類は一つと見なすべきか、多種多様であると見なすべきか、また多種多様であるとすれば、それはどのようなものであり、またどれ程多くあるか、またこれらの相違は何であるか、ということである。

さて、国家体制（ポリテイア）とは、国家の諸々の統治職、なかんずく、あらゆる事柄について最高の権限を有する統治職を組織するものである。事実、どこでも、統治体（ポリテウマ）こそ国家の最高の権限を有するものであり、統治体のあり方が、国家体制のあり方を決めるのである。例えば、民主政治においては、最高の権限を有するものは民衆（デーモス）であり、逆に寡頭制においては、少数者がそうである。そして、我々は、これらの国家体制は異なったものであると言うのである。また他の国家体制についても、我々は同様の議論をなすことができる。

従って、まず第一に、何のために国家が組織されたのか、また、人間やその共同生活に関する事柄に係わる統治の種類は幾つあるのか、について考察しなければならない。

さて、家政や奴隷主的支配（デスポテイア）に関して規定された最初の議論のところすでに、人間はその自然本性的志向において、市民的政治的動物であることが述べられた。それゆえ、お互に全く援助を必要としない人々でも、やはり同じく共同に生活することを希求しないわけにはいかないのである。しかしながらさらに、各人が美しく善く生きることにそれぞれ関与するのに応じて、共通の利益が彼らを結びつけるのである。実際、美しく善く生きるということこそ、共同社会におけるすべての人々にとっても、各個人それぞれにとっても、最大の目的なのである。もっとも、彼らは、ただ生きるということそのことだけのためにも結合し、市民的政治的な共同的結合体（ポリティーケー・コイノーニア）を維持しようとする。というのは、おそらく、生活上の困苦があまりに過度でなければ、ただ生きるということだけの中にも、何か善き、美しきものが存在しているからであろう。また明らかに多くの人は、生きることを希求して、多くの困苦に耐えるのであるが、それは、生きることのうちに、ある種の幸せや、本来的に楽しいものが含まれているからであろう。

しかしながら、他方で、人々が問題にしている統治の諸形態を区別するのは容易である。実際、我々は、これについて、しばしば一般向きの議論の中でも明確に規定している。確かに、奴隷主的統治（デスポテイア）においては、本当は、自然本性的に奴隷である者と自然本性的に奴隷主（デスポテース）である者との間に、同一の利益が存在しているのだが、それにもかかわらず、その支配は少なからず奴隷主の利益を目あてに行われ、奴隷の利益は、副次的にしか考慮されない（事実、奴隷が死滅してしまえば、奴隷主の支配は維持できないから）。また我々が家政術と呼んでいる、子供、妻、および家族全員の統治は、確かに被統治者の利益のためのものであり、あるいはまた統治、被統治の双方に共通する利益のためのものである。しかしそれは、我々が医術や体育術のような他の技術について見るように、被統治者のためであるのであって、ただ副次的にのみ統治者の利益になるものである。実際、舵取りも常に船乗りの一人であるように、体育教師が時には、自分自身も、訓

練を受ける者の一人となることは、全く差支えの無いことである。従って、体育教師とか舵取りは、確かにまず、彼らによって指導される者の善を配慮するのであるが、自らが彼らのうちの一人となる場合には、副次的にその恩恵に与るのである。というのは、前者の舵取りも船員なのであり、後者は、体育教師でありながら、訓練される者の一人であるから。それゆえ、市民的政治的な国家の統治職も同様であり、国家が市民の平等と同等の原則に従って組織されているならば、市民達は順番にその統治職に就くことを良しとするのであり、確かにまた昔は、自然にそのような状態にあり、市民達は順番に公けの仕事につき、以前自分が統治の任にある時に人の利益を考慮したように、その人が今度は自分の為になる事を配慮することを当然のこととしていたのである。しかしながら、現在は、公共の財産や統治職から引き出される利益のために人々は絶えず統治の任にあらうと欲する。それは、あたかも病気がちの者が公職にあれば、結局、いつも健康になるというようなものである。そして実際にまたそうであるから、おそらく彼らは統治職を追い求めているのであろう。

従って、国家体制が、共通の利益を目指すものであれば、それは、端的な正義に基づいて存在する公正な国家体制ということになり、他方、国家体制が統治者だけの自己利益を追求するするならば、それはすべて誤りを犯した国家体制であり、公正な国家体制からの逸脱であることは明らかなことである。というのは、このような統治は、奴隷支配者の統治のようなものであるが、国家は、自由人の共同的結合体そのものであるから。

(B 1) バーカーは「統治体」「ポリテウマ politeuma」を“supreme civic authority”「最高の市民的権威」と訳し、ニューマンの注釈に依拠して、次の注を加えている。

「アリストテレスは、国家体制の性質を決定するものは最高の権威であることを示すことによって、国家体制とは、とりわけ最高の権威を秩序づけるものであると論じている。この主張から引き出される結論は、国家体制の主要な任務は、最高の権威を確定することである、ということになる。」

(B 2) 国家存立の目的について、バーカーは次の注を加えている。

「アリストテレスは、ここで、アソシエーションとしての国家が存在する二つの目的を提示している。(1)自然的な衝動にたいする充足をもたらすという目的。この衝動は利害関心とは別に存続する。(2)共通の利益に対する充足をもたらすという目的。この共通の利益とは、経済的利益であるだけでなく、(快適というよりはむしろ)善なる生活を達成することにおける共通利益、である。そしてその充足のためには、正義の体制というような諸制度が要請される。というのは、そのような生活にとっては、正義の体制は欠かし得ないからである。国家の主要な目的は、善き生活を達成することにおける共通の利益である。」

(B 3) 「ただ生きるためだけのためにも、市民的政治的な共同的結合体を維持する」の箇所、バーカーは次の注を加えている。

「前節で、アリストテレスは、『社会的生活』と『善き生活』とを区別した。ここで彼は、第三の要素、『生活』それ自体という要素を導入している。国家は三つのものすべてに関与している。すなわち国家は社会的生活に対する人々の衝動（それは相互の援助をまったく必要としない状況においても存在する）を充足させる。国家は人々の共通利益である善き生活に人々に関与させる。しかし国家は人々が単に生きるだけのためにも人々を助ける。というのは、生きることそれ自体が価値あることであるから。」

(B 4) 「一般向きの議論 exoteric discourses」について、バーカーは次の注を加えている。

「一般向きの議論 exoteric discourses は、専門向きの議論 esoteric discourses と対比されている。この専門向きの議論はリュケイオンの学生達に向けられたものである。」

(B 5) バーカーはこの第 6 章全体に対して、次の注を加えている。

「国家体制を、善き国家体制と悪しき国家体制、正常な国家体制と誤った国家体制という二つの部類に分けるこのような予備的分類は、以下のような原理に基礎づけられている。すなわち政治的統治というものは、その固有の特性によって、本質的に被統治者の利益に適うものであるということである。それは、政治権力の、それに固有の使用に関する絶対的正義の原理である。それは、第 4 節において国家の主要な目的との関

連において言及された事柄と一致する原理（国家の主要な目的は共通利益である）である。」

第七章

これらの事柄が規定されたので、次には、国家体制について、それが数としてはいくつあり、またどのようなものかを考察しなければならない。そしてまず最初に、それらのうちの正当な国家体制を考察すべきであろう。なぜならば、これらの事柄が確定すれば、逸脱した形態は自ら明らかとなるだろうから。確かに、国家体制と統治体（ポリテウマ）とは、同一の事柄を意味しており、そして統治体は国家にたいする最高の権威主体であり、この最高の権威主体は一人か、少数者か、多数者かのいずれかである他ないのだから、一方で一人あるいは、少数の者、あるいは多数が共通の利益を求めて統治する場合には、これらの国家体制は正当な国家体制である他はなく、他方で、一人あるいは少数者、あるいは多数者がその私利を求めて統治するならば、それは逸脱した国家体制である他ないのである。というのは、国政に参与しない者¹²⁾を市民と言うべきではないし、あるいはまた、市民と呼ぶならば、その利益を共有すべきであるから。

さて、我々は、一方で、君主制（モナルキア）のうちで、共通の利益に配慮する国家体制を普通、王制（バシレイア）と呼んでいるし、他方で、共通の利益に配慮する国家体制のうちで、一人よりは多いが少数の者によって統治されている国家体制を普通、貴族制と呼んでいる（それがそのように呼ばれるのは、最良の人々が統治するか、あるいは国家およびその構成員にとって最良であるものを求めて統治するか、のどちらかであるから）。また多数の者が共通の利益を求めて政治を行う場合、この国家体制は、すべての国家体制に共通する名前によって「国家体制」（ポリテイア）と呼ばれる（事態がこうなっているのには、理由がある。というのは、一人あるいは少数の間であるなら、その卓越的力量において擯んでいているということは可能であるが、もはや多数者の間では、すべての卓越的力量において完全となることは困難であるから。しかしながら戦争に関する卓越的力量においては、彼らが最も優れた者になることは可能である。実際、このような卓越的力量は、多数者

の間で生じるからである。それゆえ、このような国家体制においては、国家を防衛する者達が最高の権威主体であり、武器を有する者達がこの国家体制への参与者になるのである)。

他方、今まで述べて来た国家体制から逸脱したものとしては、僭主制が王制の逸脱形態であり、寡頭制が貴族制のそれであり、民主制が「国家体制」の逸脱形態である。というのは、僭主制は、君主一人の利益を求める君主制であり、寡頭制は、富者の利益を求める国家体制であり、民主制は、貧民の利益を求める国家体制であるから。そのいずれも、共通の利益に対して役に立つ国家体制ではない。

(B) 「寡頭制は、富者の利益を求める国家体制である」にバーカーは、次の注を加えている。

「アリストテレスは、ここで、数という基準の代わりに階級という基準を導入している、という点に注目すべきである。そして、次の章で、さらにこの方向に沿って論述を書き進めている。寡頭制を形成するものは、少数の者が自分の利益のために統治するということではなく、むしろ富裕な階級が統治するということである。すなわち寡頭制は、現実には富者統治制 plutocracyである。」

第八章

しかしながら、このような国家体制のそれぞれがどのようなものであるか、については、多少とも詳しく述べるべきであろう。というのは、いくつかの難問があり、それぞれについて実践的側面にだけ目を向けるだけではなく哲学的方法によって探求する人にとっては、ただ、何物も見過ごさず、また何物をも放置しないで、それぞれについての真実を明らかにすることが相応しい事であるから。

さて、僭主制は、前に述べたように、市民的政治的な共同的結合体を奴隷主(デスポティケー)の如く統治する君主制であり、寡頭制は、財産の所有者が、国家体制の最高の権威主体である場合に生じる国家体制であり、民主制とは、それとは逆に、財産を大して持たず、困窮している者達が国の最高

の権威主体になる時に生じる国家体制である。しかしながら、最初の難問は、この定義に関するものである。すなわち、もし多数が富裕であり、同時に国家の最高の権威主体であれば、多数者が最高の権威主体である場合は、常に国家体制は民主制であり、また同様に、もし仮りに貧民が富者よりも数が少ないということがあり、にもかかわらず富者よりも力を持っていて、国家体制の最高の権威主体となるということがどこかで生じたとすれば、少数者の集団が主権者である場合には寡頭制が生じたと人々が言うならば、国家体制に関してなされた規定は正しくない、と思われるかもしれない。

しかしながら、さらに人が「富裕」を「少数」と結びつけ、「貧困」を「多数」と結びつけて、こうした上で国家体制を命名して、富裕な者が、数の上で少数であって、しかも統治職を保持する国家体制を寡頭制とし、他方、貧民が、数の上で多数で、しかも統治職を保持する国家体制を民主制としたとしても、それでも、別の難問が残っている。というのは、もし今までに指摘してきた国家体制以外には別の国家体制は何一つ存在しないものとすれば、一方において富裕者が多数であり、他方において貧民が少数者であって、しかもそのそれぞれが、そのそれぞれの国家体制の最高の権威主体であるような、今指摘したばかりの国家体制を我々は何と呼べばよいのか。それゆえ、一方では少数者が、他方では多数者が、——前者は、寡頭制において、後者は民主制においてそうになっているのだが——国家体制上最高の権威主体となるのは、どこでも、一方で富裕者が少数であり、他方で貧民が多数であるという事実にもとづく偶然事であること、は以上の議論が明らかにしているところである（それゆえ、先に述べられた根拠、「少数・多数」ということは、国家体制上の相違をもたらすことにはならない）。従って、民主制と寡頭制がお互いにお互いを区別するものは、貧困と富であり、人々が富にもとづいて統治しているところでは、統治に関与する数が少数者であろうと、多数者であろうと、国家体制は寡頭制にならざるを得ず、貧民が統治しているところでは、国家体制は、民主制にならざるを得ない。しかしながら、すでに述べたように、一方においては少数者が統治者となり、他方においては多数者が統治者となることは偶然事である。実際、富裕な者は少数者であるが、自由に与るのは、すべての者である。そしてまさしくこれらの事柄をめぐって双方が国家体制を争うのである。

第九章

さて、そこでまず第一に、寡頭制の標識として人々が何を語り、民主制の標識として何を語っているか、また、人々が寡頭制の「正しさ」、民主制の「正しさ」と称しているものは何であるかを把握しなければならない。実際、誰でも皆、何らかの「正しさ」には触れているが、しかし、ある程度までしか理解が進まず、厳密な意味における「正しさ」を全面的に、言い表わしてはいないのである。たとえば、「正しさ」とは、平等であることと考えられている。そして事実そうではあるが、それは、すべての人にとってそうであるというのではなく、等しい人々にとって妥当することである。また、不平等であることが正しいことであるとも考えられている。そして実際にもそうではあるが、それはすべての人に対して妥当することではなく、等しくない人々にとって妥当することがらである。従って、彼らは、この点、すなわち、誰々に対して、という事を取り去って、誤った判断を下しているのである。その原因は、その判断が自分自身の事柄に関することであるという点である。すなわち、ほとんど大多数の人々は、自分自身の事柄に関しては、悪い判断者である。従ってまた、「正しさ」とは、誰かににとっての「正しさ」であり、また、先に『倫理学』で述べたように¹⁹⁾、(配分される)事物に関しても、(配分を受ける)人々についても、等しい方法でなされるべきものであるから、事物の(配分の)平等性については意見が一致するが、誰に(配分すべきか)については意見が分れるのである。それは、ほとんど、丁度今述べた理由、すなわち、人々は自分の事柄については誤った判断を下すという理由にもとづいており、また、双方ともある程度までは、何か正しい事を言っているために、自分は絶対的に正しいことを主張していると思い込むためでもある。実際、一方の人々においては、何かにおいて、たとえば富において等しくないならば、人々は全く等しくないと考えているし、他方の人々においては、何かにおいて、たとえば自由という点において等しくあれば、全てにおいて平等であると考えるのである。

しかしながら、彼らは最も重要な点に触れてはいない。すなわち、もし人が財産のために共同的結合をなしたり、団結したりしたとすれば、人はまさ

しく財産に関与するのと同じ割合で国家にも関与するということになり、従って、寡頭制論者の議論は有力な論理と考えられることになろう（実際、それが元金であるのか、あるいはそこから後に生じた利益であるかを問わず、資金百ムナーのうち、一ムナーしか出さない人を、残り全部を出した人と等しく百ムナーの資金に関与させるのは、正しいことではないと思われるから）。しかし、もし人々の共同的結合が、単に生きるためだけにではなく、むしろ、善く生きるためになされたとしたら（というのは、そうでなければ、奴隷やまた、その他の動物の国家というものが存在することになるだろうから。しかし、現にそのようなものは存在しないのである。なぜなら、幸福に与ることも、選択にもとづいて生きることも、彼らにはできないからである）、また誰からも不当に害されないようにとの意図でなされた攻守同盟のためにもなく、また交換や相互の交易のためでもないとするれば——しかし、もしそうであるとするならば、テュレニア人もカルタゴ人も、また相互に取引契約を結んでいるすべての人は、いわば一つの国家の市民ということになるであろう。実際、彼らの間には、輸入品に関する協定や、不正を行わないという約束や攻守同盟に関する覚書が存在する。しかしながら、これらの事柄に関する彼らすべてに共通の統治職が任命されたわけでもなく、むしろ各自について別々の官職が任命されたのであり、また各自は、他の人々に対して、彼らがどのような性格の者であるべきか、について顧慮することもなく、また協定を結んでいる者達のうちで、どのようにすれば一人も不正を犯さないようになるか、またいかにすれば如何なる邪心も持たなくなるか、について心を配ることもなく、ただ単にお互いに不正を犯すことがないように配慮するだけである。しかし、良き秩序のために心を砕く人々は、市民の卓越的力量と悪徳に注意を払うのである。それゆえ、また単に名目によってではなく、真に国家の名に値する国家においては、人の卓越的力量に対する考慮が存在しなければならぬことも明らかなことである。というのは（もしそうでなければ）この共同的結合（コイノーニア）は、場所という点においてだけ異なる他の攻守同盟、すなわち遠方の者からなる攻守同盟¹⁴⁾とは異なる一種の攻守同盟となるからである。またそうでなければ、法は単に協約となり、ソフィストのリュコプロンが言っているように、互いに対して正しい事柄を保証する保証人にはなるが、市民を良識ある人、正義を重んずる人にする能力を持

つことができないのである。そして事実はこのようであることも明らかなことである。すなわち、もし人が、例えばメガラ人の国家をコリント人の国家と城壁で結ぶことによって、その国土を一つに結合したとしても、それだけではまだ一つの国家にはならないであろう。またもし相互に通婚を行ったとしても、やはり一つの国家にならないのである。もっとも、この通婚は国家において、固有の交際方法の一つではあるが。同様に、人々が、共同的結合ができない程には遠く隔てられてはいないが、ともかく互いに離れて生活しながら、物品交換に関して、彼ら自身互いに不正を働かないように、法律が定められているとしても、また、一人が大工、また一人が農夫、一人は靴工、またその他の一人が何かそのような者として、その数が一万人であったとしても、彼らが交易や攻守同盟のようなもの以外には何物においても共同しないというならば、それでもまだこれは国家ではないのである¹⁵⁾。

それでは、いかなる理由でこのような事態になるのであろうか、実際、その理由は、このような共同的結合が場所的に近接したところで行われてはいないということではない。また、このように共同しあう人々が結集してみても（各人は、確かに自分の家はあたかも国家のように取り扱うが）、そして、防衛同盟の協定の下にあるように、害をなさんとする者に対してだけ彼ら相互に助け合うために結集したとしても、もしもこうして結集した者達が（以前と）同様に分立したまま、ばらばらの交際しか持たないとしたら、厳密に考察しようとする人は、これを国家とは見なさないであろう。したがって、国家とは、場所における共同的結合体でなく、また彼ら相互に不正を犯さないこととするための共同的結合でもなく、交易関係のための共同的結合でもないことは明らかである。むしろ、もし国家が存在するとするならば、これらの事柄は必要条件として存在しなければならない。けれどもまたこれらの事柄がすべて備わったとしても、すでに国家が存在するということにならない。そうではなく国家とは、家族や一族の者達が、自己完成をめざすための生活、独立自存の生活を確保するための共同的結合体、善く生きるための共同的結合体なのである。しかしながら、このような共同的結合も、人々が同一の場所に居住し、通婚を行わないのであればありえないであろう。そういうわけで、諸々の国家には、婚姻関係、都市の氏族団体、供儀の儀式や社交のための娯楽が生じてきたのである。そしてこのようなものは、友愛（フィ

リア)の為せる業である。実際人々が共に生きていこうとする選択をするのは友愛であるから。従って、一方で国家の目的は、善く生きることであるが、他方でこのような諸団体は、この目的のための手段である。そして国家とは、家族(氏族)および村の共同的結合であり、完全で独立自存した生活を保障する共同的結合である。そして、これこそ、すでに我々が言っているように、至福な、美しく品位ある生活を生きることである。従って、市民的政治的な共同的結合体は、美しく品位ある行為のために存在するのであって、単に共に生活するために存在するのではないと考えるべきである。それゆえ、このような共同的結合体に最も多く寄与した人々こそ、自由と生れにおいて同等かもしくはより高い地位に在るとしても市民的力量において劣っている者よりも、より多く国家に参与する権利を有するのであり、また同様に彼らこそ、富において凌駕していても人としての力量において劣っている人々よりも、より多く国家に参与する権利を有している。

従って、国政について論争している人はすべて「正しさ」のある一部分しか論じていないということが、これまで述べてきた事柄から明らかとなるのである。

(B1) 「幸福 eudaimōnia」について、バーカーは、次の注を加えている。

「幸福は、ギリシャ語で、エウダイモニアであり、それは、単なる快樂の幸福よりも高度の何かを意味しており、奴隷と動物には不可能な『精神の発揚 energy of the spirit』を含んでいる。第七卷第一三章において、アリストテレスは、幸福エウダイモニアを、卓越的力量の発揚とその完全な行使 the energy and perfect practice of excellence と定義している。」

(訳注) “to zēn eudaimonōs kai kalōs” 「至福な、品位ある生活を生きる」という言葉の「カロ〜ス」は、「美しく、善く、適正に、エレガントに、ディーセントに decently (品のある仕方で)」という意味を持っている。

(B) この章の最後に、バーカーは、配分的正義について、次のような注を加えている。

「アリストテレスは、ここで、比例的平等を基礎にした配分的正義の理論を述べている。AとBが、個々の功績と国家の繁栄に対する個々の貢献において、国家に与えた寄与の量に応じて、AとBは、国家から公職と名誉を受け取るべきである。もし両者の個々の功績と貢献が等しいならば、彼らは等しい量の報償を受け取る。もし彼らの功績と貢献が等しくなければ、彼らは等しくない量の報償を受け取る。しかしいずれにしても、比例的平等という基礎は維持される。そしてAが受け取る物とAの個人的功績との比は、Bが受け取る物とBの個人的功績との比に等しい。『ニコマコス倫理学』の関連箇所は、第五卷第三章以下である。」

第十章

さて、国家の最高の権限を持つものは何であるべきか、については難問が横たわっている。実際それは多数者であるのか、それとも富者であるのか、それとも優れた人々であるのか、あるいはすべての人の中で最も優れた一人の人であるのか、それとも僭主であるのか。しかし、これらすべてが難点を持っているように思われる。実際、もし貧民が、多数であるからという理由で富者の富を自分達の間で分配するとしたら、それは不正な事柄ではないだろうか。「否、それは、最高の権限を有する者によって正義にかなうことと見なされたこと」と言うであろう。しかしもしそうであれば、何をもって極端な不正と言うべきであろうか。また、さらにすべての人のものをいったん収用した上で、多数者が少数者の財産を自分達の間で分配したとしたら、それは明らかに国家を破滅させることになるだろう。しかしやしくも、人の卓越的力量はそれを持つ人を破滅させることはないし、正義は国家を破滅させることはないのである。従って、このような法が正義となりえないものであることは明白である。さらにもしそうでなければ僭主が行う行為がすべて正義にかなったものとならざるを得ないこととなるだろう。というのは、僭主は、民衆が富者に対して為すように、自らが強者であることをもって、権力を行使するからである、しかし、それなら、少数者また富者が統治するということが正義にかなっていることであろうか。彼らもまたこれと同じことを為し、民衆の財産を略奪したり、没収したりしたとすれば、これは正義にか

なっていることであろうか。もし、(彼らが)正義にかなっているなら、他方の場合(民衆の支配)もそうであることとなる。従って、これらはすべて誤っており、正しくないことは明らかである。しかしながら、それでは、優れた人々が統治の権をにぎり、あらゆる事柄に対して最高の権限を持つべきであろうか。そうなれば、他の人々はすべて、国家の統治職に就く名誉を与えられないことになるので、「名誉に与らない者」とならざるを得ない。というのは、我々は、統治職を名誉そのものと言っており、同一の人々が常に統治職に就くということになれば、他の人々は、「名誉に与れない人々」とならざるを得ないからである。しかしながら、それならば一人の、真に卓越した人が統治するのが最良の方法なのであろうか。しかし、これは、さらにいっそう寡頭制的であろう。なぜなら、前の場よりも多くの者が「名誉に与らない人」となるからである。しかし、おそらく人は、言うであろう。そもそも人間が最高の権限を有する者となり、法がそうでないというところに誤りがあるのだ、なぜなら人間はその魂の中に偶然に左右されやすい激情を有しているからだ、と¹⁶⁾。しかしそれでは、法が寡頭制的であったり、民主制的であったりすれば、今問題とされていることに関して、いかなる差異が生じるであろうか。すなわち、先に述べられた事が同じように生じるであろう。

(B) バーカーは、この章の初めに、次の注を加えている。

「これまでのところ、アリストテレスは、第九章において、いかなる人間が、配分的正義に基づいて、統治職と名誉の授与に関して、より優れた承認 recognition を獲得すべきか、を考察してきた。彼は、今、いかなる人間が、もしくは、いかなる人間集団が、最高の承認を獲得すべきか、そして最高の権威 authority すなわち主権 sovereignty を獲得すべきか、という問題の考察にとりくんでいる。」

(訳注)バーカーは、ここで、「主権」“sovereignty”と訳されてきた「キュリオス」“*κύριος*”を、「最高の承認」と解している。たしかに、この「キュリオス」という語は、“*κῆρύω*” -make valid, confirm, ratify, の関連語であるから、バーカーの解釈は、ラディカルセンスの観点からみて、説得的であろう。そしてある人物が人々の正当な承認を獲得する根拠を、アリストテレスは、「アレテー(卓越的力量)」に求めているから、

アレテーとキュリオスとは、承認 recognition という行為と結びついて
 いることになる。従って、アリストテレスにおいては、アレテーに基づく
 統治は、統治される側の承認に基づく統治である、といってもよいで
 あらう。

第十一章

従って、他の点については別に論じることにしてしよう。しかし、最も優れた
 少数の人々よりも、一般大衆の方が最高の権限を有する者であるべきだ、と
 いう主張は、弁護しうる議論であり¹⁷⁾、ある難点を有するとはいえ、おそらく
 は真実も含まれていると思われる。なぜなら、多数者というものは、その各
 個人は優れた人ではないとしても、一つにまとまれば、各個人としてでなく、
 全体としては、かの少数で優秀な人々よりも、優れているということはあり
 うることであるから。それはあたかも人々の持ち寄る食事の方が一人の支出
 にもとづいて出される食事よりも勝るのと同じである。というのは、多くの
 人がいれば、各人は多少とも卓越的力量と思慮とを持っているのであるから、
 彼らが集まれば、一般大衆はあたかも多くの足、多くの手、多くの感覚を持
 った一人の人間のようになることができるし、従って性格や思考についても
 そうなと思われるからである。多数者の方が音楽の作品や詩人の作品をよ
 りよく評価するのもこの故なのである。実際、人が異なれば評価する部分も
 異なる。しかし、人が集まって全体となれば、作品の全体を評価することと
 なる。しかし、卓越した人々が多数者の個々人と異なる点は、あたかも美し
 い人々が美しくない人々と、また技によって描かれた物が実物と異なってい
 ると人々が言うように、離れ離れに散在しているものが一つに集められてい
 ることに在る。というのは、一つ一つが分散していれば、描かれた目よりも、
 この人（誰であれ）の目の方が美しいことも、また別の人の別の部分の方が
 美しいということもありうるからである。

しかしながら、少数の卓越した人々に対する多数者のこのような優位が、
 果してすべての民衆やすべての一般大衆について、ありうる事柄であるか否
 かについては、明確ではないのであって、おそらく若干の民衆については、
 そのようなことは断じてあり得ないであらう（というのは、[もしそうならば]

これと同じ理窟が野獣にもあてはまるであろうから。実際、若干の民衆はいわゆる野獣と何の異なるところがあるか)。しかしある種の民衆については、今まで述べて来たことが真実であることを妨げるべき何物もない。それゆえ、これらのことを通じて以前に指摘した難問も、またこれに付随する問題をも解決することができるのである。すなわち、市民のうちの大衆からなる自由人は、いかなる事柄について最高の権限を有するか、という問題である。このような人々は、富者でもなく、卓越的力量に関して一つの資格すら持たない人々である。実際、彼らが最高の統治職に参加するのは、安全なことではないであろう（というのは、彼らは、彼ら自身の不正と無思慮の故に、一方では不正を犯さざるを得ず、他方で過失を犯さざるを得ないからである¹⁸⁾）。しかしながら、彼らを統治職に全く参与させず、また自ら参与しないということは恐るべき事柄である（というのは、統治職に就く榮譽にも与らず、また貧困でもある大衆が存在するならば、この国家は、敵に満ちあふれるということにならざるを得ないからである）。従って、彼らが審議と裁判に参加することが、残された方策である。まさにそれ故にソロンも、また他の立法家の人々も、彼らに統治職の選挙権と公務報告審査権を与えているのである。しかし彼らが単独で統治職に就くことは許していない。実際、彼らは、すべてが集合すれば十分な識別力を有し、より優れた人々と混じり合って国家に益をもたらすからである。それはあたかも、純良でない食物が、純良なものと混じることによって、全体を少量の純良な食物よりもはるかに有益な食物にするのと同様である。ただし、彼らは各人ばらばらのままでは、判断する力において不完全である。

しかしながら、国家体制をこのように組織することは、まず最初に次のような難問を抱えることになる。すなわち、たとえば誰が正しく治療したかを判定することと、現に病気にかかっている患者に治療をほどこして、健康にさせることは、同一の人物の仕事と考えられるであろう。そしてこの人物とは、まさしく医者である。このことは、その他の経験的技能と技術についても同様であろう。従って、医者は医者達の間で、医療行為についての報告審査を受けるべきであるが、それと同様に、他の仕事にたずさわる者も、同種の人々の間で報告審査を受けるべきであろう。しかし、医者といっても、開業医もあれば、その道を極めた大家の医者もあり、さらに第三に、医療技術

について教育を受けただけの者もいる（実際、いわばあらゆる技には、このような人々がいるものである）。そして我々は、この審査・判定する能力を、専門的知識を有する者に劣らず、その教育を受けただけのこれらの人々にも認めているのである。さらに選挙についても事態は同様であるように思われる。実際、正しく選挙することも、専門的知識を有する者の仕事である。それはちょうど、土地測量師を選ぶのは土地測量師の仕事であり、舵手を選ぶのは舵手の心得えのある者の仕事であるのと同様である。

実際、ある若干の仕事や技術については、素人も、その選出に關与するのではあるが、しかし、専門的知識を有する者以上に關与するわけではない。そうした論法でいくならば、大衆を、統治職の選挙においても、また統治職の報告審査においても最高の権限を有するものにすべきではない、ということになろう。しかしながら、おそらく、このような主張は、大衆があまりに奴隸的な性質のものでない限り、今述べた論拠によっても全面的に正しいとは言えないであろう（実際、各人は、個人としては、専門的な知識を有する者より劣った判定者であっても、全員が集合すれば、彼らより優れた判定者となるか、あるいは、それに劣らない判定者となる）。また次のような理由によってもこのような主張は正しいものとは言えないであろう。すなわち、その成果を、専門的技能を有しない者達が識別するような若干のものの中には、その製作者が唯一の判定者でもなければ、最良の判定者でもないようなものがあるのである。たとえば、家を識別することは、ただその建築家だけの仕事ではなく、むしろ、その家を使用する者の方がより優れた判断を下すものである（すなわちその家の主人がこの家を使用するのである）。また船の舵は船大工よりも舵手の方が優れた判断を下すし、料理も料理人ではなく客の方が優れた判断を下すものである¹⁹⁾。

従って、以上述べたように、このような難問は、おそらく十分に解決したと考えるのもよいであろう。しかしまた、これに付随した別の難問が存在する。実際、劣った人々が優れた人々よりもより重要な事項についての権限を有するということは奇妙なことと思われるかもしれない。ところが執務報告の審査と統治職の選挙は最も重要な事項であり、若干の国家体制においては、すでに述べたようにこれらの事柄を民衆に任ねているのである。事実、そこでは民会はこのような事項のすべてに対して最高の権限を有している。従って、

少額の納税しかしない階級出身の者も、また年齢を問わず誰でも、民会に参加する民会員になれるし、評議員になることができるし、判決を出す裁判人になることができるのである。もっとも、財務官や將軍職や最高位の統治職には、多額の税金を納めている階級の出身者が就く²⁰⁾ことになっているのではあるが。

しかしながら、この難問も同様に解決することができるであろう。というのは、おそらく、こうした方法も正しいであろうから。実際、統治職にあって、その権限を行使するものは、個々の裁判人（ディカステース）や評議員（プーレウテース）や民会の会員（エクレシアステース）ではなく法廷（ディスカテリオン）であり、評議会（プーレー）であり、民会（デーモス）なのであって、上述の個々人（評議員、民会員、裁判人のことを指す）は、このような機関の一構成員なのである。従って、一般大衆が重要事の最高権限を有する者であるということは、正しいことなのである。実際、民会も評議会も裁判法廷も多数の人より成っている。また納税額も、これらの人々の納税額の合計の方が、一人で、あるいは少数者として要職に就いている者²¹⁾の納税額よりも多いのである。従って、これらの問題は、以上のような方法で説明されたこととしよう。

しかしながら、最初に言及された難問は、とりわけ以下の事を明らかにしている。すなわち、正しく制定された法こそ最高の権限を有するべきで、一人であろうが多数であろうが、統治職に就く者は、法が厳密に規定することができない事柄に限って、最高の権限を有するべきだということ、である。個々のすべての事柄に対して、一般的に規定することは容易なことではないからである²²⁾。しかしながら、正しく制定された法とは、どのようなものであるべきか、については、今なお明らかではなく、先程に言及された問題が解決されずに残ったままである。というのは²³⁾、法は、国家体制に対応して悪くなったり、良くなったり、正義にかなったものになったり、不正義に陥ったりせざるを得ないからである。実際、法は国家体制に対応して制定されるべきであるということは明らかなことである。従って、もしそうであるとすれば、一方で正しい国家体制に対応する法は必ず正しいものであり、他方、逸脱した国家体制に対応する法は、必ず正しくないということも明らかである。

(B 1) 大衆の方が、専門的知識を有する者よりもより優れた判定者になる、という主張に、アリストテレスは、「彼らが集合すれば」という限定をつけているが、この点についてバーカーは、次の注を加えている。

「『大衆が集合すれば』というこの限定は、繰り返し登場する限定である。大衆は、全体としては、よき集合的判断力という長所を持っているが、それは、静態の大衆としてではなく、動態の大衆として、いいかえれば、彼らが集合している場合に、そして討論の過程が始まる場合にあってはまる事柄である。それゆえアリストテレスは、彼が大衆統治の原理を受け入れる限り、問答的討論こそ大衆統治の原理の究極的基礎であると暗に主張している、と解しても不当な注釈にはならないであろう。別の言葉で言えば、民主主義は議論に基づくものであるということである。」

(B 2) バーカーは、評議会 (boulē) について、次の注を加えている。

「アリストテレスはここでは、大衆の権利に関する彼の議論のなかに、民会 (ecclesia) とともに評議会をも含めて論じている。厳密に言えば、評議会は、アテナイにおいては、民会のために案件を準備する500人からなる小さな組織体であったが、民衆法廷や民会とは、やや異なる組織体であった。しかし評議会員は、30歳を越えるすべての階層の市民から、くじによって選ばれる。それゆえアリストテレスは当然にも評議会のメンバーになる権利を民衆の権利についての議論のなかに含めて論じているのである。」

(B 3) バーカーは、この章の終わりに、政治学と美学における民主主義的論証と題して、次のような注を加えている。

「アリストテレスがここで政治と美の双方に対して同じ民主主義的論証 democratic argument (もし、そういつてよければ) を適用していることは注目すべきことである。この二つの分野は、アリストテレスの見解においては、一緒になっている。それはちょうどアテナイの以下のような慣行に似ている。すなわちアテナイにおいては、人民は全体として、民会において政治について発言することを求められただけではなく、種々の建築計画に対して投票すること、および(大勢の陪審員団からくじによって選ばれた裁判人を通じて) 劇場において優れた劇を表彰することを、要請された。プラトンもこれと同じ一連の議論を政治と美に適用し

ているが、その方向は逆である。彼は、政治におけるデモクラシイとともに美の問題における『観客支配制 theatrocracy』を非難している。プラトンは、最初に音楽について語った後（『法律』700E－701A）、次のように述べている。『その結果、劇場の観客達は、あたかも自分達が、音楽における美と美ならざるものとを熟知しているかのように、かつての沈黙から転じて騒々しくなり、かくて、音楽におけるく最優秀者支配制（アリストクラティアー）>に代わって、かの劣悪なく観客支配制（テアトロクラティアー）>が生じたのです。それというのも、もしこの意味での民主制が、教養ある自由人のみにかぎられ、ただ音楽においてのみ生じたのであれば、さほど恐るべきものではなかったかもしれません。しかし事実は音楽から端を発して、万事に関して知恵があると思う、万人のうぬばれと法の無視が、わたし達の上に生じ、それと歩調を合わせて、万人の身勝手な自由が生まれてきたのでした。』（岩波書店、プラトン全集13巻の訳に拠る）以下の点も付け加えることができる。すなわちアリストテレスの『アテナイ人の国制』（第49章）に関する論文の中で描かれているように、後期のアテナイ人の慣行は、以前評議会に属していた、建築その他の企画を決定する権利を民衆法廷に割り当てた。評議会は情実に捉われたと考えられたからである。民衆法廷は、より偏向のない機関としてそれにとって代わった。最後に、そして『ともに会合する』という条件のもとでの市民体総体 general civic body の能力と有効性に好意的なアリストテレスの議論について、次のように述べてもよいであろう。すなわちこの議論は(a)彼自身の市民権の定義と一致し、(b)市民体総体は評議 deliberation に係わる事柄について最高の権限を持つ(kyrion)ことができ、また法的正義に係わる事柄についても、その公的意見を裁判を通じて表明する権利を持つ、というギリシャ人共通の観念に一致する。」

(B 4) 法の主権 the sovereignty of law に関するアリストテレスの見解について、バーカーは次の注を加えている。

「法の主権およびその規則への統治職の従属に関するアリストテレスの見解を理解するためには、我々はアテナイの法の性格とアテナイの統治職の地位を想起せねばならない。すなわち、(I)アテナイの法は、めっ

たに変更されない、確定された規則の古い集成体であった。立法による変更は民会に係わる事柄ではなかった。というのは、民会は評議体であり、立法府ではないからである。事実、立法的变化は、民会において発議され、提案されたが、それらは国家体制の司法部と司法的な委員会に付託された。法的な変更が検討され、確定され、制定されるのは、まさにこの部署である。それゆえ、次のように言うことができるかもしれない。アテナイの国家体制においては、立法というものはほとんどなく、別個の、特定の立法府というものは存在しなかった、と。そして民衆が民会において、法的拘束力を持った布令 *psephismata*、もしくは法を踏みにじった布令を採択することによって、立法府として行動することを目指しようとする時、そのような行為は、—— いずれにせよアリストテレスによって—— 篡奪と見なされたのである。(2)アテナイの統治職 *magistrates* は、法を破った統治職を糾弾するという、すべての市民に与えられた権利の行使によって、法の下に従属していた。そしてこれは、権力の乱用に対する大きな安全装置の一つと見なされていた。不法に対する告発 *graphē paranomōn* は、さびついたまま使われなくなったということのない武器であった。」

第十二章

すべての知識および技術において、その目的は善であり、それらすべてのうちで最高の位置にあるものの目的こそ、最高の善であり、また最もよく追求されるものであるから、この最高の知識および技術は市民的政治的事柄に係わる能力である。そして市民的政治的事柄における善とは、正義のことであり、これはまた、公共の利益のことである。従って、すべての人にとっては、正義とは、平等な何かであると考えられるのであり、少なくともある程度までは、彼らは倫理的問題について説明がなされたあの哲学的議論に同意しているのである²⁴⁾(実際、正義とは、何かのものであり、誰かに関するものであり、等しき者には等しき物が属さねばならぬと彼らは言っているから)。しかし²⁵⁾、どのような点において平等であるか、またどのような点において不平等であるか、は看過されるべきではないであろう。これは難問であり、市民

的政治的事柄についての哲学的考察を必要とするであろう。実際、おそらく人は次のように言うかもしれない。すなわち、統治職は、それが何であれ、人の卓越した長所に応じて、差をつけて配分されるべきであり、たとえ他のすべての点においてすこしも差はなく平等であったとしても、そうしなければならない、と。というのは、人より優れた人にとっては、正義に属すること、すなわちその人の価値に応じたことも、他とは異なっているから、というのである。しかしもしこれが真実であるならば、皮膚の色や体の大きさやまた何であれ他の長所において優れている者に、市民的政治的正義に係わる関与をより多く認めることになるであろう。しかしながら、こうした見解は明らかに誤りではないか。それは他の知識や技能に照せば明らかであろう。実際、技能において等しい力量の笛吹きがいたとしても、彼らのうちで生れの良い者に笛に関して優越した地位を与えるべきではないのであり（というのは、生れの良い者がそれだけ良く笛を吹くわけではないから）、業において優れた者に、楽器の優れたものを与えるべきなのである。またもし、この議論がまだ明瞭でないならば、さらに議論を押し進めれば、この点は明らかになってくるであろう。すなわち、もし、笛吹きの術において優れた人がいて、しかもその人が生れの良さや美しさの点で多くの欠陥を持っている場合、たとえこれらの点のいずれの美点も笛吹きの術よりも大きなものであったとしても（私は生れの良さや美しさを言っている）、そしてたとえ、これらの美点が笛吹きの術より勝るものである割合が、この笛吹きがその術において勝る割合よりも大きいものだとしても、なおこの笛吹きに笛の優れたものを与えるべきである。実際、もしそうでないなら富と生れの良さの点で勝ることが業にも寄与するべきであろうが、それらは少しも寄与するところがないからである。

さらに、このような議論に従えば、あらゆる美点が他のあらゆる美点と比較考量できるということになるであろう。実際、体の一定の大きさが、他に比較して、甲乙つけうるものであるならば²⁶⁾、一般的にも、体の大きさは、富にも自由にも匹敵することができるであろう。従って、もしもこれこれの人が徳において優れている分よりも、他のこれこれの人が体の大きさにおいて立ち勝っている分のほうが多大であるならば、たとえ一般に徳が体の大きさよりも優れたものであるとしても²⁷⁾、すべてのものが比較考量しうるというこ

とになろう。というのは、一方のこれこれの量が他のもののこれこれの量よりも勝っているというのであれば、これこれの量が相互に等しいということもありうることは自明だからである。しかし、このようなことは不可能なことであるから、市民的政治的な事柄についても、あらゆる種類の不平等を根拠として、統治職を求めて争うということをしてしない、というのが明らかに理にかなったことなのである（というのは、一方において足の遅い者が、他方において足の速いものがあるとして、これを理由に、一方の者がより多くの統治職を得、他方の者がより少ない統治職を得るべきであるということにはならないのであるから。このような優越が名誉を受けるのは、体育競技の場においてである）。これに対して、統治職関与の要求は、国家をなり立たせているところの構成要素に基づいてなされなければならない。まさにそれゆえに、生れの良い者や自由人や富者が、名誉の公職を要求するのは理にかなったことなのである。なぜなら、国家には、自由人や一定の税金を納める納税者が存在しなければならないからである（実際、国家は、全員が奴隷から成るのでは存在しえないように、全員が貧民から成っているのでは存在しえないからである）。しかしながら、確かにもしこれらの人々（自由民と納税力ある富者）が必要であるとするならば、正義と市民的政治的徳性もまた必要となることも自明なことである。実際、これらがなければ、一国の統治もありえないからである。ただし、前者（富者と自由民）がなければ、国家は存立しえないが、後者（正義と市民的政治的徳）がなければ、国家が善く統治されるということもないのではあるが。

(B) 正義に関する一般大衆の意見についての箇所に、バーカーは次の注を加えている。

「この文章全体において、世論 *general opinion* (*doxa*) と哲学的探求との対比が念頭に置かれている。すなわち哲学的探求は、世論を軽蔑すべきではなく、むしろその内包された意味を分析し、それを訂正し、高めるべきものである、とされる。アリストテレスは世論に対して、根本的な敬意を抱いていた。そして事実、彼は、『倫理学』において、『世間一般に広く抱かれた世論というものは、倫理的事柄においては、真実であり、万人がそうであると考えるものである』と述べている。しかし

また彼は、世論は哲学的分析によって分析され、訂正され、高められなければならない、と信じてもいる。」

第十三章

従って、国家が存在するということだけを念頭におくならば、今まで述べてきたすべての要素、あるいはその若干のものが統治職を競って求めたとしても正当であると思われるであろう。しかしながら、国家において優れた生活を営むためには、すでに述べたように教養（パイデイア）と卓越的力量こそが統治職を要求するにも最も大きな正当性を持ちうるであろう。だが、何か一つの事においてのみ平等である者達があらゆる事柄に平等に与えるということは、適切ではなく、また一つの事において等しくない者達が万事に不等に関与するということも適切ではないのだから、このような仕組みを持った市民的政治的な国家体制はすべて逸脱した国家体制である他ないであろう。確かに、先に述べたように、すべての人々がこのように競って要求することは、ある意味で正当ではあるが、すべての人々がそうすることが無条件に正当であるというわけではない。確かに富者達がこうした要求をするのは、彼らがより多くの土地に関与しており、しかも土地は公共的なものであるからであり、また大体において、彼らが契約事に関して、より多く信用されているからである。また自由人と生れの良い者とはお互いに似かよっている者として、このような要求をする（というのは、生れの良い者は、生れの卑しい者よりもいっそう多く市民としての程度が高いから。事実、生れの良さというものは、どの人においても故郷で尊敬をうけるものであるから）。さらに、より優れた者から出た者は、より優れた者であると考えられている。実際、生れの良さというものは、血統の卓越性に他ならない。同様に、我々はまた、人の卓越的力量というものは、正当な要求権を持つことができると主張する。なぜなら、正義（ディカイオスネー）というものは、人間の共同的結合における卓越的力量であり、まさにこの正義に、他のすべての卓越的力量は従うことにならざるを得ないからである。確かにまた、多数者も、少数者に対して、同様の要求を提出することができるであろう。というのは、多数者も、少数者との比較において考えると、より強力であり、より富裕であり、より多く

善だからであるから。

従って、もしすべての者が一つの国家の中に存在しているという場合には、そしてここで私がすべての者というのは、優れた人々や富者や生れの良き者やその他の市民大衆を指すのであるが、このような場合には、はたして誰が統治すべきかは、論争の的となるのであろうか、それともそうではないだろうか。確かに、今言及した各々の国家体制にあつては、誰が統治すべきか、の決定は、議論の余地のない事柄である（なぜなら、これらの国家体制は、最高の権限の担い手〔キュリオス〕に関して、互いに異なっているからである。たとえば、ある国家体制は富者であることによって、また他の国家体制は、優れた人であるということによって、最高の権限が与えられ、同様の仕方、それぞれの国家体制は互いに異なっているのである）。しかしなお我々は、次のことを考察しなければならないだろう。すなわち、もしこれらの人々が同時に存在するならば、どのようにして最高の権限の担い手を決定すべきであらうか、という事である。もし卓越的力量を有する者が数の点において極めて少数であるならば、この問題をどのように決定すべきであらうか。少数であるということを、その仕事との関係において考察すべきではないか、それゆえまた、彼らが国家を統治する者であるかどうか、あるいはその数は、国家を成り立たせる程の数であるのか否かを、考察せねばならないのである。

しかし、国家の名誉ある統治職を競って求めるすべての人々に関して、今一つの難問がある。実際、富にもとづいて統治権を要求する人々は、一つも正当なことを主張していないと思われるであろう。血統に基づいて統治権を要求する人も同様である。というのは、今、一人の人がさらに他のすべての人々よりも富裕である場合には、明らかに同じ正当な権利によって、この一人の人が他のすべての人を統治しなければならないであろうし、また同様に、生れにおいて際立って優れている人は、自由人として生れたことに基づいて（統治への）権利を主張する人々を統治しなければならないであろうからである。これと同じことが同様に卓越的力量に基づく貴族制（有徳者統治）（アリストクラシー）にも生じるであろう。というのは、もし一人の人が統治体（ポリテウマ）の中の他の優れた人々よりもさらに優れた人であるならば、まさにこの人が、この同じ正当な権利にもとづいて、最高の権限を有す

る者にならざるを得ないであろうから。従って、大衆が少数者よりも強力であるという理由で、大衆が最高の権限を有するべきであるとするならば、もし一人、あるいは一人よりは多いが多数者よりは少ない者達が、他の者達より強力であるとしたら、これらの者（一人ないし少数の強力な者）が大衆よりも最高の権限を持つべきであるということになろう。

従って、すべてこれらの事は、自分達こそが統治し、他のすべての者は自分達によって統治されるのが妥当とする主張を基礎づけるこの論拠がどれ一つとして正しくないことを明らかにしているように思われる。というのは、確かに、卓越的力量にもとづいて統治体（ポリテウマ）に対する最高の権限を要求する人々に対しても、また同様に富にもとづいてそうした要求をする人々に対しても、大衆はある正当な道理を主張できるからである。実際、時には大衆の方が、大衆を個々に即してでなく、まとまった一つの集団と見なせば、少数者よりも優れていたり、また彼らより富裕であったりすることを妨げるものは何もないからである。

それゆえ、ある人々が追求し、提起している難問に対してもこのようにして対応することができる。すなわち、ある人々によれば、上述の事態が生じた場合、立法家が最も正しい法律を制定しようとする時、より優れた人々の利益を配慮して立法すべきか、あるいは多数者の利益を考慮して立法すべきか、という難問が生じるというのである。ここで言う「正しい」ということは、「等しく」正しいという意味に解すべきである。そして「等しく正しい」とは、国家全体の利益および市民の共通の利益にかなうことなのである。そして市民とは、一般に、統治することと統治されることとの双方に関与する者であり、各々の国家体制において異なっているが、最良の国家体制に関していえば、卓越的力量にもとづく生活を目指して、統治され、また統治することの双方を行う能力を持ち、またそうしたことを選択する者を言うのである。

しかしながら、ある一人の人が、また一人よりも多いが国家の成員を満たすには足りない数の人々が、卓越的力量において際立っていて、他のすべての人の卓越的力量も、市民としての能力も、これらの優れた人々が複数であるならばその各々に対して比較しえぬ程劣っており、また、そのような人が一人ならば、この人に対して比較しえぬ程劣っているような場合には、この

ような人々をもはや国家の一部と見なすべきではないのである。実際、その卓越的力量や市民的政治的能力において、これ程等しくない人々を、等しい者として評価するならば、彼らは不当な扱いを受けることになるだろう。というのは、このような人々は、まさしく人間の中の神の如き者といってもよいからである²⁸⁾。それゆえにまた、次のことも明らかである。すなわち、立法は、生れにおいても能力においても等しい者達について為される他ないということであり、上述の者達には、法は存在しないということである。実際、彼ら自身が法だからである。そしてまさに人が彼らに対して立法しようとするならば、それは笑うべきことであろう。というのは、おそらく、彼らは、アンティステネスが述べているように、野兎が集会で演説し、すべての者は平等を享受すべきであると主張した時にライオン達が出たであろう言葉(おまえ達の爪と歯はどこにあるのか²⁹⁾)を言うからである。それゆえに、こうした理由で民主制の国家は陶片追放の制度を定めているのである。すなわち彼らは、あらゆるものに勝って、平等を追求していると思われる。従って、富や多数の友人やその他の市民的政治的力によって、能力において卓越していると思われた人々を陶片追放し、一定期間国家から退去させてきたのである。また、神話の語るところによれば、アルゴ船の乗組員がヘラクレスを置き去りにしたのは、このような理由からであった。つまり、アルゴ船は、ヘラクレスの力が船員達のそれをはるかに凌駕していると考えて、彼を他の乗組員達といっしょにアルゴまで運ぶことを欲しなかった、というのである。それゆえ、僭主制を非難したり、トラシュブロスに対するペリアンドロスの忠告を非難する人々が、無条件に正しい批判をしているとは必ずしも言えないのである(実際、ペリアンドロスは、忠告を求めるために派遣された使者に対しては一言も述べず、穂のうちで高く擡んでているものを抜き取り、畑を水平になるようにしたと言われている。それゆえ、使者は、この出来事の意味が理解できず、起った事を報告すると、トラシュブロスは、高く擡んでた人を取りのぞくべきだと理解したという)。実際、このことは、僭主にとってだけ益となるものではなく、また僭主だけがこれを行うというものでもなく、寡頭制や民主制の場合にも同様な事情にある。というのは、陶片追放は、他に擡んでた人々を摘み取り、国から追放することと同様の力を持っているからである。また、これと同じ事を、覇権を握った者は諸々の国家や諸々の民

族に対して行っている。たとえば、アテナイ人は、サモス人やキオス人やレスボス人に対して、このようなことを行った（事実彼らは一度覇権を強力に確保するや、盟約に反して、これらの民を抑圧した）。またペルシャの王は、メディア人やバビロニア人や、その他の民族のうちで、かつて覇者であったということによって傲慢になっていた者達をしばしば刈り取ったのである。

だがこの問題は、一般的にすべての国家体制に関わる問題であり、従って、正当な国家体制についてもあてはまる問題である。というのは、逸脱した国家体制は私事だけを念頭においてこのことを行うが、公共善をめざす正しい国家体制においても事態は同様であるから。このことは、他の芸芸や知識についても明らかなことである。実際、画家は、大きさの均整を欠く足を、たとえその美しさが際立っているとしても、彼の描く動物に書き加えないであろうし、船大工は、船尾か、あるいは船の他の一部分にもそのような均整の欠落を許さない。また合唱隊の指揮者も、合唱隊全員よりも大きな、美しい声で歌う者を同じ合唱隊の一員に加えることはないであろう。この故に、たとえ君主（単独統治者）が、このような策を行ったとしても、彼自身による統治が国家に有益である場合、この君主（単独支配者）と国家との調和を破るものは何もないのである。従って、世間に認められた卓越（者）が存在する場合、陶片追放を擁護する議論は、ある程度の政治的な正当性を持っているのである。確かにこのような矯正策が必要とならないように立法家がはじめから、その国家体制を組織しておく方が良いであろう。しかし、このような事態が一旦生じれば、このような矯正策によって、誤りを正そうと試みることは次善の策というものであろう。しかしこのようなことは生じなかった。というのは、人々は、国家体制に固有の利益を考慮せず、党派的に陶片追放を利用したからである。確かに陶片追放は、逸脱した国家体制においては、それ固有の私的な観点から見れば、有益であり、正当なものであることは明らかなことであるが、他方で、それはおそらく絶対的には正しくないということも明らかなことである。しかしながら、最良の国家体制の場合にあっても多くの難問がある。すなわち、力とか、富とか、友の多さとか、またその他の善きものの優越があった場合ではなく、その卓越的力量において際立った人が登場した場合は、一体何をすべきであろうか、という問題である。実際、そのような人を追放し、他の場所に移すべきだと言う人はいないであろ

う。しかしまたそのような人を統治すべきであるという人もいないであろう。というのは、それはゼウスと統治職を分かち合いながら、ゼウスを統治しようと主張するようなものであるから。従って残された道は、そしてまさにこれこそ自然にかなったやり方だと思われるが、すべての人が喜んでこのような人に従うことであり、その結果この人は国家にあって、生涯王となるということであろう。

(B 1) 「教養」“paideia”について、バーカーは、次の注を加えている。

「ギリシャ語のパイデイアは、人間の諸能力の全般的養成 general training という意味を持っている。」

(B 2) 「貴族制」“aristocracy”について、バーカーは次の注を加えている。

「この言葉の近代的使用においては、貴族制（アリストクラシー）は、出自と結びつけられている。アリストテレスにおいては、それは、出自と結び付けられていない（出自は、彼の見解においては、一般的には富と結びつき、これら両者は、ともに寡統制の基礎を形成する）。それは、人物の功績あるいは優秀さと結び付けられている。そしてそれは最良の者達 aristoi の統治を意味している。」

(B 3) 第一三章の最後の文章に対して、バーカーは、次の注を加えている。

「ニューマンは、極めて適切に、ミルトンの『イングランド人民の第二の擁護』における、クロンウェルの地位を弁護する文章を引用している。『我々は、少数の者を除けば、すべて、主権の掌を喜んで汝の比類なき能力と徳に譲ろう。しかしながら、この少数の者達は、次のことを知らないのである。すなわち、最高の権力が最も優れた、最も賢明な人物に委ねられることよりも理性に適ったものは、この世にはない、ということを知らないのである。』」

第十四章

上述の議論の次に、さらに論議を進めて王制について考察するのが、おそ

らく正しいことであろう。というのは、我々は王制を正しい国家体制の一つと主張してきたのだから。そして、立派に統治されることを望む国家や領域にとって、王制による統治は有益なのか、それともそうではなくて、むしろ何か別の国家体制の方がより有益であるのか、それとも、王制はある国家にとっては有益であるが、他の国家にとっては有益でないのか、について考察しなければならない。しかしまず第一に、王制の種類は一つであるのか、それとも多くの種類があるのか、を確定しなければならない。

さて、王制が多くの種類を含むものであり、統治の様式もすべてにおいて同一ではないということを認めるのは容易なことである。実際、ラコニア（スパルタ）の国家体制においては、王制は法にもとづく王制の中でも最も強力なものであると思われるが、あらゆる事柄に対して最高の権限を有するものではなく、国土を出て出征する時に、戦争に関する事柄の指導者（ヘゲモン）であるにすぎない。その他には、神々に関する事柄も王に委ねられている。従って、この種の王制は、全権を持った、しかも終身の将軍職のようなものである。というのは、王は人を死刑にする権限を有しないからである。ただし古の人々の間で行われていたように、軍隊が出征している時には、兵士の怯懦を理由に³⁰⁾、自らの手の権利にもとづいて死刑を課すことはできたのである。ホメロスがこれを明らかにしている。というのは、アガメムノンは、集会では悪口を言われても忍耐したが、外征した時には死刑に処する権限を持っていたからである。ともかくもアガメムノンはこう言っている。

我が戦場から離脱した者は……犬や秃鷹から安全に逃れることができる
 と思っではならぬ。

なぜなら、死は我が掌中にあるゆえ³¹⁾。

従って、これは、終身の将軍職であって、一種の王制である。そしてこの種の王制のあるものは血統に拠っており、あるものは選挙に拠っている。他方、これらの王制と並んで、別種の君主制（モナルキア）があり、それは、二、三の野蛮な民（バルバロイ）のもとにある王制の如きものである。それらはすべて僭主制（テュラニス）に似た力を持っている。しかしそれは、法に基づき、父祖伝来の世襲によるものである³²⁾。実際、一方で野蛮な民はギリシャ人よりも、他方でアジアの諸民族はヨーロッパの諸民族よりも、その習性（エートス）がより奴隸的であることによって、奴隸主的支配を少しも苦

痛を感じずに耐えることができる。従って確かに、このような事柄のために、これらの王制は僭主制（ティラニス）的なものである。しかし、世襲であり、また法に基づくものであるので堅固なものである。またその同じ理由によって、護衛兵も王制風であり、僭主風ではない。というのは、一方では市民が武器を持って護衛するのは王であり、他方では僭主を護衛するのは外国人の兵だからである。事実、一方は法にもとづき、且つ自発的に服従している者を統治するのに対して、他方は不本意な者を統治するからである。従って、一方は護衛兵を市民から得るのに対して、他方はその護衛兵を市民に対して持つことになるのである。

従って、以上が、二種類の君主制であるが、その他に、古代のギリシャ人の間に存在していたので人々がアイシュムネーテス（執政）と呼んでいるものがある。これは、簡単に言えば、選ばれた僭主であり、野蛮な民の君主制と異なっている点は、法に基づかない点にあるのではなく、ただ世襲的でない点にあるのである。そしてそのある者は生涯にわたってその統治職に就いていたし、他のある者は、一定の期間において、あるいはその仕事が終わるまで職に就いていた。たとえば、かつてミュティレネ人は、アンティメディデスと詩人アルカイオスを指導者と仰いでいた追放者達に対応するために、ピッタコスを選んだ。アルカイオスは、彼らがピッタコスを僭主として選んだことを酒宴の歌の中で明らかにしている。実際、彼は次のように非難している。

生れの卑しきピッタコスを
皆で寄って誉めそやし
柔弱にして、不運に打ちひしがれし国の
僭主にぞ選べり³³⁾。

従って、これらの君主制は、奴隷主的であることによって、僭主制的であるし、またかつてそうであった。また、選ばれるという点および心服している者を統治するという点において、王制的である。

王制的な君主制の第四の種類は、英雄時代のもので、自発的に服従する者を統治し、しかも世襲的なものであり、法に基づいて生じたものである。というのは、その最初の者達が、技術や戦争について、民衆の恩恵者となったために、また民衆を一つに統合したり、土地を提供したりしたことにより、

彼らが、自発的に服従する者達の王となったからであり、そして、その後継者達に世襲的に受け継がれていったからである。事実、彼らは、戦争における最高の命令指揮権を持ち、神官が関与しない宗教儀式を主宰し、またこれに加えて、訴訟に対して判決を下したのである。そしてこれをするのに、ある者は、宣誓をせず、ある者は宣誓をした。その宣誓は王笏を高く差し上げることであった。確かに、昔の王達は、都市部に関するだけでなく、国内、国外に関する事柄を、絶えまなく恒常的に統治した。しかし、後代では、ある事柄については、王達自身が自分で放棄し、他の事柄については、民衆が奪い取ったので、他の国家においては、王には、ただ祭祀だけが残されたのである。そして王制と呼ぶに値するところでも、王達は、国外において、戦争の指揮命令権だけを持っていたのである。

従って、これらが王制の種類であり、その数は四である。その一つは、英雄時代のものである（これは、自発的に服従する者を被治者として持つ形であり、その統治は一定の限定された事柄に限られていた。すなわち、王は將軍であり、裁判官であり、また神々に関する事柄について最高の権限を持つものであった）。第二の型は、野蛮な民族（バルバロイ）の王制である（これは、血統による支配であり、法に基づく奴隷主的支配である）。第三の型はアイシュムネータイアと呼ばれている（これは、選ばれた僭主である）。第四のものは、ラコニア（スパルタ）の王制である（これは、簡単に言えば、終身の、世襲による將軍職である）。従って、これらの王制は、このように互いに異なっている。王制の第五の型は、各々の民族（エトノス）や各々の国家が公共の事柄に最高の権限を有するように、万事について一人で、最高の権限を有する場合の王制である。それは、家長的統治（オイコノミケー）に対応するものである。実際、家長的統治は、家の王的統治であるように、この王制は、一つの国家なり、あるいは一つまたは多くの民族（エトノス）の家長的統治体制（オイコノミア）である。

（B1） アイシュムネーテスについて、バーカーは次の注を加えている。

「ギリシャ語のアエシュムネータイ *aesumnētai* のいくつかは、通常の統治職である。しかしアリストテレスは、この言葉を特別の統治職を指す言葉としてのみ用いている。この特別のアエシュムネーテスは一般

的には、ローマの独裁官に類似している。以下の点を指摘しておこう。

(1)ローマの独裁官は、正規に元老院によって採択された布令に基づいて、執政官の一人によって任命された。(2)任期は、6ヶ月かそれ以下であり、(3)常に特定の任務 — *rei gerundae causa* (一般的には外交と防衛の領域におけるある困難な仕事の遂行のために)あるいは、*seditionis sedandae causa* (国内の不和を鎮めるために) — の遂行のために任命された。」

(B 2) 万事において最高の権限を有する王制について、バーカーは、次の注を加えている。

「この種類の王制は、万事において主権者であるから、次の章の初めにおいて言及されているように、絶対的王 *allking* (ギリシャ語で *pam-basileus*) と呼んでもよいであろう。彼の権力全体は、次のことを意味している。すなわち、彼の地位は、(1)彼と同様の権力によって自らを統治する共同体全体の地位になぞらえることができるし、(2)彼の家族全体に対して同様な権力を行使する家長の地位になぞらえることができる。この第2の見解からは、パンバシレウスは、ボダーンやフィルマーの理論の家長的主権に類似する。」

(訳注) このバーカーの注釈は、彼のアリストテレス政治学理解全体を左右する重要な論点であり、これについては筆者の下記の論文を参照せよ。「アリストテレス政治学における『コイノーニア』と家と王の統治」(岡山大学法学会雑誌 第50巻第三・四号 [2001年3月])

第十五章

従って、考察すべき王制の型は、いわば二つであるといってもよいであろう。すなわち今述べた型とラコニア人(スパルタ人)の型である。実際、他の多くの王制は、この中間にあるからである。すなわち、それらの王制は、その最高権限において、絶対的な王制(パンバシレイア)よりも小さく、ラコニアの王制よりも大きいのである。従って、考察すべき事柄は、ほとんど二つのことに関するものである。すなわち、その一つは、終身の將軍職を持つことが、それが世襲であるにせよ、交代であるにせよ、国家にとって有益であるのか否か、であり、もう一つの点は、一人の人物が万事について最高

の権限を持つことが有益であるか、否か、である。そして、このような將軍職についての考察は、国家体制の種類を考察するというよりは、法の種類を考察することになる（というのは、これは、あらゆる国家体制の中に生じうるものだからである）。従って、当面は、この問題は棚上げにしておこう。しかし、王制の残りの型は国家体制の一種であり、従って、これについては考察すべきであって、その中に含まれている難問については、ひとあたり概観しておかねばならない。こうした研究の出発点は、最良最善の人物によって統治される方が有益なのか、それとも最良最善の法によって統治されるのが有益か、という問題である³⁴⁾。

さて、王によって統治されることが有益であると考える人にとって、法はただ一般的な事柄だけを指示するのであって、様々に生起する状況に対応して命令を下すものではないと考えられており、従って、いかなる技術であれ、書かれた規則に従って統御することはばかげたことであると考えられているのである。そしてともかくエジプトでは、医者には四日後に、処方を変更することが許されているが、それはある意味において善いことである³⁵⁾（それ以前であれば、自らの危険を犯してそうすることもできる）。従って、書かれた規則や法にもとづく国家体制は、これと同じ理由によって、明らかに最良の国家ではないということになる。

しかしながら、統治者のもとには、確かに上述の一般的な規則が存在しなければならない。ところで、感情に支配されやすい要素を全く持っていないものは、生まれつきそれを持っているものよりも優れている。しかし、この感情的な要素は、法律にはないが、人間の魂は皆、これを必ず持っている。しかし、おそらく人は言うであろう。そのかわり、個別的な事柄に関しては、人間はより優れた審議をなすことができるであろう、と。それゆえに、一方においてかの最も優れた人が立法者であるべきであり、また法が制定されるべきであることも明らかであろう。しかしながら、法に逸脱がある場合には、それは最高の権限を有しないであろう。もっとも、その他の事柄に関しては、権限を有するべきだとしても。しかし他方で、法が全く判断を下しえない事柄か、あるいは適切には下しえないことがらについては、一人の最良の人が統治すべきであろうか、それとも市民のすべてが統治すべきであろうか。確かに、現に彼らが集合して、裁判をし、審議し、そして決定を下しており、

そしてこの決定はすべて個別的な事柄に関することである。たしかに、彼らのうち、個々人をとって比較すれば、おそらく誰でも最善の人よりも劣っているであろう。しかし、国家は多数者から構成されているのであり、皆が持ち寄った宴会のご馳走が、一人の単純なそれよりも立派であるように、大衆は一人の優れた者よりも優れている。それゆえ、大衆は、どんなに優れた一人の人よりも、多くの場合、より優れた判断を下すものである。

さらに、多数の方が墮落しにくいものである。多くの水が腐敗しにくいように、大衆の方が少数者よりも、よりいっそう腐敗しにくい。また一人であれば、怒りやその他のそのような感情によって打ち負かされる時には、その判断は腐敗せざるを得ないのであるが、他方の場合にあっては、すべての人が同時に激情にかられて誤ちを犯すというようなことはほとんどあり得ないことである。ただし、それは、大衆が自由人であって、法がその規定を省かざるを得ないことは別にして、法に反することは何事も為さない者達と仮定しなければならないが。もちろん、このことは、多数者にあっては容易なことではないとしても、なお多数が、善き人間であり、同時に良き市民であるならば、一人の人物の方がより墮落しにくい統治者であろうか。それともむしろ、数の上では多数者であるが、そのすべての人が善き人々である方が墮落しやすいのであろうか。多数者の方がより墮落しにくいということは明らかではないのか。「しかしながら、一方の多数者の場合は党派闘争を起こすが、一人の人物は起こさない」という人もいる。しかし、これに対しては、おそらく、かの一人の人物が優れていると同じように、多数の者もその魂において優れた者達である、と答えるべきであろう。そして、もし多数でありながら、そのすべての人々が優れた人々である者達の統治が、最優秀者統治制——貴族制——（アリストクラティア）と見なしうるならば、一人の人物の統治は王制と見なすべきであろう。そして国家にとっては、この貴族制の方が、たとえその統治が軍事力を伴ったものであろうと、また伴わないものであろうと、もしそこに多数でありながら、同様に優れている人々を見いだしうるとしたら、王制よりも望ましいものであるだろう。そして昔の時代に人々が王の支配を受け入れたのは、おそらく人としての卓越的力量において抜群に優れた人々を見い出すのが、非常に困難であったからである。とりわけ、かつて人々は小さな国家に居住していたので、なおさらそうであった。さらに、

二二二

人々が王を擁立したのは、その立派な奉仕によってであって、これこそ、優れた人々の仕事となるものである。しかし、多くの人々がその卓越的力量に関して同様の水準に達するようになると、もはや王の支配に耐えられず、何か共通の参与を求めて、国家体制を設立するにいたった。しかしまた彼らが墮落して公共に属する財から私腹を肥やすようになると、そこから寡頭制が生じるのも理屈にかなっている。実際、彼らは富を名誉なこととしたからである。そしてこの最初のもの（寡頭制）から僭主制へと変わり、この僭主制から民主制へと変わったのである。実際、彼らは卑しむべき強欲のために（支配に関与する者を）ますます少数にしたために、民衆をますます強力なものにしたのである。その結果、民衆が反抗して、民主制が成立するにいたったのである。しかし国家がますます大きくなってしまった以上、おそらく、もはや民主制以外の国家体制が成立するのは容易なことではないであろう。

しかし、人が、王による統治は国家にとり最良の形態であると考えたとしても、その王の子供達に関する事柄はどのようになるのであろうか。その一族が王になるべきであらうか。しかしながら、もし王の子孫たちが凡庸な人物となったならば、それは有害であらう。しかし、「最高の権限を持つ王は子供達にその地位を譲らないであらう」と王制支持論者は言うであらう。しかしそんな事はもはや容易には信じられないことであらう。実際にそんなことは極めて困難なことであり、それは人間の本性が許容する以上の卓越した能力を必要とすることである。

しかしまた、武力についても難問がある。すなわち、王として統治しようとする者は、自分の囲りに、服従することを欲しない者を強制できるような武力を持つべきであるのか、もしそうでないとすれば、彼はどのように統治をなすことができようか、という問題である。実際、彼が法の下に最高の権限を有するものであったとしても、また法に反して自分の意図するままに何かを行うことは全くないとしても、おそらく法を守るだけの武力が彼のもとに存在しなければならないだろう。従って、このような王については事柄を明確にすることは困難なことではないであろう。即ち、彼は兵力を持たねばならないが、その兵力は、個人一人一人のもの、あるいは彼らが集合した場合のものよりも強く、大衆のそれよりも弱くなければならない³⁶⁾。それは、ちょうど昔の人々が、ある人を彼らの国家のアイシユムネーテスあるいは僭主

と呼んでいる者に任じた時、彼らを与えた護衛兵の大きさと同じような規模であり、またディオニソスが護衛兵を要求した時、ある人がシラクサの人々に彼に与えるように忠告した護衛兵の数と同じような規模のものである。

(B) バーカーは、絶対的な王制（パンバシレイア）に対して、次のような注を加えている。

「これについての一般的な問題は、プラトンによって、とくに『国家 Republic』において提起されたものであるが、しかしまた『政治家 Politicus』においても、そして少ない程度においては『法律 Laws』においても提起された。プラトンの一般的な解答は、統治の仕事に対して特別に訓練された統治者個人（あるいは統治者達）の自由な哲学的知性に好意的であった。それは、固定された、生命のない法体系の統治に反対するものであった。アリストテレスの回答は、よりバランスのとれたものであり、全体として、法の統治により好意的である。しかしかれは、一人の最良の人間の自由な知性が主権的な権限を持つ場合もある、ということを知っているし、事実またそう主張している。しかしながら、以下のことは注意すべきであろう。すなわちプラトンは、アリストテレスほどには、一人の人間ないし一人の君主という問題に関心を払わなかった。彼の関心は、自由な知性の統治という点にあり、それが一人のものであるのか、一人以上のものであるのかは、どちらでもよいのである（哲人王の統治という有名な句は複数である）。それに対して、アリストテレスの関心は、君主制それ自体、一人の人間による統治に向けられている。アリストテレスに、マケドニアにおける滞在（B. C. 343以降）と若きアレクサンダーに対する教育という事実が影響を及ぼしているのであろうか。アリストテレスはこのアレクサンダーに対して、『君主について』という作品を書いたと言われている。」

第十六章

しかし、今や我々は、自分自身の意志に基づいて万事を為す王についての論議に立ちいたった。それゆえその事についてこれから考察しなければなら

ない。事実、いわゆる法に基づく王は、すでに述べたように国家体制の類には入らない（というのは、終身の將軍職は、たとえば、民主制や貴族制におけるように、すべての国家体制においても存在しうるものであり、多くの人々は一人の人間を統治の最高の権限ある者に任じている。このような統治職はエピダムノスにも存在しているし、また権限の程度は小さいが、オプスにも存在している）。しかしながら、いわゆる絶対的王制については（これは、王が自分自身の意志に従って万事を統治する国家体制であるが）、ある人々には、一人の人物がすべての市民に対して最高の権限を有するというのは、国家が同質の人々から組織されているところでは、全く自然にかなっていないように思われる。というのは、彼らにおいては、本性上等しい者は、同じ正当な権利や同じ価値評価を当然持つことになるのは自然にかなっていると考えられているからであり、従って、体の等しくない者が等しい食物とか衣服を持つことは、彼らの肉体に有害であるように、名誉の公職についても同様であると思われるのである。従ってまた同様に等しい人々が等しくないものを持つことも有害である。それゆえ、何人も統治される以上に統治することのないことが、正義にかなっており、また順番に統治するのが同様に正しいことなのである。

しかしこれはすでに法の事柄に属する。というのは、このような組織は法に属することであるから。それゆえ、誰か一人の人が市民を統治するよりも、法が統治する方が望ましいし（という議論がなされ）、またこれと同じ議論に従えば、もしも幾人かの人々が統治するのがより善いことだとしても、このような人々を、法の番人、あるいは法の僕として任じるべきであるということになろう³⁷⁾。確かにいくらかの統治職というものは必ず存在しなければならない。しかし、すべての人が等しい人々である場合には、一人の人がそのような統治職にあるということは正義にかなったことではないと、彼らは主張するのである。

たしかに、法が規定しえないと思われる事柄は、人間もまた判別できないであろう。しかし、法は、統治職にある者をその目的にかなうように教育し、法が規定せずにおいた残余の事柄を「出来る限り正しい判断によって」、判定し、統治することを彼らに委ねている。さらに、法は、経験ある人々に、何であれ彼らが制定された法よりも良いと考える点については、法を訂正する

ことを許している。従って、法が統治すべきであると主張する人は、ただ神と知性（ヌース）だけが統治すべきであると主張しているように思われるが、人間が統治すべきだと主張している人は、（統治者に）野獣を加えているように思われる。というのは、欲望（エピティウミア）とは、そのようなものであるから。そして激情（ティウモス）は、統治者達を、たとえ彼らが最良の人であっても、誤った道に導くからである。それゆえ、法とは、衝動的欲求（オレクシス）を欠いた知性である。

また、技術を例証とする議論は、誤りであるように思われる。この議論によれば、書かれた規則によって治療を受けるのは、愚かなことであって、専門技術を持つ者にかかるのが望ましいということになる³⁸⁾。確かに、医者は、患者に対する愛情から規則に背いた処置をすることはなく、ただ患者を治して、その報酬を受け取るだけである。しかしながら政治的な統治の任にある場合には、人々は悪意と情実に従って多くのことを行うのを常としている。そして医者においても、敵に説得されて、利につられて患者を殺すのではないかと疑われる場合には、患者はむしろ書かれたものにもとづく治療を求めらるであろう。しかし医者自身が病気になった時には、自分のところに別の医者を招き入れるであろうし、体育教師も自分が体育訓練を行うときには別の体育教師を呼び招くだろう、というのは、自分自身に関する判断をするために、またその判断が感情に支配されるために真実を判定することができないと考えるからである。従って、正しさを追求する人々は中間のものを追求しているということは明らかなことである。事実、法とは、中間なるものである³⁹⁾。

さらに慣習にもとづく法の方が、書かれた法よりも、よりいっそう権威があり、またより大きな権限に関する事柄を扱うものである。従って、統治者としての人間の方が、書かれた法よりも安全で誤りが少ないのではあるが、慣習にもとづく法よりも安全であるわけではない。

しかしまた、一人の人物が多くのことを監督することは容易なことではないであろう。それゆえ、彼によって任命される統治者は多数でなければならない。もしそうであれば、はじめからただちにこのような状態が存在するのと、一人の人物によってこのように任命されるのとでは、どこに相違があるのであろうか。さらに、これはすでに述べたことであるが、もしも一人の優

れた人物が、人より優れているという理由で統治することが正義にかなっていないとするならば、一人よりも二人の善き人の方が、より善いことになる。

事実、「二人そろって行けば……」とか⁴⁰⁾

「私にこのような助言者が十人いれば」⁴¹⁾

というアガメムノンの祈りはこのようなものである。また、法が規定できない事柄について、裁判人のように、これらの若干の問題を判定する権限を持っている統治職もあるのである。とは言っても法が判断しうる事柄については、法が最良の統治をなし最良の判断を下しうることを疑う者は誰もいない。しかしながら、ある事柄は法に包括されうるが、ある事柄は包括されえないのであるから、この後者の点において、最良の法が統治するのがより望ましいことか、それとも最良の人間が統治する方がより望ましいのか、という問題が提出され、追求されることになるのである。というのは、人々が熟考して審議する事柄は、法制化の不可能な事柄に属するからである。従って法の擁護論者の人々も、このような事柄について判定をなす者は人間である他ないという主張に、反論をするものではなくて、それが一人だけである、というのではなく多数であるべきだと主張しているのである。事実、個々の統治者達は、法によって教育されれば立派な判断を下すものであり、また人が二つの目と二つの耳で判断し、二つの足と手で行為する方が、多くの人が多くそれらのものを用いて見るよりも善く見ることができるとするならば、それは確かに奇妙なことであると考えられるであろう。というのは、今日でも君主達は多くの人々を自分の目や耳や手や足としているからである。実際、君主達は、その統治に対して、また自分自身に対して好意を持つ者を共同統治者としている。確かに彼らが君主の友人でなければ、君主の意図に従って行動することはないであろう。しかし彼らがこの君主とその統治に好意を寄せる友人であるならば、たしかに友とは同等の者、同類の者であるから、従って、もし君主が、このような人々自身統治すべきであると考えれば、彼は同等の者、同類の者が彼と同様に統治すべきであると考えていることになる。

こうして王制に反対している人々が述べている点はほぼこのようなものである。

(B 1) 「出来る限り正しい判断に従って」について、バーカーは、次

の注を加えている。

「ニューマンの注によれば、この句は、アテナイの陪審員の宣誓の言葉から採られたものである。陪審員は、『法のあるところは法に従って、法のないところは、わが内なる判断に従って正しく投票』することを誓った。この句は、一般に『公正 equity』すなわち epieikes の観念を含んでいる。」

(B2) 欲望 (エピティウミア) と激情 (ティウモス) について、バーカーは次の注を加えている。

「ここで使われている言葉 (epithymia と thymos) はプラトンの『国家』を想起させる。欲望 epithymia は物質的な満足を求める肉体的な欲求である。激情 thymos はそれほど肉体的なものではなく、それほど物質的対象にむかうものではないが、しかしなお自己中心的であり、野獸的性質を持っている。それは、シェイクスピアの詩句に詠われた精神である。『しかしもし名誉を切望することをもって、罪とせば、われこそ、もっとも邪な魂なり。』」

(B3) アテナイにおける法の修正手続きについて、バーカーは次の注を加えている。

「この句は、アテナイの慣行を参照したものであるように思われる。ペリクレスの改革の下で、様々な機関のバランスのとれた結合によって、現存の法に対して毎年の審査と修正をおこなうという法規が採択された。その機関とは、二つの特別の機関と民会を含むものであり、また法の作成と変更に対して、司法的な手続きの形式と保証を与えるように組織された。それは次のような内容である。(1) テスモテタイ thesmothetai と呼ばれる6人の役人は法を毎年審査し、不完全な法について報告し、必要とされる新たな法を起草するという義務を負った。(2) 民会は、テスモテタイの報告に基づいて、法の実情を審議した。(3) 新たな法が提案されると、ディカステリア (裁判所) の成員から選ばれる、ノモテタイの一団が新たに任命された。そしてその前に、新しい立法のための案件が議論されねばならなかった。こうして執行的、評議的、司法的機関がすべて法の審査と修正の手続きのために結合された。執行機関としてはテスモテタイを通じて、評議機関としては民会を通じて、そして司法機関と

しては法廷の成員から選ばれたノモテタイを通じて。」

第十七章

しかしながら、このような議論は、おそらくある人々においては、まさにこのようなものであるが、他の人々においては、別様であろう。実際自然本性的に奴隷主的統治⁴³⁾に服するものもあれば、王的統治⁴²⁾に服するものもあり、市民的政治的統治もあるのであって、またそれは正義に適っており、有益でもある。しかし、僭主的統治は自然に適っておらず、また他の国家体制で逸脱したものも、どれも自然に適っていない。実際、これらのものは自然本性に反して生じてきたものである。しかし、すでに述べたように、人々が人間として同様で同等な場合には、一人の人が他のすべての人に対して最高の権限を持つということは、有益でもないし、正義に適ってもいないことは明らかである。このことは、法が存在しない場合であっても、妥当することであり、法がある場合には、その一人の人が法となるわけだが、その場合でも同様であり、また、一人の善き人が善き人々に対して最高の権限を持つ場合であっても、また一人の悪しき人が悪しき人々に対する最高の権限を持つ場合であっても、有益でもなく正しくもないであろう。またこの人がある種の卓越的力量を除いて、人としての卓越的力量という点で他の人よりも優れていたとしても同様である。ではその、ある種の卓越の性向とは何であるのか、が述べられるべきであろう。ただしそれはすでにある点では言及されているが⁴⁴⁾。

しかしまず第一に規定すべきことは、王制的統治にふさわしいものとは何であり、貴族制的統治（最良者統治制）にふさわしいものとは何であり、市民的・政治的統治にふさわしいものとは何であるか、という点である。まず王制にふさわしいものは、市民的・政治的指導力に関わる卓越的力量という点で卓越している一族を自然本性的に生み出すような種類の大衆である。貴族制にふさわしいものは、市民的・政治的統治の能力において指導的力をもつ人々による、自由人に対する統治をなしうる集団を自然本性上生み出すような種類の大衆である。市民的・政治的統治にふさわしいものは、富裕な人々にその能力価値に応じて統治職を配分し、法に従って統治しまた統治される、

戦争遂行能力をもった集団が自然に生じるような、そういう種類の大衆である。従って、一族全体、あるいは、誰か一人の者が、その卓越的力量において際立っていて、他のすべての者の力量よりも優れているような場合が生じた時には、その場合には、この一族が王族となって、すべての事柄に最高の権限を有する者となり、またこの一人が王となることは、正義に適ったことである。というのは、前に述べたように、これらのことがこのように言うるのは、貴族制や寡頭制やさらに民主制というような国家体制を確立しようとする人々が常に持ち出す正義・公平という観点からだけでなく（実際彼らはすべて、同一の卓越性というのではないが、しかし、卓越性を根拠として権利を主張するから）、またすでに述べられた観点にからも、そのように言うことができるからである。というのは、このような人物を殺したり、国外追放に処したり、貝殻追放にしたりすることは、適切なことではないし、順番に統治されることを要請することも適当なことではないであろうから。実際、部分というものは本性上全体を越えることはありえないのであるが、このように著しく卓越した力量を持っている人においては、このような事（部分が全体を凌駕する関係）が生じているのである。従って、残されたことは、このような人に従い、このような人が、順番にではなく絶対的に最高の権限を持つということだけなのである。

かくして、王制について、それにどのような種類があるのか、またそれは国家にとって有益であるのか、否か、またどのような国家にとってそうなのか、またどのような状況の下でそうなのか、については、以上の如く規定されたこととしよう。

(B 1) 「このような人に従い、このような人が、順番にではなく絶対的に最高の権限を持つということ」の部分に、パーカーは、次の注を加えている。

「この段落は、アリストテレスの発言は絶対的王制を支持するものである、という極端な主張を含んでいる。それは、実践的な主張というより、むしろ一つの論理的な必然性（それは漠然とした一般的表現のままにおかれている）の結果である。」

(B 2) 「国家体制」“polity”について、パーカーは次の注を加えてい

る。

「『富裕な人々に、その能力価値に応じて』という言葉は奇妙であり、理解に苦しむ表現である。第一に、それは自己矛盾している。もし統治職が富裕な人々に配分されるのであれば、それらは能力価値に応じて配分されるのであろうか。また逆に、それらが能力価値に応じて配分されるならば、それらは富裕な人々だけに配分されるのであろうか。第二に、これらの言葉は、能力価値のある者を優先するという条件を付しながらも、すべての市民に統治職を配分するという、我々が期待しているものに反している。しかしながら、この箇所の『富裕な人々』というのは、『軍務のための武具を自弁できるほどの富裕者』を意味しているだけかもしれない。アリストテレスがすでに、市民体は軍事的能力を所有するものであるという理解を持っていたことはこうした見解を裏付けるものであるかもしれない。そのような場合は、統治職は、その程度の富を持つ市民体のすべての成員に門戸が開放され、交代でその職を務めるということになるであろうが、能力価値に対して優先権が与えられるであろう。」

第十八章

さて、我々は、正しい国家体制は三つであると主張してきた。すなわち、その中でも、最良の人々によって統治されるものこそ、必然的に最も善い国家体制であり、そこでは、一人の人間、あるいは一族全体が、あるいは大衆が、その卓越的力量の点において際立っているという状況があり、最も望ましい生活をめざして、ある人々が統治され、また他の人々が統治することができるのである。それゆえ、また先の議論でも指摘してきたように、一人の人間の卓越的力量と最良の国家の市民のそれとは、同じものでなければならぬのであるから、人は、立派な人になるのと同じ方法で、また同じ手段によって貴族制あるいは王制というような国家を設立することができるであろうことも明らかなことである。従って、教育も習慣も、立派な人間を作るものと、市民的政治的指導者と王とを作るのとはほとんど同一のものということになるであろう。そしてこれらの事柄が説明されたので、今や最善の国制に

ついて、それが本来いかなる方法で生じてくるのか、またどのようにして設立されるのかを語を試みなければならない。…… [これについて適切な考察を試みようとする者は、……せねばならない]、

(B) パーカーは、この章の最後の句の [] の部分に、次のような注を加えている。

「唐突な中断で終わっているこの章の最後の言葉は、第七巻の冒頭にそのまま繰り返して登場する。『政治学』の巻構成の順番を変更すべきか、また第七巻が直接第三巻に続くべきか、という問題は、古くから学者の間で提起されてきた問題である。いまのところは、この章の終わり、もしくはこの章の全体が後の追加であるかもしれないということで十分であろう。しかしこの点も明確な事柄ではない。そして最良の国家、あるいは国家体制の最良の型は貴族制あるいは王制であるという命題は、第七巻、第八巻の議論と一致しない。第七巻、第八巻は王制については何も語らず、貴族制についてはわずかに触れるのみである。他方、この命題は、この巻の第七章において国家体制の分類について主張されている事柄に一致する。」

(注)

- 1) ὁρισμὸς → D πολίτης
- 2) παχέως → D ταχέως
- 3) アリストテレス『アテナイ人の国制』第20章—第21章
- 4) ἔθνος ἐν ᾗ → D γένη
- 5) ヘラクレイトス『断片』12
- 6) エウリピデス『アイオロス』断片16
- 7) δοκίμου → D που
- 8) プラトン『国家』第10巻601D—602A 参照
- 9) [φανέν] → D φανέν
- 10) προσεφέλλκει τινὰς → D προσεφέλλεται
- 11) ホメロス『イリアス』第9巻648、第16巻59
- 12) <μῆ> μετέχοντας → D μετέχοντας
- 13) 『ニコマコス倫理学』第5巻第3章
- 14) συμμαχιῶν → D συμμάχων
- 15) プラトン『国家』第2巻369B以下
- 16) プラトン『法律』第4巻713E—714A
- 17) λέγεσθαι → D λίσσθαι

- 18) ἀνάγκη → D ἄν
- 19) プラトン『国家』第10巻601D—602A
- 20) ἄρχουσιν → D ἔχουσιν
- 21) ἀρχόντων → D ἐχόντων
- 22) διορίσαι → D δηλώσαι『ニコマコス倫理学』第5巻
- 23) ἅμα γὰρ καὶ → D ἄλλα γὰρ καὶ
- 24) 『ニコマコス倫理学』第5巻第3章
- 25) δὴ → D δ'
- 26) ἐὶςμιλλὸν τὸ → D συμβάλλοιτο
- 27) ὑπερέχει ὅλως ἀπετῇ μεγέθους → D ὑπερέχει ὅλως ἀπετῆς μέγεθος
- 28) プラトン『ポリティコス』303B
- 29) イソップ『寓話』241
- 30) ἐνέκα δειλίας → D [ἐν τιμῇ βασιλείᾳ]
- 31) ホメロス『イリアス』第2巻391—393 ただし最後の句は、現行の『イリアス』には存在しない。
- 32) εἰς δὲ κατὰ νόμον καὶ πατριαὶ → D κατὰ νόμον καὶ πατριαὶ <οὔσαι>
- 33) アルカイオス『断片』87
- 34) プラトン『ポリティコス』294A—295C
- 35) <εἶναι> πῶς → D はこの部分を削除している。
- 36) O版（オックスフォード版）は、ここに <καθεστάναι> を読む。
- 37) プラトン『ポリティコス』305C、『法律』第4巻715C—D
- 38) プラトン『ポリティコス』296B
- 39) 『ニコマコス倫理学』第5巻1132A22
- 40) ホメロス『イリアス』第10巻224
- 41) 同書第2巻372
- 42) δεσποτικόν → D δεσποστόν
- 43) βασιλευτικόν → D βασιλευτόν
- 44) この部分は、D版とO版とでは非常に異なっている。この訳では、O版の一箇所 πολιτικόν δυνάμενον を、πολεμικόν δυνάμενον と読んだ他は、基本的にはO版に従った。

アリストテレス『政治学』第四卷 (翻訳)

第一章

あらゆる技術と知識において、それらが部分として形成過程にあるのではなく、一つの種目分野として完成しているものであるならば、それぞれの分野について、それに適合している事柄を考察することは、一つの技術ないし学問に属することである。たとえば、身体（ソーマ）の訓練は、体にとってどのようなものが有益か、またどのような体にとって有益か、また最良の訓練はどのようなものであるのか（というのは、最良の訓練は、必ず最良の天与（タリ）の素質を持ち、最良の物的環境の備わった人に適合するものでなければならないから）、また、一つの訓練としては、いかなるものが多数の者すべてにとって最良のものであるのか（というのは、これは体育術の仕事であるから）、さらに、人が、競技に応じられる体質や競技に関する知識について、それに応じられる程度のものを求めない場合にも、ある程度の能力を養成してやることは、前に述べたことに劣らず体育教師や体育指導者の義務なのである。同様に、医術や造船や衣服の仕立てやその他あらゆる技術についてもこのような事態であることは我々のよく知っているところである。従ってまた、国家体制に関しても、以下のことを考察することは、明らかに同一の知識に属することである。すなわち、最良の国家体制とは何であるのか。また外的にいかなる障害もない場合、どのような性質のものが、願望という点からみて最も理想に適っているのか、さらに、いかなる国家体制がいかなる人々に適合するのか（というのは、多くの人々にとって、最良の国家体制を獲得することはおそらく不可能であるから。従って、優れた立法家や真の市民的・政治的指導者は、無条件に最良の国家体制と、与えられた条件の下で最善の国家体制との相違を見過（スル）してはならないのである）、さらに第三に、仮定にもとづく国家体制を考察しなければならない（というのは、現に与えられた国家体制についても、それが初めからどのように形成され、またいったん成立した国家体制は、どのようにすれば最も長期間維持されるか、を考察することができる

のでなければならないから。私がここで言おうとしているのは、たとえばある国家に最良の国家体制が存在せず、またそれに必要な条件さえも整えられておらず、また現存する諸条件において可能な国家体制も持たず、それより劣った国家体制を持つようなことが生じた場合のことである)。

さらに、これらすべての他に、すべての国家に最もよく適合する国家体制を見い出さねばならない。従って、国家体制について主張している多くの人々は、他の事柄については立派な説明をしているとしても、実用的な事柄を全く把握していない。というのは、最良の国家体制だけでなく、実現可能な国家体制を、また同様に、より容易に設立できる国家体制、またすべての国家に、より共通した国家体制を考察すべきであるから。しかしながら、現在、ある人々は最高の国家体制を、従ってその維持のために多大な資金を必要とする国家体制だけを追求しており、また他のある人々は、国家に共通したある国家体制を主張し、現存する国家体制を棄てて、スパルタの国家体制や、あるいは何か他の国家体制を称讃しているのである。しかし、現存する諸条件に基づき、容易に人々に理解され、かつ新たに改革すること⁹¹が可能な国家組織を導入し入れることが必要なのである。すなわち、学びなおすことは、初めから学ぶことに劣らず困難であるように、国家体制を改革することは、それを初めから制定することと同様に困難な仕事である。それゆえ、すでに言及されたことに加えて、先に述べたように、市民的・政治的指導者は、現存する国家体制に対しても、手を差しのべることができなければならない。しかし、このことは、国家体制の種類がどれぐらいあるのかを知らなければ不可能なことである。しかし、現にある人々は、民主制も寡頭制も一種類しかないと考えているが、これは正しくない。従って、国家体制の種別についても、それがどれぐらいあり、また、幾通りの方法によって組み合わされるのか、という点を看過してはならない。また最良の法と、国家体制の各々に適合する法とを識別することも、これと同一の思慮に属することである。なぜなら、国家体制に応じて法が制定されるべきであり、また事実すべての法はそうのように制定されているのであって、法に応じて国家体制を設立しているのではないからである。

そもそも、国家体制というのは、国家における統治職について、それをどのように配分するのかに係わる組織であり、また何が国家体制の最高の権限

を有するものか、また、何が各々の共同的結合の目的であるのか、を定めるものである。しかしながら諸々の法は、国家体制を明らかにするものとは全く別物であって、統治者が統治する際の拠り所であり、犯罪者を監視する際の拠り所となるべきものである。従って、法の制定のためにも、各々の国家体制の種類とその定義を把握することが必要となることは明らかなことである。事実、民主制も寡頭制も、多くの種類があって、ただ一つのものではないのであるから、同一の法がすべての寡頭制にも、すべての民主制にも有益であることはありえないのである。

(B1) 「仮定にもとづく国家体制」について、バーカーは次の注を加えている。

「これは、市民生活の達成度において、最良の国家体制ないし相対的に優れた国家体制のいずれよりも劣った国家体制、という仮定である。それは、体操競技に関して、競技に必要な基準を達成したくない人によってなされる訓練の、政治の分野におけるその対応物である。」

(B2) 「実用的な事柄」(ta chresima) について、バーカーは次の注を加えている。

「この言葉 (ta chresima) は、第4巻、第5巻、そして第6巻の基調をなしている。これらの巻は、すべて実践的な有効性にかかわる事柄によって占められているから。すなわち現実の国家体制の維持に有効な施策と、現実の国家体制の実践的な改革に有効な施策とが論じられているのである。」

第二章

国家体制に関する最初の研究において、我々は三つの正しい国家体制として、王制、貴族制、「国家体制」を区別し、他方、これらの国家体制の逸脱形態を三つ、すなわち、王制のそれは僭主制、貴族制のそれは寡頭制、「国家体制」のそれは民主制を指摘した。そして貴族制と王制についてはすでに言及してきたところである（実際、最良の国家体制について考察することは、このような名前をもったものについて言及することと同じ事柄である。なぜな

らこれらの国家体制はいずれも豊かな資力に支えられ、人の卓越的力量にもとづいて組織された国家体制を志向しているからである)。さらに、貴族制と王制とは、相互にどこが異なっているのか、またどのような場合に王制を採用すべきか、については先に説明されたところである。従って、国家体制として共通の名称で呼ばれている「国家体制」と、その他の国家体制、すなわち、寡頭制、民主制、僭主制について詳細に検討することが残されている。

さて、これらの逸脱した形態の中で、どれが一番悪いものか、また何が二番目に悪いものかは明らかである。実際、第一の、最も神的なものから逸脱しているものが、最悪なものであるのは当然のことであって、王制は、実体のない、ただ王制という名前だけのものであるか、あるいは、王たる者の卓越した力量によるものであるか、どちらかでしかないのである。従って、僭主制は最悪のものであって、国家体制としてあるべき姿から最も遠く離れているに相違ない。また寡頭制は二番目にそれから遠く離れており(というのは、貴族制はこの国家体制から非常に離れているからである)、民主制は最も穏健な制度である。

たしかに、すでに先人のある者はこのような見解を述べていたのであるが²⁾、しかし我々と同じ点に着目していたのではない。すなわち、彼は、たとえば寡頭制やその他の国家体制には有益なものがあるというように、すべての国家体制には良いところがあるとして、その場合には、民主制はその中でも一番悪いものであるが、国家体制が劣っている場合をとれば、その中で民主制は最良のものであると判断している。しかしながら、我々は、これらの国家体制はすべて、全く誤れるものであると言うし、また、一つの寡頭制は他の寡頭制よりも優れているという見解は、正しくはなく、むしろ、より悪くはない、と言うべきであると主張しているのである。しかし、これらの問題については、今は触れないでおこう。というのは、我々にとって為すべき第一のことは、民主制と寡頭制の種類が多くあるとすれば、国家体制の種類は、どれ程のものがあるかを確定することであり、さらに、共通に受け入れられる国家体制とは何であり、最良の国家体制に次いで望ましい国家体制は何であるのか、さらにもしもある他の国家体制がたまたま貴族制的であって、しかも立派に組織されていて、しかも同時に多くの国家に適合しているものがあるとすれば、この国家体制はどのようなものであるのか、また他の国家体

制の中で、どのような国家体制がどのような人々に望ましいか(というのは、おそらく、ある人々にとっては、民主制は寡頭制よりも必要であり、また他の人々にとっては、後者の方が前者よりも必要であるから)。さらに、これらの問題に次いで、これらの国家体制を望む人々は——私は民主制の各々の形態、また寡頭制の各々の形態のことを言っているのであるが——どのような方法によって、国家体制を設立するべきか、を確定しなければならない。そして最後に、これらすべての問題について、できる範囲内で簡潔に言及したあとで、国家体制の崩壊と維持がどのように行われるかを、すべての国家体制に共通したあり方および各国家体制のそれぞれのあり方に即して検討しようと思う。また、本来、いかなる原因によって、最も多くこのような事柄が生じるのか、を検討しようと思う。

(B) 第2章の文脈における、アリストテレスのプラトン批判について、バーカーは次の注を加えている。

「プラトンとアリストテレスの間の相違は、名称の相違にすぎない。また名称の問題においてすら、ニューマンも注記しているように、プラトンは、『寡頭制の良い形態』について語っていない。彼は『貴族制 (アリストクラシー)』の語を使っている。」

第三章

さて、国家体制には多くの種類があるということは、すべての国家が、数の上で多くの部分からできているということにもとづいている。

まず第一に、我々は、すべての国家は、家族から成り立っていることを見ている。さらに、この多数の家族のうち、あるものは富裕で、他のものは、貧乏で、またある他の者は、その中間であるに相違なく、また富者と貧者のうち、前者は重装の武具を持つのに、後者はそれを持たない。また我々は、民衆のある者は農民であり、また商人であり、また手工業者であることを知っている。そして、名望家達の間でも、富と財産の規模において相違がある。たとえば、馬の飼育の相違がそうである (実際、富んだ人でなければ、馬の飼育はできない。それゆえ、昔の時代、国家の力が馬に依存していたところ

では、寡頭制が行われていたのである。彼らは隣国に対する戦争に馬を使用した。たとえばエレクトリア人やカルキス人や、アイアンドロス河畔のマグネシア人やその他のアジア地方の多くの人々がそうである)。さらに富による相違の他に、生れによる相違もあるし、また人としての卓越的力量による相違もある。またもし、貴族制についての議論において国家の一部となっていると述べられた、何かそのようなものが別にあるならば、そのような相違もある。実際、我々はそこで、すべての国家は、どれ程の必要不可欠な部分から構成されているかを説明した。すなわち、ある時は、これらの構成部分のうち、すべての構成部分が国家体制に関与し、ある時は、その内のより少数の者が、またある時は多数の者が関与するのである。従って、相互にその性質を異にした国家体制が、多数存在するに違いないということも明らかである。事実、これらの部分それ自体が性質において異なっているからである。確かに、国家体制というものは、統治職を組織したものであり、すべての市民はそれらの統治職を、それに関与している者の力量に応じて、また、彼らに共通の平等性にもとづいて配分するのである。私が言おうとしているのは、たとえば貧者または富者の力量に応じて、ということか、あるいは両者に共通のある平等性にもとづいて、ということである。それゆえに国家体制は、その構成部分の卓越した力量や相違に応じて統治職の組織化が行われる仕方と同じ数だけ存在せざるを得ないのである。

それは大体、二種類であると考えられている。ちょうど風について⁹⁾、あるものは北風、あるものは南風で、その他のものはこれらから派生したものとされているように、国家体制も民主制（デーモス）と寡頭制の二つしかないと考えられている。というのは、風の中でも、一方で西風を北風の一種とし、他方で東風を南風の一種としているように、人々は、貴族制を、それはある種の寡頭制であるから、寡頭制の一種であるから見なし、いわゆる「国家体制」を民主制の一種であると考えているからである。又ある人々の言うところによれば、音階についても同様である¹⁰⁾。というのは、彼らは、音階はドリス音階とプリュギア音階との二種類を措定し、その他の音階のあるものをドリア調、他のものをプリュギア調と呼んでいるからである。従って、大体において人々は国家体制に関してもこのように理解するのを慣わしとしている。しかしながら、我々が説明したように解するのがより真実に近く、また

より優れているであろう。すなわち、良く組織された国家体制は二つまたは一つであり、その他は逸脱したものであるということ、すなわち、一方は良く混成された調和からの逸脱であり、他方は最良の国家体制からの逸脱である。そして、より張り詰めた、より奴隷主的支配に近いものは寡頭制的であり、弛緩した、柔弱なものは民主制的である、と解すべきである。

第四章

しかし、現にある人々がしばしば言っているように⁵⁾、民主制を、多数者が最高の権限を有する場合の国家体制であるというようには、簡単に見なすべきではない（というのは、寡頭制でも、またどこでも、より大きな部分が最高の権限を有しているから）。また寡頭制を、少数者が国家体制の最高権限を有する国家体制である、と解するべきではない。というのは、もし仮に全体が千三百人で、そのうちの千人が富者であるとして、その彼らが、貧困であっても自由人であって、その他の点では同等である三百人の人々に対して、統治への関与を排除するならば、誰もこのような人々が民主制的な統治を行っているとは言わないであろうから。また、同様に、少数の人々が、貧乏ではあるが、多数の富裕な人々よりも政治権力において強い力を持っている場合に、もし彼ら以外の富裕な人々が、名誉ある公職に関与するのを許されないならば、誰もこのような国家体制を寡頭制とは呼ばないであろう。従って、むしろ、民主制（デーモス）とは、自由人が最高の権限を有する場合の国家体制であり、寡頭制は、富者が最高の権限を有する場合の国家体制である、というべきであろう。ただ、たまたま、前者が多数であり、後者（富者）が少数者となっているのである。事実自由人は多数であるし、富者は少数の者である。また、ある人々がエチオピアについて述べているように⁶⁾、統治職を体の大きさや美しさにもとづいて配分するならば、それは寡頭制ということになる。実際、美しい人や体の大きな人の数は少数である。しかしながら、それでもこれらの国家体制を、このような事柄だけでは十分に規定できないのである。むしろ、民主制にも寡頭制にも、さらに多くの要素があるのだから、さらに詳しく区分しなければならない。すなわち、たとえば、イオニア湾のアポロニアやテラにおいて見られるように、自由人が少数派でありなが

ら、多数の非自由人を統治するならば、これは、民主制（デーモス）ではないし（これらの国家の各々においては、生れの点において際立っていて、しかも最初に植民を行った人々は、多数の人々の中の少数の者でありながら、榮譽の統治職を占めていた）、また、富者が、たとえば、昔のコロポンにおけるように、数の点で凌駕していることによって統治するならば、これは寡頭制ではない（実際、そこでは、リュディア人との戦いが行われる以前では、多数の者が莫大な財産を所有していた）。むしろ、自由人が、貧しくかつ多数である時に、統治の最高の権限を持っている場合の国家体制が民主制であり、富者が良い生れで、しかも少数である時に、最高の権限を有する国家体制が寡頭制である。

さて、国家体制が多数あること、しかもそれがどのような原因によって生じてきたのか、はすでに述べられた。しかしながら、国家体制は上述の国家体制より多くあること、それらがどのようなもので、どのような原因によって生じてくるか、ということ、先に述べられた原則を出発点として論じてみよう。すなわち、すべての国家は一つの部分でなく、多くの部分を有するものであることは、我々の一致するところである。実際、もし我々が動物の種類を分類しようと試みるならば、最初にすべての動物が必ず持っているものではないものを区別するであろう（たとえば、幾つかの感覚器官や、口や腸のような、食物を受け入れたり、消化するもの、またその他に動物の各々が運動するための部分）。しかし、そのような部分の数がそれだけだとしても、それらの器官にも差異のあるものがあるとすれば（私が言おうとするのは、たとえば、口にも幾つかの種類かの種類があり、腸や感覚器官にも幾つかの種類があり、さらに運動器官にも幾つかの種類がある、ということである）、これらの相違の組み合わせの数は、必然的に動物の種類を多くするであろう（なぜなら、同種類の動物は、口に多くの差異を持つことはできないからであり、また耳についても同様であるから）。従って、これらの相違の可能な組み合わせがすべて想定されるとすれば、それらが動物の種類を作り出すことになるだろう、すなわち、動物の種類は、必要不可欠な器官の組み合わせとまさに同じ数だけある、ということになる。先に言及された国家体制の種類もこれと同様である。

実際、すでにしばしば述べたように、国家は、一つの構成要素からではな

く多くの構成要素から構成されている。さて、この構成部分の一つは、食糧に関係する人々の一群、すなわち、いわゆる農民であり、第二のそれは、いわゆる手職人である（これは、国家を維持するためには欠かしえない技術に関するものである。これらの技術のうち、あるものは必要不可欠なものとしてなくてはならないものであり、あるものは、ぜいたくな生活、もしくは良く美しい生活の維持のためにはなくてはならないものである）。第三は町の広場（アゴラ）に関係する人々である（私が「広場に出入りする人」というのは、売りや買いや貿易や小売りに従事している人々のことである）。第四は雇用労務者であり、第五に国防に従事する人々である。彼らは、人々がもし侵入者に隷属することを望まないならば、前に述べた人々に劣らず存在しなければならない人々である。というのは、自然本性的に、奴隷的に隷従する国家を国家に値するものであるとすることは、ありえないことの一つであるから。なぜなら、国家は独立自存のものであって、奴隷的に従属しているものは独立自存のものではないからである。

まさにそれゆえに『国家』においては⁷⁾、この問題が巧みに語られながら、十分には言及されてはいないのである。事実、ソクラテスは、国家は、四つの必要不可欠な要素から構成されていると言って、織工、農民、靴工、大工を挙げている。しかし、さらに、これらの者だけでは、十分自足的でないとして、鍛冶工や生活に必要な家畜を世話している人々や、貿易商人や小売人を加えている。そして、すべての国家は生活に必要な事柄のために組織されたのであって、それ以上に優れた生活のために組織されたものではなく、また、靴工も農民も同程度に必要であると考えて、以上のすべての成員が最初の国家の総勢となる、としている。そして戦争を行う部分は、国土が拡大して、隣国に接触し、戦争に入ってから、はじめて国家の構成へ編入するのである。しかも、その数が四人であれ、またいく人であろうと、共同している者達の中には、正邪を示し、正義を判定する何者かが必ず存在しなければならない。従って、もし人が動物のうちで魂を肉体よりも重要な部分と見なすならば、国家のそのような部分も、日用必需に関与する部分よりも重要と見なすべきである。すなわちそれらのものとは、戦争に従事する者、裁判上の正義に関与するもの、それに加えて、政治的英知の仕事である国政評議をする者である。そしてこれらの役割が別々に違った人に属していようと、同じ

人に属していようと、議論には何の相違ももたらさない。というのは、重装歩兵の任務に就くことと農業を行うこととは、しばしば同一の人物によって担われるからである。従って、これらの部分とあの(日用必需的部分を担う)者達とがともに国家の部分であると見なすならば、重装歩兵となる部分も国家の部分であることは明らかなことである。

第七には、我々が富者と呼んでいる、財産によって国家に奉仕している者である。第八は、公職者であり、統治職に就いて公けに奉仕する部分である。というのは統治職がなければ国家は存在できないからである。従って、統治能力があり、継続的にか、あるいは順番にかであれ、このような公的奉仕を国家に対して行う人々が存在しなければならない。しかしなお、我々がたった今たまたま説明した人々、すなわち国政を評議する人々と、相い争う者達に対して正邪の判決を下す者が残っている。従って、もしこのような人々が国家に存在し、しかも立派に、かつ正しい仕方 で存在すべきであるならば、市民としての卓越的力量を持つ人々が誰か必ず存在しなければならない。ところで、他の能力ならば同一の人でもこれを兼備することができると多くの人は考えている。たとえば、同じ人が戦争を行う人ともなるし、農夫や技術者ともなるし、国政を評議する人ともなるし、裁判を行う人ともなりうる、と。そして、すべての人がこのような卓越的力量を持っていると主張し、たいていの統治職に就くことができると考えている。しかし、貧乏人であることと富者であることとを同一の人が兼ね備えることはできない。それゆえまさに、これらの人々、すなわち富者と貧者とはとりわけ国家の構成要素であると考えられているのである。さらに、大ていの場合、前者が少数で、後者が多数であることによって、これらの構成部分は、国家の構成部分のうちで対立的な要素であると考えられている。従って、人々は国家体制をこれらの構成要素の優劣にもとづいて設定し、そして民主制と寡頭制の二つの国家体制が存在していると考えるのである。

ところで、国家体制には多くの種類があり、それらがいかなる原因によって、そうなったのかは、すでに述べられた。しかし、今度は民主制にも寡頭制にも多くの種類があることを述べることにしよう。だが、このことはすでに述べた事からも明らかであろう。実際、民衆にも、いわゆる名望家にも色々の種類がある。たとえば、民衆の種類として、一つには、農民があり、また

他の一つには技術に関係する人々があり、また売買に従事する商人や海に関係する人々がいる。そしてこの海に関係する人々の中には、戦争に關与するもの、金儲けに關与するもの、渡し船に關与するもの、漁に關与するものがある（實際、これらのそれぞれは、多くの場所で多くの人々によって行われている。たとえば、タラスやビザンチオンにおける漁師、アテナイにおける三段橈船漕ぎ、アイギナやキオスの貿易商人、テネドスの渡し守）。この他にも日雇い労働者と余暇を持ちえない程わずかな財産しか持っていない者、さらに両親とも市民の身分でなかった自由人、またこのような種類のその他の民衆もいるであろう。他方、名望家についても、富、血統、卓越的力量、教育、およびこれらと同じような区別によって語られるものである。

さて、民主制の第一の種類は、まずなによりも平等という点に即してそのように呼ばれている型である。實際このような民主制の法は、平等ということ、富者も貧者もどちらかが優越するということがなく、双方のどちらも、最高の権限を持つということがなく、双方とも同等である、としている。というのは、自由は、また平等も、ある人々が考えているように⁸⁾、民主制の中に最も多く存在するとするならば、すべての人々が最も多く、かつ平等に国家体制に参加するならば、最もよくこのような状態が生じるであろうから。しかし、民衆は多数であり、また多数者による判断こそ最高の権限を持つものであるから、このような国家体制は民主制である他ないのである。従って、この国家体制は民主制の一種である。

しかし民主制の他の種類は、小額とはいえ財産評価にもとづいて統治職につく、という制度である。しかも、この財産を手に入れた者には官職に就くことができるが、それを失った者はこの職に關与することは許されない、というものである。民主制のもう一つ別の種類は、その出生に問題がないとされるかぎり、すべての市民が国政に参加するというものであるが、しかしなお法が統治するという制度である。さらにもう一つ別の種類は、市民であるかぎり、誰でもすべての者が統治職に關与できるが、その上でなお、法が統治するというものである。またもう一つ別種の民主制は、他の点では前のと同じであるが、法ではなく、大衆が最高の権限を持つという制度である。この制度は法でなく、民会の評決が最高の権限を有する場合に生じる。そしてそれは、民衆指導者（デマゴグ）によってもたらされるのである。實際、

法にもとづいて民主制が行われているところでは、民衆指導者は発生せず、そこでは市民の最良の人々が最高の地位に就いているが、法が最高の権限を持たない所では民衆指導者が登場するのである。というのは、そこでは、民衆は、多数の者が一人の人間のように組み合わせられて、一人の君主になるからである。事実、多数の人々は、個々人でなく全体として、最高の権限を有しているのである。しかし、ホメロスが多数者統治は良くないといっているが⁹⁾、それはどのようなものなのか。今述べたようなものか、それとも、統治者が個々人で統治して、それらが多数存在している場合のことか、明らかでない。しかし、ともかくもこのような民衆は、君主となるのであるから、法にもとづく統治をしないことによって君主制を求め、やがて奴隷主的統治になるのである。従って、追従者が尊敬される。このような民主制は君主制のなかでも、僭主制に比せられるのである。それゆえ、行動様式（エートス）も同じで、両者とも、自分達より優れた人々に対して奴隷主的統治を行うのであり、民会の評決は、僭主の命令のようなものであり、民衆指導者は追従者と同じかそれに似たものである。そしてその双方のいずれもが、そのいずれに対しても、すなわち、追従者達は僭主達に対して、民衆指導者はこのような民衆に対して最も強い影響を及ぼすのである。そして、民衆指導者は、すべての事を民衆に委ねることによって、法が最高の権限を有することなく、民会の評決がそのような最高の権限を有することになった責任者である。実際、彼らが有力な者となるという事態が生じるのは、一方で民衆が万事について最高の権限を有し、他方で、彼らが民衆の意見を左右するからである。なぜなら、大衆は彼らの言うことに聞き従うからである。さらに、統治職を非難する人々は、民衆が採決を下すべきだと主張する。そして民衆はその主張を喜んで受け入れる。従って、すべての統治職が解体されるのである。それゆえ、このような民主制は、国家体制ではないと主張する人は、正当な批判をしていると思われる。なぜなら、法が統治していないところには、国家体制は存在していないからである。事実、一方で法が万事を（一般的な事柄を¹⁰⁾）統治すべきであり、個別的な事柄は統治職が司るべきであって、こうした状態こそ国家体制であると判断すべきである。従って、民主制が国家体制の一つであるならば、民会の評決が万事を決定するような国家構造は、もはや正当な意味で民主制でないということは明らかなことである。民会の

評決は、一般的な事柄には関与しえないのであるから。

さて、民主制の種類については、以上で説明し終えたこととしよう。

(B 1) 国家の構成部分の第七についての箇所に、バーカーは次の注を加えている。

「第六の部分がアリストテレスによって挙げられていないことを注記しておこう。『国家』に対する批判のなかでアリストテレスが司法的部分に言及していることから、この司法的部分がこの第六の部分に相当するのではないか、という想定もありうる。しかしそうした想定は困難である。なぜならアリストテレスはその直後に、明示的に司法的部分に言及しているからである。おそらく欠文があると考えた方がいいだろう。

(B 2) 法 (nomos) と民会の評決 (psephismata) との相違について、バーカーは次の注を加えている。

「アリストテレスはここで、(アテナイの国制史にもとづいて) 政体を次のように区別している。(1)法が民会の評決と区別され、評決に優位し、評決によって無効とされることはありえない体制(2)この相違が実際には消え去って、評決が法と同等のものとなり、評決が法を無効にすることがありうる体制」

(B 3) 民衆指導者 (デマゴグ) について、バーカーは次の注を加えている。

「アテナイにおけるデマゴグの登場は、BC 429年のペリクレスの死から始まったといつてよいであろう。それは一つの社会的革命——工業と商業の発展、およびその結果生じた、農村の住民 (demes) の増加との比較における、アテナイ自体の都市住民の重要性の拡大——と結び付いている。最初の注目すべきデマゴグ、クレオンとクレオンの後継者達は、農村の良家に属していたそれ以前のアテナイの政治家達 (アリティデスとペリクレス) と違って、都会育ちであった。しかしデマゴグの登場は、社会革命と関連しているだけでなく、政治的、国制的変化にも関連している。以前の民衆の指導者は、一般的にいて、なんらかの公職の地位——たとえば將軍職——を、かれらの事実上の (de facto) 指導者としての地位とともに保持していた。固有のデマゴグは、いかな

る公職上の地位も持っていなかった。彼は、単に、特異な仕方、また持続的な影響を及ぼす仕方、で、発議し、政策を提案するために民会の個人的な成員権を行使したにすぎない。民会は、こうして公職に就かない指導者という役割を演ずる、影響力のある個人的な成員の天国となった。そしてそのような指導者は、—— いかなる公職上の執行的地位を持っていなかった —— 政治的責任を引き受けることなく発議し、政策を決定することができた。というのは、彼が民会を説いて受け入れるようにした政策を遂行することは、彼の義務ではなかったからである。彼の地位の致命的欠陥は、民衆への彼の甘言や、法を無視した評決の採択に民衆を扇動したことにあるというよりも、むしろこのような政治的無責任にあると付言してもよいであろう。」

第五章

寡頭制の種類としては、一つは、統治職が、多数である貧民が関与できない程の額の財産資格にもとづいて配分されるもので、それだけの額の財産を手に入れた者は、この国家体制に参加できるというものである。また別種の寡頭制は、統治職が高い財産評価にもとづいており、しかも、欠員が生じた時には、彼ら自身の中で選出するものというものである（彼らのうちのすべての者から、このような選出・充当がなされるのならば、この国家体制はむしろ貴族制的なものと考えられ、ある特定の集団の中から選ばれるのであれば、寡頭制であるように思われる）。またさらに寡頭制の別の種類は、息子が父に代って統治職に就く場合であり、第四の種類は、今述べた制度（世襲制）が存在した上で、法ではなく、統治職にある者が統治する場合である。この制度が寡頭制の中で占める位置は、君主制における僭主制や、最後の民主制として言及された型が民主制の中で占る位置に相当する。そして人々はこのような寡頭制を門閥体制（デュナスティア）と呼んでいる。

従って、寡頭制と民主制の種類は、これだけの数だけある。しかし、忘れてはならないのは、多くの場所で、法の観点からみて民主制の国家体制でないところでも、習慣と教育によって民主制的な統治が行われていることがあり、また同様に、逆に他の国々においては、法的には、むしろより民主制的

な国家体制でありながら、教育と習慣によって寡頭制的な統治が行われている場合がある、ということである。しかし、このことは、大抵、国家体制の変革の後に生じる。というのは、人々はただちに変わり得るものではなく、人々も、はじめは少しばかり相手側から有利なものを得れば、それで満足するのであって、従って、国家体制を変革しようとしている人々が権力を保持しつつも、それ以前にあった法が存続しているという事態が生じるからである。

第六章

民主制と寡頭制の種類がこの程度のものであることは、先に述べたことから明らかなことである。というのは、先に述べられた民衆のすべての部分が、国家体制に参加するか、それとも、ある部分に参加し、ある部分は参加しないか、のどちらかでなければならないから。従って、農民と適度な規模の財産を所有している人々が国家体制の最高の権限を有する場合は、法にもとづく統治が行われるのである（なぜなら、彼らは働くことによって生活を維持することができるのであって、余暇を持つことができず、従って、法を制定し、民会が必要な場合にだけ開くことにするから）。しかし、他の人々には、法律に規定された財産額を手に入れた場合に、国家体制への関与を許している。それゆえ、誰であろうとそれを獲得した人¹¹⁾はすべて、国家体制に参加することができる。事実、一般的に言って、すべての人に国政参加を認めないのは、寡頭制の特質である。しかし、他方で、（市民すべてに）関与を認めたとしても、収入がないならば、（政治に関与する）余暇を持つことができない¹²⁾。それゆえ、これは、以上の原因によるところの民主制の一種である。

また別種の民主制は、次のような区別に基づいている。すなわち、生れから見て非の打ちどころのない者はすべて参加を許されているのであるが、しかしながら、余暇を享受しうる者のみが参加しうるというものである。それゆえ、このような民主制においては、（すべての人が余暇を持つことができる）収入がないために、法が統治しているのである。第三の種類は、自由人である限り、だれでも国家体制に参加できるものであるが、しかし先に述べられた原因（収入がないこと）によって参加できないというものである。従って、このような国家体制においても法が統治せざるを得ない。民主制の第四の種

類は、国家において、時間的に最後に生じたものである。事実、国家が、当初の規模よりもはるかに大きなものとなり、国の収入も豊かになることによって、一方で民衆の優勢に基づいてすべての市民が国家体制に参加し、他方で、貧民も、手当の受給によって余暇を持つことができるようになって、すべての人が共同して国政を行うことになるのである。たしかに、このような大衆こそもっとも多く余暇を享受しているのである。というのは、彼らは私的な事柄への配慮に煩わされないからである。しかし、金持ちはこれに煩わされて、しばしば、民会や裁判にも参与しないのである。それゆえ、法ではなくて、貧しい大衆こそが、国家体制の最高の主権を有することになるのである。

さて、民主制の種類については、以上のような必然的な原因によって、これだけの数があり、またそれらはこのような性質を持っているのであるが、寡頭制の種類については次のようである。すなわち、多くの者が財産を持っているが、それもそれ程その額も高くなく、極端に大きな財産ではないという場合に生じるものが、寡頭制の第一の種類である。というのは、彼らはこのような財産を獲得した者に、国政への参加を許しているが、統治体に関与している者が多数であることによって、人間ではなく法が最高の権限を有することにならざるを得ないのである（というのは、彼らは君主制から、よりいっそう遠く離れているだけに、また、色々心配せずに余暇を享受する程の財産は持っていないが、国家によって扶養されねばならない程わずかな財産しか持っていないというものでもないので、必然的に、彼ら自身ではなく、法が統治する方がよいと考えるからである）。しかし、財産を持っている人が前に述べた人々よりも少数でありながら、より多くの財産を所有する場合には、寡頭制の第二の種類が生じる。すなわち、彼らはより強力になっているから、ますます多くの権利を持つことを要求するようになり、それゆえ、彼ら自身で、他の人々の中から、統治体に参加する者を選ぶようになる。しかし、まだ法なしに統治する程には強力ではないので、このような制度を保持しうるような法を制定するのである。しかし、さらに事態が進んでその数がいっそう少数となり、しかも財産はよりいっそう大きくなっていくと、寡頭制の第三の段階があらわれる。すなわち、彼らが統治職を独占し、しかも彼らが死んだ場合には、その息子がそれを継承することを命ずる法に

もとづく体制である。しかし財産と友人・仲間の多さにおいて、すでに彼らが極端な程度にまで達すると、このような門閥制は君主制に近くなり、法律ではなくて、人間達が最高の主権を有する者になる。これは寡頭制の第四の種類となって、民主制の最終段階に相応する。

第七章

しかし、さらに民主制と寡頭制とならんでなお二つの国家体制があり、そのうちの一つは、すべての人が言及しており、四つの国家体制の一つとしてすでに語られているものである（人々が四つの国家体制として挙げているのは、君主制、寡頭制、民主制、そして第四に、いわゆる貴族制である）。そして第五のものは、すべての国家体制に共通の名称で呼ばれているものである。（なぜなら、それを「国家体制」[ポリテイア]と呼んでいるから）。しかし、それがしばしば登場するものでないために、国家体制の種類を数え上げようと試みる人々はそれを忘れてしまうのであり、国家体制の中ではただ四つの種類だけを用いているのである（プラトンのように¹³⁹⁾）。

ところで、我々が最初の議論で扱った国家体制について、それを貴族制と呼ぶことは正当なことであろう（というのは、何らかの前提から見て良いとされる人々ではなくて、その卓越的力量という点において無条件に優れた人々からなる国家体制だけを貴族制と称するのが正しいからである。事実、この国家体制においてのみ、善き人間と善き市民とは無条件に同じである。しかし、他の国家体制においては、善き人間というのは、彼ら自身の国家体制との関係においてそうであるにすぎない）。しかしながら、それでもなお、寡頭制の統治が行われているものに対して、いわゆる「国家体制」(ポリテイア)に対しても相違がある、貴族制と呼ばれている若干の国家体制がある。というのは、富によってだけでなく、人の優秀さによっても統治職が選ばれているところでは、この国家体制は両者と異なっていて、貴族制と呼ばれるからである。人としての卓越的力量を公的な関心事にしていない国家においても、なお評判がよくて立派な人だと思われる人々がいるからである。それゆえ、カルタゴ人におけるように、国家体制が富と卓越的力量と一般民衆に着目しているところでは、この国家体制は貴族制となり、ラケダイモン人の国

家体制のように、ただ卓越的力量と民衆との二つだけを重視し、これら二つの、すなわち、民主制と人の卓越的力量（にもとづく制度）との混合があるところでも同様である。従って最初に述べた最良の国家体制に並んで、これら二つの種類が貴族制に属することとなる。そしてその第三のものは、いわゆる「国家体制」の中で寡頭制の方により傾いているものである。

第八章

さて、我々には、「国家体制」と呼ばれているもの、および僭主制について、述べるものが残されている。我々はこのように「国家体制」を配列したが、この「国家体制」も、今述べた貴族制も逸脱した国家体制ではない。しかしこのように配列した理由は、これらの国家体制はすべて本当のところは、最も正しい国家体制を実現しそこねたものだからであり、それゆえに、これらの逸脱した国家体制に並べて数えられるのであるが、しかしながら、はじめに述べたあの国家体制こそ、これらの逸脱形態なのである。しかし、僭主制について最後に言及することは、理にかなったことである。なぜなら、これはあらゆる国家体制の中で、国家体制として最も値しないものであり、（しかも）我々の研究は、国家体制についてであるから。

こうして、いかなる理由によって、このように配列されたかが述べられた。そこで、今度は、「国家体制」について述べなければならない。というのは、寡頭制と民主制についての事柄が説明されたので、この「国家体制」の意味がよりいっそう明らかになっているからである。実際、「国家体制」は、端的に言えば、寡頭制と民主制の混合である。しかし、この混合形態について、人々は一般に民主制の方に傾いているものを、「国家体制」と呼び慣わし、寡頭制の方により傾いているものを、教養と生れの良さが比較的富裕な人々に随伴していることに基づいて、貴族制と呼び慣わしている。さらに、富裕な人々は、不正を行う者が不正をする原因となるものをすでに持っていると思われる。そこから、人々はこれらの人々を紳士（カーロス・カガートス）あるいは名士と呼んでいる。従って、貴族制は、市民のうちで最も優れた人々に優越した地位を割り当てようとするのであるから、人々は、寡頭制もまた紳士（カーロス・カガートス）から構成されていると言うのである。しかし、

最良の人々による統治ではなく、卑賤な人々による統治の下にある国家が優れた法治のもとにあることは不可能な事柄であるように思われるし、また同様に、優れた法治のもとにはない国家を最良の人が統治することも不可能な事柄であるように思われる。しかし、立派に法を制定しても、それが遵守されないならば、優れた法治が存在しているわけではない。それゆえ、良き法治とは、一つには、制定された法を遵守するということであり、もう一つは、人々が遵守する法を立派に制定することである（悪く制定された法を遵守するということもありうるからである）と考えなければならない。そしてこのこと（優れた法治にあるということ）もまた二様に考えられうる。すなわち、彼らにとって可能な最良の法に服するか、あるいは、無条件に最良の法に服するか、のいずれかである。

ところで、貴族制は、なによりも、名誉ある統治職を人の卓越的力量にもとづいて配分しているという点にあるように思われる（確かに、貴族制の特徴は、人の卓越的力量であり、寡頭制のそれは、富であり、民主制のそれは自由である）。しかし、多数がよいと思うところに従って事が決せられるという原則は、すべての国家体制の中に存在している。実際、寡頭制においても、貴族制においても、民主制においても、国家体制に関与する者の多数がよいと判断したことが最高の決定なのである。従って、確かに、たいていの国家においては、「国家体制」に属する形態が間違った形で呼ばれている。実際、それらの国々では、富者と貧者との、富と自由との混合が、とりわけ目指されているからである。すなわち、ほとんど多くの国々においては、たいてい富者が紳士の地位を占めているように思われているからである。国家体制に対する平等の関与を要求する根拠は、自由、富、卓越的力量の三つであるから（というのは、良き生れと呼ばれる第四のものは、後者二つに伴うものであるから。実際、良き生れとは、先祖が富み、かつ卓越的力量の持ち主であったことを意味している）、富者と貧者の二者の混合は「国家体制」と呼ばれるべきであり、（卓越的力量を加えた）三つのものの混合は、真の第一の貴族制を除いて、他の何ものにもまして貴族制と呼ばねばならないことは明白である。

従って、君主制、民主制、寡頭制の他に、別の国家体制があり、またそれらがどのようなものであるか、また、諸々の貴族制がどの点で互いに異なっ

ているのか、また「国家体制」が貴族制とどの点で異なるのか、が語られた。そして、それらが互いにそんなに離れたものでないことも明らかである。

第九章

民主制と寡頭制の他に、いわゆる「国家体制」がどのような仕方で生じるのか、またこれをどのように確立すべきかを、以上論じられたことの次に論じることとしよう。そうすれば、同時に、民主制と寡頭制を分ける特徴も明らかとなろう。というのは、この両者が区別されるところを把握し、さらに、この両者のそれぞれから、いわば割符を受け取って、それを合成しなければならないからである。この合成、あるいは混合には、三つの方法がある。たとえば、裁判に関する規定のように、両方のそれぞれが制定している規定とともに（混合体に）採用しなければならないということである（すなわち、一方、寡頭制においては、富者が裁判の務めを果さないならば、罰金を科すが、貧者には手当は支給しない。他方、民主制においては、貧者には手当を支給するが、富者にはいかなる罰金をも科さない。これらに共通するもの、またその中間のものというのは、これらの併用であり、それゆえ、これは「国家体制」にふさわしいものである。なぜなら、これは双方から混ぜあわせたものだから）。従って、以上のことは二つのものを結合する一つの方法である。

もう一つの方法は、その双方の国家体制がそれぞれに規定しているものの中間を取ることである。たとえば、民会に出席する事は、一方においては、いかなる財産評価にも基づかず、あるいは、全くわずかな財産評価にしか基づかないのに対し、他方においては、大きな財産評価にもとづくのであるが、共通なものとは、両者のいずれでもなく、これらの各々が定めている財産評価の中間をとることである。

第三の方法は、あるものは寡頭制の法から、また他のものは民主制の法から、というように双方の法令から採用する仕方である。私が言うのは、たとえば、統治職がくじ引きで決められるのが民主制であり、それが選挙で決められるのが寡頭制であり、またいかなる財産評価にも基づかないのが民主制であり、財産評価にもとづくものが寡頭制ということであるように思われる。従って、その各々から各々のものを採用すること、たとえば、寡頭制からは、

統治職を選挙で選ぶこととすること、民主制からは、財産評価にもとづかないことを取り入れることは、貴族制にふさわしい仕方であり、また「国家体制」にふさわしいやり方である。

従って、これが混合の方法である。しかし民主制と寡頭制がうまく混合されていることを示す標識は、この国家体制を民主制とも寡頭制とも言うことができる場合である。なぜならば、人がこのように言うのは、明らかに、国家体制がうまく混合されていることによってこのような印象を抱くからである。また中間的なものもこのような印象を抱かれるものである。その両端のいずれもがその中に含まれているようにみえるからである。これこそラケダイモン人の国家体制に生じていることである。実際、多くの人々は、この国家組織が多くの民主制的なものを持っていることを理由に、この国家体制は民主制であると主張している。たとえば、第一に子供の養育に関して(実際、富者の子供も貧者の子供と同じように養育され、貧者の子供でも可能な仕方
で教育されている)。また、その後につづく年齢になっても、また大人になった時も同様であり(実際、富者と貧者との間には、際立った相違が全くない)、食事についても、共同食事において、すべての者に同一の食事が出され、衣服についても、富者は、貧者がいかなる者であっても手に入れることができるようなものを身につけている。さらに、二つの最も重要な統治職の一方のものは、民衆が選挙し、他の一つは彼ら自ら参与することも民主制と見なされる点である(すなわち、長老会の成員を選挙し、五長官職[エポロイ]に自ら参与するのである)。しかし、寡頭制的な多くのものをもっていることを理由に、この国家体制を寡頭制であると主張している人もいる。たとえば、すべての統治職が選挙で選ばれ、くじ引きでは選ばれないこと、そして少数の者が死刑や追放について最高の権限を有していること、その他このような多くのものがあることによってそう主張する。しかし、立派に混ぜ合わされた国家体制においては、その両者が存在するように見えるべきであり、しかもその何れもが存在しないように見えなければならないし、しかもそれは外からの力ではなく自分自身の力によって保持されるべきであり、すなわち、それを望む人が多数であるということによってではなく、(これは悪い国家体制にもありうることである)、その国家のいかなる構成部分も決して別の国家体制を望まないという点において、自らの力によって保持されるべきである。

こうして、どのような方法によって「国家体制」が設立されるべきか、また同様にいわゆる貴族制と称される国家体制がどのように設立されるべきか、が今、論ぜられたのである。

第十章

さて、我々に残されていたのは、僭主制について述べることである。それは、この国家体制について述べるべき事が多くあるというのではなく、僭主制もまた我々が諸々の国家体制の一部と見なしている以上、それが研究の一部として措定されるようにするためである。さて、我々は、王制について、一般的に王制と呼ばれるものについて考察を試みた最初の議論において、はたしてこれが諸々の国家にとって、不利益なことであるのか、あるいは有益なことであるのか、また誰をどのような人々の中から王に立てるべきか、またどのようにしてそれを行うのか、という問題を説明した。そして確かに、王制について考察したところで、我々は二種類の僭主制を区別した。それは、これらの統治が双方とも法にもとづいているために、それらの機能がある意味で王制と通じあうところがあるからである（というのは、野蛮人のある者達においては、独裁的な「アウトクラトル」君主達を選ばれており、また昔は古代のギリシャ人達においても、このような仕方では君主が現れており、それを人々はアイシュムネーテスと呼んでいるから）。これらは相互にいくらかの相違を持っているが、一方では法に基づいていることで、また、進んで服従する者達を君主として統治するという点において、王制的であり、他方、自分自身の判断に従って奴隷主的に統治するという点において僭主制的である。しかし、また第三の僭主制があって、それは、最も僭主制的であるように思われるもので、絶対的な王制に対応するものである。このような僭主制は、何ものにも責任を負わず、自分と同等のものか、あるいは自分より優れた者達すべてを、統治される者の利益のためでなく、自分自身の利益のために統治する君主制に他ならない。それゆえ、この国家体制は統治される者の意志に反する国家体制である。というのは、自由人なら誰も心からこのような統治に耐えようとしなからである。こうして、以上に述べた理由によって、僭主制の性質と種類はこのようなものである。

第十一章

最大多数の国家において、また最大多数の人間にとって、最良の国家体制は何であるのか、最良の生活とは何であるか。——といっても、普通の人の力を越えた卓越的力量を基準とするのではなく、また生れつきの素質と恵まれた外的条件を必要とする教育を基準とするのではなく、また理想どおりの国家体制を基準とするのではなく、大多数の人々が関与しう生活と大部分の国家が関与しう国家体制を基準として判断する場合のことであるが。このことを問題にするのは、今、我々が述べた貴族制と呼ばれる国家体制も、一方では、国家の大多数の国家体制から遠く隔たっており、他方ではいわゆる「国家体制」に接近しているからである（それゆえ、双方については一つのものとして論ずべきである。）。しかし実際、これらすべての事柄についての判断は、これと同じ基本原理からなされるのである。すなわち、『倫理学』の中で¹⁴⁾、幸福な生活とは、何ものにも煩わされることなく、卓越的力量に従って送る生活であり、また人の卓越的力量とは中庸のことであると言われているが、もしこれが正しいとするならば、中庸こそが最善の生活でなければならず、各々において中庸に達することが可能でなければならない。これらと同じ基準が、国家の、従ってまた国家体制の、良し悪しの基準でなければならない。なぜなら、国家体制というのは、いわば国家の生き方のようなものであるから。

ところで、すべての国家には、国家を成り立たせている三要素がある。すなわち、一方に非常に豊かな人々が、他方に非常に貧しい人々がいるが、第三に、それらの中間の人々がいる。従って、適度で中庸なものというのが最良であることは一般に一致した意見であるから、幸運をもたらす財の獲得でも、中程度の所有が、何にもまして、最良であることは明らかなことである。なぜならこの程度の所有の場合は、人は最も容易に理性に従うのに対し、美しすぎる人とか、強すぎる人とか生れが良すぎる人とか豊かすぎる人とか、またそれらとは逆に貧しすぎる人とか弱すぎる人とか、非常に身分の賤しい人は、理性に従うことがむずかしいからである。実際、前者は傲慢な人や大悪党となりやすく、後者は無頼と小悪党となるのであり、不正が生じるのも、

そのあるものは、傲慢からであり、また他のものは無頼からである。さらに中間の人々は、役職を忌避したり、獵官に走ったりすることが最も少ない¹⁵⁾。しかしこの二つは、国家にとって有害なことからである。

これらの他に、体力や富や友人やその他このような幸運をもたらすものについて、他人よりも並外れて恵まれた状態にある人々は、統治されようと思わないし、またその方法も知らない（こうした特徴は、まさに家庭において子供であった時からすでに存在している。というのは、彼らは勝手気ままであるために、学校においてさえ、統治されることに慣れてはいないからである）。しかし、これらの恵まれた状態が著しく欠如している人々は、あまりにも卑屈である。従って、後者の人々は、統治する方法を知らず、ただ奴隸的な支配によって統治される方法を知るのであるが、他方、前者の人々は、いかなる形態においても統治されることを知らず、ただ奴隸主的な支配によって統治することのみを知っている。これでは、奴隸と奴隸主だけからなる国家が生じるのであって、自由人よりなる国家は生じず、一方では嫉妬する人々と、他方では軽蔑する人々とからなる国家が生じることになるのである。これらは、友愛からも市民的政治的な共同結合からも最も遠く離れている。というのは、共同的結合は友愛にもとづくものであるから。実際、人は誰でも、敵に対しては、道すら共に歩もうとは思わないものである。ところが、国家はできるかぎり平等で同等な者達から構成されることを志向するのであって、この条件は中間的な人間において最もよく妥当する。従って、このような人々から組織された国家こそ最良の統治を行っているにちがいない。なぜなら我々は、このような人々こそ自然本性的な国家の構成分子と言っているからである。しかも諸々の国家において、これらの階層は市民の中で最も安泰に保たれる。というのは、彼らは貧民のように他人の所有物を渴望せず、また彼ら以外の他の人も、貧民が富者のものを渴望するように彼らの所有物を渴望することもないからである。また陰謀を企てられることもないし、企てることもないから、危険に会うこともなく日々を過ごす。従ってポクリデスは正当にも次のように祈ったのである。

「多くの事は中流の人において最良なり。願わくは、国の中で中流の人でありたし」¹⁶⁾。

それゆえ、政治的な共同的結合体も、中流階層に属する人々によって統治

されているものが最良であり、しかも、中流階層が多数であり、できれば両端の二つの部分より強力であるか、もしそうでなければ、そのいずれかの部分よりも強力であるような国々において、優れた統治が行われうことは明らかなことである。というのは（そのいずれかの部分に中流階層が付け加われば）、それはバランスを変え、相反する極端な国家体制が発生するのを防止するからである。従って、国政に関与する人々が、中程度の十分な財産を持っていることが、最大の幸運事なのである。というのは、ある人々が非常に多くのものを持ち、他の人々が何も持たない所では、極端な民主制か、純然たる寡頭制か、あるいはその双方が極端になった場合には僭主制が生じるからである。確かに僭主制は、最も未熟粗暴な民主制や寡頭制から生じるもので、中流階層の統治する国家体制やそれに近い国家体制から生じる可能性は極めて小さい。しかしその理由については、後で国家体制の変革について述べる所で言及しよう。

しかしながら、中間的な国家体制が最良のものであることは明らかなことである。というのは、ただこの国家体制にだけ党派闘争がないからである。実際、中流的な者が多数存在するところでは、市民間の内紛や党派闘争の生じることが最も少ないのである。また大きな国家は、この同じ理由によって、すなわち多数が中流的なものであることによって党派闘争が比較的起らないのである。しかし、小さな国家においては、中流を全く残さない程にすべての人を二つの階層に分けることが容易であり、事実そこではほとんどすべての人が貧民か富者かになっている。また、民主制も、中流階層が原因となって、寡頭制よりもより安定し、より持続的なものになるのである（実際、彼ら中流階層は、寡頭制におけるよりも民主制においての方が、数も多いし、また栄誉の統治職により多く参与している）。とはいっても、この中流階層がなく、貧民が数において優越している場合には、災厄が生じ、たちまちこの国家体制は滅び去るであろう。最も優秀な立法家達が中流市民層の出であることもこうした表徴と見なされるべきであろう。実際、ソロンも（このことは彼の詩から明らかである）、リュクルゴスも（彼は王ではなかった）、カロンダスも¹⁷⁾、またその他のほとんど大多数の立法家がこの階層から出ている。

また、以上のことから、何故に大多数の国家体制が民主制か、寡頭制かになっているか、が明らかとなる。すなわち、これらの国家においては、しば

しば中流階層が少数であるため、財産を持っている者であれ、民衆であれ、どちらかが優勢であるならば、彼らはこの中流的なものを踏み越えて、自分自身の利益の方向へ国家体制を導くからである。そしてその結果、民主制か寡頭制が生じることになる。これに加えて、民衆と富者において、相互に不和や闘争が生じることによって、どちらかが反対者に打ち勝つということになると、勝利した側は、双方に共通の国家体制も平等な国家体制も設立せず、政治的優越を勝利の褒賞とみなし、一方の者は民主制を、他方の者は寡頭制を創り出すのである。さらに、ギリシャの覇権を手に入れた二つの国家の市民達のいずれも¹⁸⁾、自分の国もとにある国家体制に着目して、諸々の国家のうちに、一方は民主制を、他方は寡頭制を樹ち立てたのであるが、それはその国々の利益に気を配ったのではなく、自分達の利益を考慮したからである。従って、このような原因によって、中間的な国家体制は決して生じないか、あるいは生じたとしても極めてまれで、わずかな国々においてしか生じないことになるのである。実際、かつて指導者の地位に就いていた人々の中でただ一人の人だけがこのような国家組織を導入しようとする気持ちになったにすぎず、今やすでに諸々の国家の市民の間では、平等を欲することすらせず、統治することを追求するか、あるいは征服されれば、それに耐えることしかないとする習慣ができあがっているのである。

こうして、最良の国家体制は何であり、またそれはいかなる理由にもとづくのか、については以上のことから明らかである。また我々は多くの民主主義や多くの寡頭制が存在していると主張しているのであるから、他の国家体制のうちで、あるものはより優れており、また他のものはより劣っているという点からみて、どのような性質のものが第一と見なされるべきか、またどのようなものが第二で、さらにこのようにして何がこれに次ぐべきものと見なされるべきかは、最良の国家体制が規定された後では、それ程理解するに困難なことではないであろう。なぜなら人が「ある与えられた前提」から判断しないかぎり、つねに、この最良の国家体制に近いものがより良いものであり、中流的なものからより遠く離れているものがより悪いものとならざるを得ないからである。私が「ある与えられた前提」というのは、より望ましい別の国家体制があるにもかかわらず、しばしばある人々においては、これとはちがう国家体制が存在する方が有利であるという場合があり、これもま

た不可能ではないからである。

(B) 「かつて指導者の地位に就いていた人々の中でただ一人の人だけがこのような国家組織を導入しようとする気持ちになったにすぎず」に、パーカーは次の注を加えている。

「ニューマンの見解は次のようである。すなわち、そのひとりの人とは、B.C. 411年にアテナイの穏健な指導者であったテラメネスであり、彼は、武装を自弁しうる五千人の市民に政治権力を与える穏健な国家体制を導入しようとした指導者であった、と。たしかにツキディデスは、この国家体制に言及して、それを寡頭制と民主制の混合形態としている。しかし、テラメネスはギリシャの政治において指導的地位に就いていたのでもなく、また彼が『このような国家体制を樹立することに同意する気持ちを抱いた』ことはほとんどありえないことである、という点も確かなことであろう。この『 』の部分、一般にギリシャの諸国家にポリティの制度を樹立する点において他の人々との協力があつたことを示唆している。

アリストテレスの念頭にあつたのはアンティパトロスであつたのか——この人物はアレクサンダーの摂政で、アレクサンダーの東方出征中、彼に代わって、ギリシャの政治の指導権を行使した——。この想定は年代的な困難をもたらす。というのは、アンティパトロスがアテナイにおいて穏健な国家体制（9000人の市民体に権力が付与された）を樹立したのは、アリストテレスの没年、321年以降のことであつたから。アリストテレスは、初期の段階で、アンティパトロスとギリシャの政治について議論し、ギリシャにポリティを導入するように彼を説得しようとしたのであろうか。この想定は『 』の部分の説明することになるかもしれない。あるいはこの文章は後代の挿入であらうか。」

第十二章

以上に論ぜられたことの次に、いかなる国家体制がいかなる人々にとって有益であるか、また、いかなる性質の国家体制が、いかなる性質の人々に有

益であるか、を論じなければならない。しかし、まず最初に、あらゆる国家体制について一般的にあてはまる同一の原則を立てておかねばならない。すなわち、国家体制を維持したいと思う国家の部分が、それを維持したくないと思う部分よりも強力でなければならないということである。ところで、あらゆる国家は質的なものと量的なものから成り立っている。ここで質的なものと言うのは、自由、富、教育、良き生れであり、量的なものというのは、数の優越である。しかし、質的なものと量的なものが、国家の構成部分となっていてところに別々に帰属するということは、ありうることからである。例えば、生れの卑しい者が高貴な生れの者よりも数において勝り、貧者が富者よりも数が多いというように。しかし質において劣る程度に量においてまさるとは限らないのである。それゆえに、これらのことを相互に比較しなければならない。

こうして、貧者の数が、今述べた均衡関係を凌駕する場合、そこからは自然に民主制が存在するようになり、民主制のそれぞれの種類は、優越する民衆のそれぞれの種類に対応するのである。たとえば、農民層の数が優越すれば、民主制の第一の型が生じ、職人や雇用労務者の数が優越する場合は最後の民主制が、またこれらの中に位置する別の民主制も生じる。また、富者と名望家達が、その量において劣っている以上にその質において優越している場合、そこからは寡頭制が生じ、しかも寡頭制の各々の種類も同様の方法で寡頭制的集団の優越に対応している。

しかしながら、立法家はつねに、中流に属すべき人々を国家体制に関与する成員のうちに加えなければならない。すなわち、もし彼が法を寡頭制的なものとして制定しようとするならば、中流階層の人々の獲得を目指さねばならず、民主制的なものを制定しようとするならば、法によって中流階層を自分の味方として引きつけねばならない。そして中流階層の数がその両端の層を合わせた数、もしくはその一方だけのものよりも多い場合、その時はじめて国家体制が安定的になりうるのである。というのは、富者がいつかこの中流階層に対抗して貧者と歩調を合せるというような恐れは全くないからである。すなわち、そのどちらも他方の者に隷従しようと思うことは全くないし、また彼らがより共通の国家体制を追求しようとしても、これとは別のものを発見することはないであろう。というのは相互への不信の故に、交替で統治

することには耐えられないであろうから。どこにおいても、最も信頼されるのは仲裁者であるが、中流階層こそこの仲裁者なのである。

しかしながら、国家体制はよりよく混ぜ合わされれば、それだけますます永続的なものになる。そして、国家体制を貴族制的なものにしようと欲する人々においても、多くの人々は、富者に多くのものを配分するという点で誤っているだけでなく、民衆を欺くという点においても誤っているのである。事実、虚偽の善からは、いつの日か遂には、真の厄災が生ずる他ないからである。というのは、富者が不当に多く取ることは、民衆がそうする以上に国家体制を破滅させるからである。

第十三章

これらの国家体制において、民衆に対して建て前として工夫されているものは、数の上で五つあり、それは、民会、統治職、法廷、重装武具、体育訓練に関することがらである。民会に関しては、確かにすべての人に民会出席が認められているが、富者に対しては、もし民会に出席しないならば、彼らに対してだけ罰金が課せられるか、あるいは彼らに対しては他よりはるかに大きな罰金が課せられるという仕組がある。統治職に関しては、一定の評価財産額を持っている人々に対しては、宣誓の上でその職を拒否することが許されてはいないが、貧者にはそれが許されているという仕組があり、法廷に関しては、富者に対して、裁判の職を果さなければ、罰金を課すが、貧者には、その心配はないという仕組がある。あるいは、カロンダスの法のように前者にはより多くの罰金を課し、後者にはより少ない罰金を課すこととするのである。またある国では、登録した人はだれでも民会に出席し裁判に関与することが許されているが、しかしこの登録した者がもし民会に出席せず、裁判にも関与しないならば、これらの者に重い罰金が課せられる。それは、彼らがこの罰金の故に登録することを躊躇するように、また、さらに登録しないことによって裁判にも関与せず、民会にも出席しないようにするためである。彼らは重装武具の所有についても、体育訓練についても同様の立法を行っている。実際、貧者には重装武具を所有しないことも許されているが、富者に対しては、それを所有していなければ、罰金が課せられるのである。

また体育訓練を行わない場合、前者には全く罰金は課せられていないが、富者には罰金が課せられるが、それは一方で金持が罰金の故にそれに参加するように、他方で貧しい人々が罰金の恐れのないことによって体育訓練に参加しないという結果になるように、という仕組みである。

さて、これらが寡頭制的な立法化の工夫であるが、民主制においても、これに対して逆に対応する工夫が行われている。すなわち、貧者に対しては、民会に出席したり、裁判の役を果したりする場合には手当てを支給し、富者には（これらのことを為さない場合にも）罰を課さない。従って、人が正しく国家体制を混ぜ合わせようとするならば、各々の国家体制のもとにあるものを結び付け、一方の側には手当てを支給し、他方の側には罰を課すべきであることは明らかなことである。事実、このようにすれば、すべての人が国政に参加するであろう。しかし、先に述べた様な仕方では、国家体制はどちらか一方だけのものになるであろう。

しかし国家体制は、重装武具を所有している者だけから構成されるべきである。しかしその財産の額を絶対的に規定して、これだけの額が存在しなければならぬと言うことはできない。そうではなくて、最高額としてどれ程の額を課せば、国家体制に参加する者の数が参加しない者の数より多くなるかを考察して、その額を基準額として定めるべきである。というのは、貧民は名誉な公職に与らなくとも、人がもし彼らを軽蔑せず、またその財産を一つも奪い取られることがなければ、むしろ平穏でいることを望むものであるから。しかし、こうした対応は容易なことではない。なぜなら、統治体に属している人が常に上品かつ賢明であるというわけではないからである。また戦争が生じた場合、彼らは、食糧を受けとらず、貧しいままであるならば、通常は戦いから後込みするのが常であるが、食糧が支給されれば、進んで戦おうとするものである。

しかし、若干の国々においては、国家体制は、現に重装歩兵の役についている者からだけでなく、かつて重装歩兵であった者達からも構成されている。確かにマリス人においては、国家体制は、これら双方の者達から構成されているが、統治職は、現に兵役に就いている者の中から選ばれた。またギリシャ人における最初の国家体制は、王制以後は、戦争に従事する者から構成されていたが、とりわけその初期においては騎兵から成り立っていた（という

のは、戦争は、騎兵における力と優越に拠っていたから。事実、重装歩兵は、戦闘隊列なしには、用をなさないものであり、昔の人々の間には、このような事柄についての経験も配置方法もなかったのである。従って、戦力は騎兵にもとづいていたのである)。しかし、国家が大きくなり、重装歩兵に属する人々が強力になってくると、いっそう多くの人々が国家体制に関与するに至った。まさにそれゆえ、現在我々が「国家体制」(ポリテイア)と呼んでいるものを昔の人々は民主制と呼んでいたのである。しかし昔の国家体制が寡頭制的であり、王制的であったのは当然のことである。なぜなら、人口が少なかったので、中流階層は多くなく、従って数においても少数であり、組織においても弱小であったので、彼らは、あえて統治されることに甘んじていたのである。

こうして、いかなる理由によって国家体制が多くの種類を持つのか、また何故に普通に名前の挙げられるもの以外の国家体制が存在するのか(実際、民主制もその数において一つではなく、他の国家体制についても同様である)、さらに、それらは相互にどのように違うのか、またそれは、いかなる原因によって生じるのか、さらにこれらに加えて、一般的に言って、国家体制の中で何が最良のものであるのか、また他の国家体制のうち、どのようなものが、どのような市民に適合するのか、が語られた。

(B1) 第一三章冒頭の「これらの国家体制」について、バーカーは次の注を加えている。

「この部分の国家体制は、ニューマンの示唆によれば、ただポリティ、すなわち混合された国家体制だけを指していると考えられる。しかしそれはまた第七章で描かれた、混合された貴族制をも含むものであるだろう。」

(B2) 政治形態と軍事組織との関連についての箇所に、バーカーは次の注を加えている。

「アリストテレスはここで政治形態と軍事組織との関連についての余談を展開している。この余談は歴史的な研究となっており、その中で、かれは、政治形態の展開は戦争技術の発達と結び付いていることを示している。とりわけ我々が近代ヨーロッパの最近の展開を考察すると、ア

リストテレスがここで最重要なテーマに触れていることは、明らかなことである。」

第十四章

さて、今度は、上述した事柄に続く問題について、これらの固有の出発点を捉えて、一般的かつ個々別々に論じてみることにしよう。さて、すべての国家体制には、三つの部分があり、優れた立法家は、これらに関して、それぞれの国家体制に有益なものを考察しなければならない。これらのそれぞれの部分が優れていれば、国家体制も必ず優れたものになるし、国家体制が相互に異なっていることも、必ずこれらのそれぞれの部分が異なっていることにもとづいている。これら三つのうちの一つは、公共の事柄について評議するものとは何かであり、第二は統治職に関するものであり（すなわち、誰がこの職に就き、何について最高の権限を有するべきか、また彼らの選出はどのようにして行われるべきか、という問題である）、第三に、裁判をするものとは何であるか、ということである。

さて、国家体制の中で評議する部分は、戦争と平和、攻守同盟とその破棄について、法律について、死刑、追放、財産没収について、統治職の選出と執務報告審査に関して、最高の権限を持っている。そして、これらのすべての裁決権は、確かにすべての市民に委ねられるか、あるいは、すべての裁決権を若干の市民に委ねるか（たとえば、ある一つの統治職に、あるいはそれ以上の統治職に、あるいは異なった裁決権は、それぞれ異なった統治職に委ねられる）、あるいはそれらの裁決権のあるものは全ての市民に委ね、しかし、他のあるものは、幾人かの市民に委ねるか、でなければならない。

さて、すべての市民があらゆる事柄について評議決定するというのは民主制的なあり方である。実際、民衆はこのような平等を追求するものである。しかし、すべての市民が評議する方法は多様にあり、その一つは、すべての市民がいっしょに、というのではなく、順番に評議に関与する仕方であり（たとえば、ミレトス人テレクレスの国家体制はそのようなものである。またその他の国家体制においても統治職の合同会議が招集されて、評議し、この統治職には、その職がすべての者にいきわたるまで、すべての者が氏族ならび

に最少の構成部分から選ばれて順番に就任する)、しかし、市民が一堂に集まるのは、ただ法の制定や国家体制に関する事柄を評議したり、統治職によって報告されることを聞く場合だけである。それとは別の様式は、すべての市民が一堂に会して評議するものであるが、しかしそれは、統治職の選挙か立法に関わる事柄か、戦争と平和に関することか、執務報告審査に関することだけについてなされるのであって、その他のことは、各々の任務に任じられた統治職が評議するのであり、彼らはすべての市民から選挙されるか、くじで選ばれるか、どちらかである。また別の様式では、市民のすべてが、統治職と執務報告審査に関して、また戦争と攻守同盟について、評議しようとして一堂に会するのであるが、その他のことは、選ばれた統治職が処理する方式であるが、そのような統治職は、できる限り選挙によるものであって、それは、当の問題に精通した者が統治する他ないような統治職である。第四の様式は、市民のすべてがすべての事柄について一堂に会して評議するものであり、統治職は何ものについても決定を下さず、ただ予備審議だけを行う様式であり、現にまさしくこのような様式に従って統治しているのが、最後の種類の民主制であり、我々が閥族的な寡頭制や僭主的な君主制に対応しているといっているものである。これらの方式はすべて民主制的なものである。

これに対して、特定の者達があらゆる事柄を評議する国家体制は寡頭制的なものである。しかし、これにも多くの異なった方式がある。実際、その特定の者達が比較的穏当な財産資格にもとづいて選ばれた者であり、しかもその財産資格が非常に穏当なためにその数が多く、また法が変更することを禁止していることについては、法に従い、誰でもその財産資格を獲得したものには、国家体制に参加することを許している場合には、この国家体制は寡頭制ではあるが、穏当な方策を取っていることによって、「国家体制」に近いものである。しかし、こうした資格を持つ市民のすべてではなく、選ばれた者だけが評議することに関与し、しかも先に述べた場合のように法にもとづいて統治している場合には、その国家体制は寡頭制的なものである。しかし評議する権限を有する者達が、彼ら自身で自らを選出する場合、しかも子が父の後にこの役に就き、法に対する最高の権限を有する場合には、この組織は最も寡頭制的なものである他ないであろう。しかし、ある問題については、ある特定の人々がその権限を有するという場合、たとえば、戦争や平和や執

務報告審査については市民のすべてが権限を持つが、他の問題については、統治職にある者が決定し、しかもこれらの者がくじで選ばれた者でなく選挙で選ばれた者である場合、その国家体制は貴族制である。しかし、若干の事柄を選挙された者達が評議し、また他の若干の事柄をくじで選ばれた者達が評議する場合、—— しかもそのくじで選ばれた人が、全くくじだけで選ばれる場合と、あらかじめ選ばれた者の中からくじで決められる場合がある ——、また選挙で選ばれた者とくじで選ばれた者とが共同で評議する場合があるが、これらの方式の中で、あるものは貴族制的な「国家体制」に属し、あるものは純粹の「国家体制」に属することとなる。

こうして、評議する部分は、このように国家体制に応じて区別されるが、各々の国家体制は、上述の区別に従って統治を行っている。しかし、現在、最も民主制であると思われる民主制にとっては（私は、民衆が法に対しても最高の権限を有しているような民主制のことを言っている）、よりよい評議をするためには寡頭制の下で裁判に関してなされているのと同じことをすることが有益であろう（というのは、寡頭制においては、裁判の任に当たってもらいたいと思う人に対して、彼が裁判を引きうけるように〔務めを果さない場合には〕罰金を科しているのであるが、民主制を行っている人々は貧民に手当てを支給している）。民会に対してもこうしたことを為すのが有益である（すなわち、すべての市民が共同で評議をする場合、民衆が名望家とともに、また名望家も大衆とともに評議すれば、さらにより良く評議することになるであろう）。しかしまた、国の各々の層から同数の者が、選挙されたり、くじで選ばれたりして評議する者となることも有益である。しかし、市民の中で大衆に属する者が数の上で非常に凌駕する場合には、すべての人に手当てを支給するのではなく、名望家の数につり合う数だけに支給するか、その数を越える者をくじで除き去るかするのが有益である。

しかし寡頭制においては、何人かを大衆のうちより選び出して、評議する部分に加えるか、あるいは若干の国家体制において行われているように、予備評議員とか法の守護者とか呼ばれている統治職を設けて、これらの者が予備的に評議したことのみに（民会）が取り扱うようにすること、が有益である（事実こうすれば民衆は評議に参加することになるであろうし、しかも国家体制の基本に係わることを何一つ破壊することができないであろう）。

さらに民衆がこれらのことに賛成投票するか、あるいはそれらの提案事項に反対の投票を決してしない、ということにするか、あるいは市民すべてに審議には関与させるが、評議し決定するのは統治職にある者とするのが有益である。そして「国家体制」においてなされていることと反対のことが為されるべきである。すなわち、民衆が否決投票する場合には、彼らを最高の権限ある者にすべきであるが、賛成投票する場合には、最高の権限ある者とはせず、再び統治職にある者の下に（議案が）さし戻されるものとしなければならない。実際、「国家体制」においては反対のことが行われている。すなわち、少数者（統治職にある者）は、否決する場合には、最高の権限を有し、賛成する場合には、最高の権限を有せず、つねに多数者にさし戻している。

これで評議する部分、すなわち国家体制の最高権限を有する部分についてはこのように規定されたものとしよう。

(B 1) 「国の各々の層から同数の者が、選挙されたり、くじで選ばれたりして、評議する者となること」にパーカーは次の注を加えている。

「アリストテレスがここで『代表的な (representative)』評議機関を示唆していること、を指摘しておくことは重要なことである。これは、『代表的』機関という観念がギリシャ人にまったく知られていなかったわけではない、ということを示している。B. C. 377年に設けられた新たなアテナイ同盟は、二つの議会のための規定を持っていた。すなわちアテナイの評議会と民会から構成される部分と、同盟諸国から選ばれた代表者から構成される会議という、もう一つの部分があった。」

(B 2) 統治の三つの部分について、パーカーは、次の注を加えている。

「一見すると、これら三つの部分は、近代的理論における立法、行政、司法の権力と同一であるようにみえる。実際にはアリストテレスの評議的部分はほとんど立法的部分ではなかった（立法的功能を持っていたが）：それはむしろ行政的功能に関与していたし、若干の高度な司法的功能にも関与していた。同様にアリストテレスの統治職は、(様々な専門分野の) 行政的功能を持っていたが、近代的な意味での行政府を構成しているわけではなかった。評議的部分は、この点において圧倒的な力を持っていた。最後に、司法的部分は、すでに述べたように、裁判官の団

体ではなかった。それは素人の民衆法廷であった。読者は近代とは本質的に異なるギリシャ的構造を想起しなければならない。そしてモンテスキュウの理論モデル、あるいはイギリス（あるいはアメリカの）慣行に基づく権力の分立という観念を放棄しなければならない。」

(B 3) アテナイのくじ引きの慣行について、パーカーは次の注を加えている。

「民主制においては、民衆の感情は、くじ引きを好む傾向にあった。というのはそれは普通の人により大きなチャンスを与えるものと思われていたからである。選挙は、優れた能力を申し立てることができた人、あるいは影響力を行使できた人に大きなチャンスを与えた。くじ引きによる公職の任命——それは、將軍職やその他の軍事的な職を除けば、アテナイにおける通常の手続きであった——今日からみれば奇妙に見えるかもしれない。しかしそれはアテナイでは三つの方法で安全装置を施されていた。第一に、公職への登録の前の正式の適格審査(dokimasia)によって。第二に在任期間中においては、公職者の行為に対する民会の投票によって(epicheirotomia)。その場合、公職者は、民会が審査する理由がある、と判定すれば、それに直ちに服さねばならない。そして最後に、在任期間の最後における審査(euthunai)。それは会計検査を含むだけでなく、調査団の面前での審査、あるいは高位公職者の場合は、評議会と民衆法廷の前での審査を含むものである。」

第十五章

これらの問題に続くのは、統治職に関する区別である。というのは、国家体制のこの部分にも多くの差異があるからである。すなわち統治職の数はどれ程のものか、またどのような事柄について最高の権限を有するのか、期間については、各々の統治職の期間はどのようなものか（事実、統治職のあるものは六ヵ月間であり、あるものはそれよりも少なく、またあるものは一年間であり、さらに他のものはそれ以上の期間としている）。さらに、統治職は終身のものであるべきか、それとも長期間であるべきか、それともそのどちらでもなく、同一の人が何度も再任するようにすべきか、それとも同一の人

が再任するというのではなく、ただ一度だけにすべきか。さらにこの統治職の任命に関して、どのような人々の間から、誰によって、どんな方法で行わねばならないのか、を検討しなければならない。実際、これらすべてについて、それらがどのような様式において生じうるのか、を識別すべきであり、さらにいかなる国家体制にいかなる統治職が有益であるのか、を定めることができないしなければならない。

しかしながら、いかなるものを統治職と呼ぶべきか、という問題もそれほど容易に説明できることではない。実際、市民的政治的な共同結合体は、多くの監督職を必要としており、彼らが選挙で選ばれた者であろうと、くじで選ばれた者であろうと、彼らをすべて統治職にある者と見なすことはできない。第一に、神官は統治職と見なすべきではない（というのは、これは政治的統治職とは別のものと見なすべきであるから）。さらに合唱隊後援者や伝令使や海外使節も選挙で選ばれているが、統治職ではない。監督という職務のあるものは、政治的市民的なものである。それは、たとえば将軍が兵役に服している者を監督しているように、一定の行為に向けて全市民を監督するものもあり、あるいは、たとえば婦人監督官や児童監督官のように、市民の一部を監督するものもある。また家政的な職もある（実際、人々はしばしば穀物測量官を選ぶ）。またしかし、奉仕的な職もあり、人々が富裕な場合は、この職に奴隷をあてる。しかし、端的に言って、とりわけ統治職と呼ぶべきものは、ある事に関して、評議し、決定し、命令を下すことを委ねられているものであり、とりわけ命令することが委ねられている職である。なぜなら、命令することは、よりいっそう統治にふさわしいことであるから。しかしながら、このことはいわば実際の使用に関しては何の相違ももたらさない（実際、名前についての論争は、いまだ決着がつけられたことはないから）。もっとも別の思考上の訓練にはなるであろうが。

しかし、国家が存在しようとするならば、どのような統治職が、またどれ程の数の統治職が必要であるのか、またいかなる統治職が、優れた国家体制にとって、必要不可欠でないとしても有益なのか、を人はすべての国家体制について、またとりわけ小さな国家について問題とするであろう。事実、大きな国家においては、一つの仕事に対して一つの職を設けることができるし、またそうでなければならない（というのは、市民の数が多いので、多くの人

が統治職に就くことができ、その結果、ある職は長期にわたってその職に就かなくともよく、ある職はただ一度だけ就けばよいということになる。またどの仕事も、多くのことに係わるよりも一つのことに係わる方が、いっそうよく遂行されるであろうから)。それに対して小さな国家においては、少数の者に多くの統治職が集中せざるを得ない(なぜなら、人口が少ないことによって多くの人を統治職につけておくことは容易ではないからである。なぜなら、いったい誰が、新しくその職の後任者となるのだろうか)。しかし、時には、小さな国家も大きな国家と同じ統治職と法を必要とする場合がある。ただし、大きな国家がしばしばこれらを必要としているのに対し、小さな国家においては、長期間を通じてこうした必要が生じるという点に相違があるが。それゆえ一度にたくさんの保護・監督の仕事を(一人の人)に課してもさしつかえないのである(実際、それはお互いにじゃまにはならないから)。また人口が少ないために、統治職を蠟燭立てにも焼き串にも使える器具のようなものにしなければならない。こうして、我々が、すべての国家にどれ程の数の統治職が存在しなければならないのか、またどれ程の数の統治職が必要不可欠でないとしても、存在すべきであるのか、を言うことができるならば、これらのことを知った人は、どれ程の数の統治職を一つのものに統合することが適切であるかをいっそう容易に推し量ることができるであろう。また次のことも忘れない方がよいであろう。すなわち、場所ごとに異なる多くの統治職はどのような事柄の管理を受けもつのか、またどこにおいても同一の統治職が最高の権限をもっている事柄は、どのようなものか。たとえば、町の市場(アゴラ)では市場監督官が、秩序を配慮し、他の場所では別の監督官がそれを行うのか。あるいはどこにおいても同一の人物が監督官であるのか。また、事柄に即して職を区別すべきであるのか、それとも、(監督の対象とする)人間に応じて区別すべきであろうか。私が言おうとしているのは、たとえば一人の統治職が秩序を監督するのか、それとも子供と女は別々の統治職が監督するのか、ということである。また国家体制にもとづいて考察してみても、それぞれの国家体制ごとにその統治職の性質も相違するのか、それとも全く相違しないのか。例えば民主制や寡頭制や貴族制や君主制において、同一の統治職が最高の権限を持っているのか。たとえその統治職が、等しい人々や同じ人々から選ばれるのでなく、たとえば、貴族制においては教育を

受けた人々の間から、寡頭制においては、富者達の間から、民主制においては自由人の中から選ばれるように、それぞれ相違した国家体制に応じてそれぞれ相違した人々の中から選ばれるとしても。あるいはまた統治職のあるものは、国家体制の相違にもとづいているが、しかし同じ統治職の方が有利な場合もあるし、相違している方が有利な場合もあるということなのか（というのは、同じ統治職でも、あるところではその力が大きい方がより適しており、他の所ではその力が小さい方がより適しているということがあるから）。

とはいえ、たとえば、予備評議員のように、ある国家体制に固有の統治職も存在する。というのは、これは民主制的なものではないから。しかし評議會は民主制的なものである。というのは、民衆が仕事に従事してられるように、民会を開く前に評議することを任務とするこのような組織が何か存在しなければならないから。しかしこの組織の人々が数において少数であるならば、寡頭制的なものとなる。しかし予備評議員は数の上で必然的に少数であらざるを得ない。従ってこれは寡頭制的なものである。しかしこれらの二つの統治職がともに存在するところでは、予備評議員は、評議会員よりも優越した地位に置かれている。なぜなら評議会員は民主制的なものであるのに対し、予備評議員は寡頭制的なものであるから。しかし評議會の力ですら民衆が自ら参集して万事について審議するような民主制においては、破壊されるのである。これは、民会に出席する者に十分な手当が支給される場合に生じるのを常としている。というのは、彼らは余暇を有することで、しばしば参集し、自らすべてのことを決定するからである。また児童監督官も婦人監督官も、またその他このような監督に権限を有する統治職もいずれも貴族制的であって民主制的でない（どのようにして、貧民の妻達が外出するのを阻止し得ようか）。また寡頭制的なものでもない（寡頭制的支配層に属する婦人達はぜいたくな生活をしているから）。

しかし、これらの点については、今はこの程度まで述べることに止めて、統治職の任命について、はじめから詳しく論じてみるべきであろう。さて、そのさまざな相違は、三つの基準にもとづいている。そしてそれを組み合わせれば、そのすべての様式が得られるにちがいない。その三つの基準の一つは、統治職を任命する者は誰であるか(A)。第二は、その統治職は誰から（選ばれるか）であり(B)、残りの基準は、どのような方法で任命するか(C)、

である。しかしまた、これらの三つの基準にそれぞれ三つの相違がある。すなわち、すべての市民が任命するのか(A 1)、それとも特定の市民だけが任命するのか(A 2)、またすべての市民のうちから任命するのか(B 1)、それとも特定の人々のなかから任命するのか(B 2) (たとえば、財産資格とか、門地とか、卓越的力量とか、その他何かそのようなものに拠って区別される人々の中から任命するのか。たとえばメガラにおけるように、ともに追放から帰還して、民衆に対して闘った者達の中から任命されるように)。そしてこれらのことが選挙で行われるのか(C 1)、くじで行われるのか(C 2) (さらにこれらが二つずつ組み合される仕方がある。私が言うのは、次のようなことである。ある統治職は、一部の者がそれを任命し、他の職はすべての市民が任命する場合(A 3)、一部の職はすべての市民の中から任命し、他の職は、一部の人々の中から任命する場合(B 3)、さらに一部の職は選挙によって、他の職はくじによって任命する場合(C 3)。

これらのそれぞれに違った基準には、それぞれに六つの方法があるだろう¹⁹⁾。すなわち、すべての市民が(A 1)、すべての市民の中から(B 1)、選挙によって(C 1)任命するか①、あるいは、すべての市民が(A 1)、すべての市民の中から(B 1)くじによって(C 2)任命するか②、あるいはすべての市民が(A 1)一部の人々の中から(B 2)選挙によって(C 1)任命するか③、あるいは、すべての市民が(A 1)一部の者の中から(B 2)くじによって(C 2)任命するか²⁰⁾④、「市民すべてからという場合」には、例えば部族毎、行政区毎、氏族毎のように一区域ごとに任命し、そしてそれが最後にはすべての市民全体に行き渡るまで行うようにするか、あるいは常に市民全体から任命するか、どちらかである。またある統治職は一方の仕方(選挙)で、ある統治職は他方の仕方(くじ)で任命される⑤・⑥。さらに任命者が一部の市民である場合(A 2)、(1)すべての市民の中から(B 1)選挙で(C 1)選ばれるのか⑦、あるいはすべての市民の中から(B 1)くじで(C 2)選ばれるのか⑧、あるいは、一部の市民の間から(B 2)選挙によって(C 1)選ばれるのか⑨、あるいは一部の市民の間から(B 2)くじによって(C 2)選ばれるのか⑩、あるいはある統治職は一方の仕方(選挙)、他の統治職は他の仕方(くじ)で選ばれるのか⑪⑫、いずれかである。私が言おうとしているのは、ある統治職は市民全体の中から選挙によって、他の統治職はくじによって⑪、くまたある統治職は

一部の人々の中から選挙によって、他の統治職はくじによって任命される^⑫ということである。²¹⁾従って組み合わされた二つの方法を除けば、十二の方法が生じる。

さて、これらのうちの三つが²²⁾民主制的な任命方法である。すなわち、すべての市民がすべての市民の中から選挙によって、あるいはくじによって、あるいはその双方によって任命するという方法である。すなわち、ある統治職はくじによって、他の統治職は選挙によって任命される。しかし市民全体が同時に任命するというのではなく、(交代で)すべての市民の間から、あるいは一部の市民の間から、くじによって、あるいは選挙によって、あるいはその双方の仕方によって、ある統治職はすべての市民から、ある他の統治職は一部の市民の間から、くじによるか選挙によるかあるいはその双方の仕方によって任命すること(その双方によるとは、ある職はくじで、ある職は選挙で、という意味である)は、「国家体制」にふさわしい。また、一部の人々がすべての市民から、選挙によって、あるいはくじによって、あるいは双方の仕方によって、ある統治職はくじによって、他のある職は選挙によって任命する方式は、寡頭制的な方式である(しかし、双方の方法によるものの方がよりいっそう寡頭制的である)。しかし、ある統治職はすべての市民の中から、他の統治職は一部の市民の中から任命するのは、貴族制的な「国家体制」であり、あるいは、ある統治職は選挙によって、あるいはくじによって任命するものもそうである。しかし一部の市民が一部の市民の間から選挙によって任命するのは寡頭制に相応しいやり方であり、また一部の人々が一部の人々の間からくじによって任命するものも寡頭制的である。(これは、実際に生じないとしても、同様に寡頭制的なものである)、また一部の人々が一部の人々の間から、双方の仕方によって任命するものも寡頭制的である。しかし一部の人々がすべての人々から、あるいは、すべての人々が一部の人々の中から選挙によって任命するのは貴族制に相応しいやり方である。

こうして、統治職についての任命の方式はその数については以上のようにあり、国家体制にもとづく区別も以上のようなものである。しかしどの方式がどのような統治職にとって有益であり、その統治職の任命はどのように行われるべきかは、統治職の権能が何であるかが明らかになるのと同時に明らかにされるであろう。私が統治職の権能というのは、たとえば、国家収入の権限や

防衛の権限のようなものである。実際、將軍の権限や市場の交易に対する管理権のように、統治職の権能の種類はそれぞれに相違している。

(B 1) 「合唱隊後援者」に、バーカーは次の注を加えている。

「公の演劇祭における合唱隊の費用を整えることは、費用のかかる仕事であった。その仕事に就く者を、アテナイの部族は順番に引きうけた。」

(B 2) バーカーは、「評議会」(Boulē)、「予備評議員」(Probouloi)に対して、次のような注を加えている。

「多数の成員〔アテナイでは、くじで選ばれる500人の成員〕を持った評議会(Boulē)は、アリストテレスの見解では、民主制と両立する。そしてそれは民会の傍らに立つ第二院のような位置を持っている。少数の成員(おそらく選挙によって選ばれる)からなる予備評議員 probouloi の機関は、アリストテレスの見解においては、評議会とは違った性格を持っている。それは、民主制の第二院の性格を持たず、むしろ民主制的な評議会に対する寡頭制的な抵抗あるいは制御という性格を持っている。Probouloi は法案提出の手続きのための委員会を構成する。彼らは、アテナイでは短期間——B. C. 413年のシシリア遠征の終焉の後の一年という期間——だけ、存在した。通常は、500人の評議会が民会のための事務を準備した。」

第十六章

なお残っているのは、国家の三つの構成要素のうち、裁判をする部分について言及することである。しかし、この方式についても、前と同じ原則にもとづいて理解されるべきである。すなわち法廷の種々の相違は三つの指標に、すなわちどのような人々から構成され、何について扱い、どのように任命されるか、にもとづいている。どのような人々から、というのは、すべての市民からか、あるいは一部の人々からか、ということであり、何を扱うか、というのは、法廷の種類はどれ程あるか、ということであり、どのように任命するか、ということは、くじによってか、あるいは選挙によってか、ということである。そこでまず第一に、法廷の種類はどれ程あるか、を規定するこ

とにしよう。その数は八つである。一つは、執務報告審査に関する法廷であり、他は、誰かが公益を侵害する場合のものであり、もう一つは、国家体制に関係する事項を扱うものであり、第四には、統治職にある者と私人とに対して、両者における罰金をめぐる争いを扱うものであり、第五は、私人間の取引きで、しかも規模の大きなものを扱うものであり、またこれらの他に殺人と外国人を扱う法廷がある(ところで殺人に関する法廷の種類も色々あり、同一の裁判人の下であれ、異なった裁判人の下であれ、故意による殺人に関するものと不本意の殺人に関するものと、殺人をしたことは告白するが、その行為の正当性について主張する事件を扱うもの、そして第四に、殺人のために逃亡した者が、帰国後告発される場合を扱うもの、である。この第四のものは、アテナイではたとえばプレアットの法廷²³⁾がそうであったと言われている。しかしこのような事件は、あらゆる時代を通じて大きな国家においてすら、稀にしか生じない。外国人に関する法廷の一つは、外国人を訴える外国人のためのものであり、他の一つは、その国の住民を訴える外国人のためのものである)。さらにこれらすべての法廷の他に、一ドラクメとか、五ドラクメとか、あるいはわずかにそれを上まわる額の小さな取引きに関する法廷がある。というのは、このような事件についても、多数の裁判人の前に提出されるには及ばないが、それでも採決は必要であるから。

しかしながら、これらの法廷や殺人を扱う法廷や外国人の扱う法廷については、この程度にしておき、政治的市民的な性格の法廷について論ずることにしよう。これが立派に行われていなければ、内乱が生じ、国家体制の変動が生じるであろう。その場合、確かに、すべての市民が先に区別されたすべての事件に関して裁判をする場合、その裁判人は、選挙によって任命されるのか、それともくじによって任命されるのか、それとも全員がすべての事件に関与する場合、そのうちある事件については、くじにより、他の事件については選挙によって任命されるのか。それとも若干の場合、同一の事件について扱う裁判人のうち、ある者はくじで、他の者は選挙で選ばなければならないのか、のいずれかでなければならない。こうしてその方法は、数の上で四通りある。しかし、一部の市民が裁判人になる場合も、これと同じ数の違った方法がある。すなわち、今度もまた、あらゆる事件について裁判する者が、一部の人々の中から、選挙によってか、くじで選ばれるか、あるいは

事件のあるものについては、くじによって、他のものについては選挙によって選ばれるか、あるいは、いくつかの法廷では、同一の事件に関与する裁判人を、くじによる者と選挙によって選ばれた者から構成されるか、のいずれかである。

こうしてこれらの方式は、先に言われたように、すでに述べられた様式に対応するものである。

さらに、同一の法廷で両方の方式が結合されたものもある。私が言おうとしているのは、たとえば、ある種の事件では裁判人が市民すべてのうちから、また他の事件では一部の人々から、またある事件では両方から選ばれるということである（両方からというのは、同じ法廷の裁判人のある者は市民全員のうちから、ある者は一部のものの間から任命されるような場合）。またそれらはくじによるか、選挙によるか、あるいはその双方によるかして任命される。

こうして法廷はどれ程の数の方式があり得るかが、述べられた。これらの方式のうち、第一の方式、すなわち、すべての市民の中から選ばれ、すべての事件について裁判するという方式は民主制的であり、第二の方式、すなわち、一部の人々の中から選ばれ、すべての事件について採決を下すのは寡頭制的であり、第三の方式、すなわち、一部の者はすべての市民より選ばれ、他の一部は一部の人々より選ばれる方式は貴族制的であり、また「国家体制」にふさわしいものである。

(注)

- 1) *καινίξειν* → D *κοινωνεῖν*
- 2) プラトン『ポリティコス』302E—303B
- 3) アリストテレス『気象学』第二巻第六章
- 4) プラトン『ラケス』188D、『国家』第三巻399A
- 5) プラトン『ポリティコス』291D
- 6) ヘロドトス『歴史』第三巻二十節
- 7) プラトン『国家』第二巻369B—371E
- 8) プラトン『国家』第八巻557B—558C
- 9) ホメロス『イリアス』第二歌204
- 10) *τῶν καθόλου* → D では削除
- 11) D版では、ここに *τοσσηνδε οὐσίαν* が挿入されている。
- 12) この部分には、テキストの破損がある。ロスの修正に拠った。
- 13) プラトン『国家』第八巻、第九巻

- 14) アリストテレス『ニコマコス倫理学』第一巻第七章、第二巻第六章、第七巻第一三章、第十巻第七章
- 15) *φυλαρχοῦσι και σπουδαρχιῶσι* → D *φιλαρχοῦσι και βουλαρχοῦσι*
- 16) 前6世紀ミレトスの詩人 (Diehl, 12)
- 17) シケリア東部のカタナの立法者
- 18) アテナイとスパルタ
- 19) D版では、四つとなっている。以下「十二の方法」まで、O版とD版は、かなりの相違があるが、本訳は、基本的にO版に拠った。
- 20) < > の部分は、ロス挿入文に拠った。
- 21) < > の部分は、ロス挿入文に拠った。
- 22) D版では、二つとなっている。
- 23) アリストテレス『アテナイ人の国制』第五七章